
世界と浮島と破戒神 ~ Levitation World ~

吐露非狩古鬱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界と浮島と破戒神 ｝ Levitation World ｝

【Nコード】

N4911F

【作者名】

吐露非狩古鬱

【あらすじ】

（誠に勝手ながら、タイトルを変更しました。ご了承下さい）『世界変動』で崩壊し、書き換えられた世界。国家、経済、領土は消滅し、人類が死にかけた——海上多層構造国家機能都市、「フロート」。成宮ツカサはこの都市で、新たな戦乱と崩壊を目の当たりにする——

ブローグ

ここは……何処だ……？

「……、台……ビルの……下」

そう聞こえた。

……いつだ……？

「……38年12月08日……時……8分……秒」
今度は随分正確に聞こえた。

12月……日本……っ！

少年は左腕の激痛に跳び起き、更に頭を強かに打ちつけてから上半を起こした。

暗い。少なくとも夜のはずだ。そう聞こえたと思ったけど。

左眼が眩しい。思わず眼をすがめてから、少年はようやく気付いた。辺り一面は火の海、人工的な光なんか何処にもない。

「何だよ……これ……」

すぐ左手の車は赤い焰に焦がされ、そのシルエットを映し出す。

アスファルトは砕け、電柱とビルはドミノ状態だ。

遠くで低い地響き、多分余震か爆発だろう。

そう——地震だった。

警戒発令から僅か3分の本震。地測局の怠慢に悪態をつきながら走って、瓦礫の下だ。

「——起きたかい？」

この状況では随分アンバランス極まりないことを言われた。

右の瓦礫の山。その上に佇む少年。よく知らない。思い出せない。出会って、まだ間もないはずだ。

でも、親友だった。

灯に照らされる横顔は端正で、整っていて中性的だ。

その顔には僅かな微笑みを浮かべている。ただその背中は何と無くよそよそしい。

上空を甲高い爆音が飛び去った。F-210K——（国衛軍の主力VTOL型戦闘機）。三機。多分軍も近い。

少年は

「じきに国衛軍が救援を開始する。13分後にはこの地区に入るよ

——君は、助かる——」他人事のように言った。

「君は……」どうするんだ、と続けるのを、遠く巨大な轟爆音が邪魔した。

二人の目線の先。高く偉容を誇ったその山は空に紅蓮の焰を噴き上げながら咆哮する。

死んだ火の海の東京、かつてのフジは存在を誇示するかの如く、辺りを煌々と照らし、灰の雨を降らせた。

二人は、ただ見つめることしか出来なかった——

『世界変動』勃発から7ヶ月と12日。

フジの爆発は、極東の弓状列島を急速に引き裂き始めた——

第一章 フロートシティ

二世紀後――

成宮ツカサは退屈と睡魔と腰痛との闘いを繰り広げていた。

教卓を前に旧世紀の大規模地殻変動について熱弁を奮っておられる、トンボ眼鏡、禿頭、痩せぎすの教授をウンザリした目で見ていた。

旧世紀大規模地殻変動くらい、高校一年になるまでにはその大体の様相は当たり前の知識として教えられる。それが元で、半世紀近く大戦が続き、人口過密がある程度緩和されてしまったことも。

今日は金曜日。最後の授業中。

といっても明日の予定なんか無い。この都市に何かエキサイティングなことを求めてはいけない。ただ漫然と過ごすのが一番。勿論主観だけど。

スピーカーが終業のチャイムを奏でる。

通称名「キュウリ伯爵」（命名者・由来共に不明）はその熱弁を仕方なく中断し、眠りこける生徒を一瞥して退室した。

「ツカサーっ！」

聞き慣れた声の方に目を向けると、出入口には一人の少女。どうやら隣のクラスから走って来たらしい。

「世界歴史のノート、写したんでしょうね！」

「あ、悪い、まだだったわ」

やや釣り気味の目で下から睨まれる。

彼女は美仲 名雪。同い年の腐れ縁。

「ハア？ いつ貸したか分かってんの！？」

「まだ10日じゃねえか……」

「もう10日よー!!」

そう言ってから、頭と肩まで伸ばした髪を大仰に揺らして溜息をつく。

「月曜日にノート提出なのよ…明日持つてきなさいよ!」

そう言い残してから返事も聞かず足早に立ち去った。

「…家まで来いつてか…?」

「成宮あ上手くやったなあ……」

ニマニマ顔で肘で突くのは同じ教室の男子、朝宮 津。

「わざわざ幼なじみにノートを借りて、更に返さないことで彼女自ら自分に寄ってくるように仕向け、家まで来いと言わせる…なかなかの策士やなあ」

「お前がノート貸さねえからだろうが!」

しかし悪びれる様子も見せずしみじみと、

「しかしお前もツンデレ萌えだったんだなあ……」

「何の話だ!」

朝宮はそれでもこの学園で十指に入る優等生だ。名雪でも多分敵わないだろう。

更に日本が所有する海上多層構造国家機能都市本島、『赤石』の最上層に位置する『赤石フロート交通公社』、総務部長の息子。

しかしそう言えばあっちも

「お前なんか成宮重工の御曹子じゃねえか」と突っ込んでくる。

「成宮重工って言えば世界トップシェアの軍需産業企業だろうに」

「…いいことなんざ無いよ」

こういうときは大概つつけんどっけんに返してしまう。

（気に入らない……親父なんか……）

ただその親父さまのおかげでこの都市の発展があった事も事実だ。

海上多層構造国家機能都市、「フロート」(FLOAT)。

およそ二世紀前の大規模地殻変動の影響で沈下した大陸に巨大な支

電話の向こうの声は寝起きの頭に響くことも無く落ち着いていた。

「成宮君。お久しぶりです」聞き覚えがある。

「あ……嘉島さん………」

「折り入って話があります。第七層成宮重工本社まで早急にお越し下さい」

「第七層……？中部層支部じゃ、ダメなんですか？」

嘉島さんは少しの間も置かずに慇懃にまくし立てた。

「貴方をご所望の方は本社にしかおられませんから。貴方をお呼びしているのは——社長です」

そのとき忘れかけた親父の顔が浮かんだ——

第一章　了　忍び寄る破滅

その男は苛立ちを隠しもせず、黒いカーペットの部屋に踏み込んだ。後ろで鋼鉄の自動ドアが空気音と共に閉まる。

薄暗い部屋は大量の液晶画面とコンピュータで埋め尽くされ、その表示を刻々と変化させている。広い部屋は慌ただしく喧噪の最中だった。

「どういうことだ！何隻確認した！！？」

中央の大画面の前に座るオペレーターが即答する。

「衛星写真でフロート型空母1隻、準大型艦2隻、小型戦艦が7隻を確認済みです。現在水中波で海中を索敵中」

「司令！現在不明艦隊は『黒波』から東方402キロ地点で依然進行中！」

指令席に着いた男は分析を開始した。近いうちにこの所属不明艦大隊は領海に入る。旧ハワイ諸島沖からか、もしくはさらに近く。

（衛星からの捕捉を顧みずに本島への突入。どう考えても無謀だ！

…それとも遠距離支援部隊か……………）

「『黒波』に通達！第二種警戒配備。偵察機を発進させる！」

命令は復唱され、ネットワークで確実に伝達され始めた――

久しぶりに見た『黒波』から発進するASF-03Sをツカサは第七層へ向かうヘリの中から眺めた。

普段住む第二層からはまず『黒波』は視認できない。

七層の第4区に位置する成宮重工本社はまるでデカイバームクーヘンの上にメインローターの無いヘリコプターを無理やり立てたような形状をしている。

クーヘンの屋根に敷き詰めた太陽光パネルがまぶしく輝く。

ビル中間点のヘリポートで待っていたのはやはり嘉島さんだった。

嘉島さんの短く切り詰めた髪が荒々しく乱れる。それを直す気配も見せずに、

「お待ちしていました。…その鞆は？」

そう聞いた。

「ああ…ちよつと友達に借り物してたんで、帰りに返そうかなと…」
借りものとは当然名雪のノートだ。

「宜しかったらその場所までお送りしますが」

「お願いできますか」

そろそろヘリの騒音が気になってきた。

嘉島さんはそれを感じいたように入口へ俺を勧めた。

歩きながら話を進める。

「社長…お父様の御用の件については聞かされては、いませんよね？」

「はい。オヤジ…父が電話してくるはずないですし……」

嘉島さんは無言で自動ドアをくぐった。

エレベーターの中で嘉島さんはこう切り出した。

「最近、我が成宮重工の機密漏洩が著しい。産業スパイの可能性も洗っては見たましたが、明らかに流れている情報の性質がおかしい。

新型軍用兵器の件は」

「ご存じ無いです」

「結構…。その情報が重点的に外部に漏れています。しかも、データバンク自体には何の痕跡も残っていませんでした。何重にもプロテクトされ、対ハッキング用防衛システムを張り巡らせ、隠しログも幾重に隠されています。しかしその全てを回避し、わずか数分で兵器情報のみ抜き出しています」

「……………」

最上階に着いてドアが開く。

「個人のレベルではありませんし、営利目的でもありません。通常のハッキングなら、ね」

「どういことですか……？」

そう言つて、すぐ目の前にあつたイカツイ扉の前でカードキーを取り出す。横のスリットに手早く滑らせる。

付属の小さな画面に、

『OPEN』の表示。

扉はそれに従うように開いた。

その部屋には今までとは違う、もっと近代的な蒼い空間が広がつていた。

液晶にはデータが下から上へスクロールし続け、両脇の本棚（と言つていいのだろうか）はメモリーカートリッジで埋められている。

「我が社のデータを一括して閲覧できるのはこの部屋と、地下のマガーステムだけです。一般社員はこの人工知能に、必要なデータのアクセス許可を申請しています。しかし直接外部の人間が兵器情報を取り出せるとしたら、同じく先ほどの2つの部屋だけです」

「いいんですか？ おれも外部の人間ですけど……」

「……率直に聞きます。このデータバンク解放のパスコードはご存知ですか」

「ハイい！？？」

思わず素つ頓狂な声を上げてしまった。この部屋に来たのだから初めてだ。データバンクの存在もたつた今知つた。

その俺にパス……？

「そんなもん……知つてると、」

「知つているはずだ」

それは有無を言わせない物言いだつた。

「このロックを解放するために様々な言語、数字、文を羅列してみましたがどれもハズレです。社長だけでは無い、貴方に関する数字、ワード、思いつく限りを調べました」

「その、どれも違つた……？」

「……はい」

当たり前だ。親父が…俺の誕生日で、名前で、ロックをかけるわけない。あの親父が――

「偵察機より入電！不明艦隊が領海に侵入！」

軍司令部は混乱していた。この規模の艦隊を突入させるなど前代未聞だ。

何の通告もなしに戦闘速度で領海侵犯することも。

「最後通告だ。迎撃部隊、第一攻撃飛行大隊、第四防衛艦大隊を出撃させる！」

そう命じた。

「飛行隊は順次発進。ESTAは戦闘待機」

「フェーズドアレイ起動。ペトリオット待機！」

オペレーター達は次々と命令を出していく。

「司令つ。都市相からお電話です」

都市相とはいわば首相のことである。

司令官の男はいささか緊張しながら電話に出た。

『領海侵犯についてはどうなった……？』

スピーカーは重い、威厳垂れ流しの声を指令の耳に届けた。

「現在鋭意対処中です」

『……攻撃隊が出撃しているか？』

「最後通告です。念のため、攻撃の許可を申請いたしますが」

『司令官は君だ。君がその状況に対して適切かつ可及的速やかに攻撃が必要だと判断した場合は自由にしたまえ』

「大変明瞭なご命令、感謝いたします」

精一杯の嫌みを言い残してから通信を切った。

領線を踏み越えた艦隊は戦闘機群を発進させていた――

「I confirmed ESTA. I advise it
on a start in diversionary ta
ctics」.

（エスタを確認。陽動の開始を進言）

「Start a strategy」.

（許可する）

「Yas, sir」——

第二章 序 敵襲

「何か思い付きませんか。思い出しませんか。お父上に関して」
嘉島さんは諭すように、尋問のようにまくし立てる。

「覚えてると、思いますか」

「何かあるでしょう？君も人の子だ」

「親父だってそうでしょう……！」

「……………」

それは思わず滲み出た感情。

「失礼…社長は仕事人でしたから」

「…慰めてます？」

嘉島さんはすまなさそうに少し微笑んだ。

「こういう物言いしか出来ないもので……」

その先に言った言葉は轟音と衝撃にかき消された――

巨大な鉄甲弾は第七層の柱の一つをあらかた吹き飛ばした。
その上に位置する区画が大きく揺らぎ、傾ぐ。

――司令部の大モニターには赤い『DANGER』の表示が明滅する。

「第七層第5区支柱崩壊！不明艦隊の長距離鉄甲砲弾です！」

「先行部隊がフロート空母にて巨大な艦載砲を確認。攻撃指示を要請しています！」

薄暗い部屋はディスプレイの赤で照らされ、無駄に危機感を煽る。

「現時刻を持って、不明艦隊を敵勢力と認定！拡翼陣形にて敵艦隊を包囲！」

「フロート全域に緊急避難警報発令！行政機能を軍支部へ転移。」

黒波『は戦闘態勢へ移行！！』

再び、今度はさらに大きな衝撃が部屋を揺らした。

敵艦からの長距離狙撃砲は正確に『赤石』を削って行った。
大きな衝撃はツカサ達の部屋を容赦無く震わせる。

辺り一面の画面はビル、第七層の損害状況を更新し続ける。

嘉島さんは一瞬の間を置いて携帯を取り出す。

「何だ！…まさか敵襲か！？」

恐らく相手は部下だろう。微かにスピーカーから慌てふためく声が漏れてくる。

『詳細は不明です！第七層の支柱が爆発しました！現在確認中です……… 出ました！遠距離狙撃です！！』

その声と同時に耳障りな警報が鳴り響く。

「全域緊急非常警戒発令………」

嘉島さんは携帯を閉じながら呻く。

俺は半分置いて行かれてそうなので取りあえず呟く。

「まさか……」

「多分、直ぐに行政府からの避難令が出る。行政機能は軍管轄に移ったはずです。ある程度の情報は………」

『赤石』に雑音と共に落ち着き払った女性の声が響き渡る。

『『赤石』行政府よりお知らせします。現在敵勢力の砲狙撃に対処中です。市民の皆さんは速やかに中央シェルターへ移動して下さい。繰り返します……』

今頃街中のテレビ、信号、交通情報板が『EMERGENCY』を点滅させているはずだ。

実際に見たことは無いけど。

「ツカサ君。話しは後だ。ビルの直結シェルターへ……！」

その時、弾丸の近付く、ハウリングみたいな音が一際大きく聞こえた。

その大モニターは逐一、放たれる弾丸、ミサイル、戦闘機を残らず表示している。

「指令！敵艦隊を有効射程圏内に捉えました！」

「全艦、一斉射！！」

命を請けてから僅か4秒後には艦載砲が火を噴いた。

旗艦の砲撃と共に拡翼陣形の艦隊が一斉射を開始する。

「Let a fleet retreat！」

（艦隊後退！）

「Diversi onary tactics start！」

（陽動作戦開始！）

「Yes, sir——」

『赤石湾』の状況を電子的に示すモニター。

その画面が敵艦隊の後退を表示する。

「敵艦隊後退します。作戦は」

「継続する！このまま包囲し殲滅する！」

しかし、ある程度落ち着いていた表示が突然真紅に染まる。

原始的なビーブ音が警報を鳴らす。

「新たな敵反応！『赤石』西方からです！空中揚陸艇2機！！」

「何イ！！？」

ツカサはビルに直撃した弾が確かに別方向からだと感じた。

それに音が軽くて近い。今までの遠い轟音が止まっていた。

「囲まれた、んですか……？」

嘉島さんは窓に走った。

頭上を戦闘機が通り過ぎていく。その時やけに近くから弾丸が飛び、隣のビルを蜂の巣にしていく。

「……！！まさか……！！！」

その目は驚きに満ちて、見開かれている。

「エスタ……！！！」

聞きなれない単語だった。エスタ？ESTA？

嘉島さんの横に走って同じ方向を見る。外はまるで地獄絵図だ。空の大型艇から飛行機が、中空に位置している機からは、人型のゴツイ鉄の人が現れる。

「何ですか…！あれ……………」

それはどう考えても道との対比がおかしい。鉄人の足元で惑い、惨殺されていく人々との対比が。

深緑の胴体から、筋肉質といった感じの鉄の腕が伸び、腕には巨大なライフルが備えられて…いや握っている！

ずっしりとした脚部は車を容赦なく踏みつぶす。背中には小型のランドセル。

そして頭部は、一つ眼の禍々しくも、青く冷たい光点。額から延びたアンテナは一角鬼のようだ。

なにより異様なのはその大きさ。車の大きさと対比しても、

「12・7メートルです」

「え……………」

「12・7メートルの鉄巨人『Every situation Tactical Armament 汎用人型戦術兵器』。E・S・T・A・」

ツカサにとつては理解できない事ばかりだった。鉄巨人だの汎用人型…なんだっけ。

——ただ、怖かった——

「…………でも、あのタイプ…我が社が製造した物じゃない……………」

「どういうことですか！？」

「え…あ、ああ……………」

半分俺の存在を忘れていたようだ。ツカサの胸が少し熱くなる。

「今の独り言の通りです。エスタは成宮重工が『黒波』の要請により開発した新機軸の兵器。最終採用型の型番はESTA-014、『イオファイエ』。アレはそれと酷似している」

「まさか流出していた情報って…」

「アレの可能性は多分にありますね。まさか横流し……っマズイ！」
『アレ』はこちらに気づくようにして単眼を向けてくる。「握っていた」ライフルの銃口の矛先がココを——通り過ぎて行く……？

「ザスタバ M109！？上を狙ってる！！」

ザスタバとは多分敵のライフルのことだろう、とツカサは見当をつけた。

それよりも、

「上って……！」

言い終わらないうちに鉄人の腕が握るライフルは巨大な火と、大袈裟な爆音を響かせ暴れまわる。

黄色いラインが一瞬伸びた。次の瞬間——

派手な揺れと共にガラス片と瓦礫が降り注いだ。目の前の窓も粉々に碎ける。

突風が身体を掠りかけたが嘉島さんが引き留める。

「下に行きます！急ぎましょう！！」

走りだした後ろの壁が砕け散る。弾が直撃したのだろう。

嘉島さんは、

「ザスタバ M109 はエスタ用の鉄甲対物ライフルです。ビルの一つなら楽に貫通します……！！」と、わざわざ絶望的なことを教えてくれた。

『黒波艦隊』はまさに阿鼻叫喚と化した。

後ろからのエスタの狙撃。

さらにフェーズドアレイレーターによるパトリオットミサイルの支援も途絶えた。恐らく撃破されたのだろう。

「艦隊との連絡が出来ません！電波妨害の可能性も……！」

「今になってか！？……まさか作戦が筒抜け……！」

「命令はネットワークです。ハッキングの可能性も」

通信席の男は冷静に告げた。

「…通信塔は！」

「破壊されました」

「これだけの規模を利用しての陽動作戦…本気が…！」

美仲 名雪は上層から伝わる地響きを、半信半疑ながら大型兵器のものかと感じていた。

戦闘機のジェットも確かに聞こえたが、もっと低い、重鈍な響き。異常に馬鹿デカイ銃声（よね？）と象かティラノみたいな足音（…よね？）が巨大な鉄の塊を連想させた。

「弟のロボットアニメのせいかしら…」 そんな言い訳を試みた。前方にはシエルターのロツク。

「…見えた……！」

「状況は最悪ですね…」

地下シエルターへの道は完全にこつた返していた。階段もエレベーターも喧騒に包まれている。

「エスタの本格投入、陽動作戦の可能性も否定出来ません。だとすれば、艦隊が浮足立っているかもしれません」

「その、エスタは『黒波』には無いんですか？」

「納入済みです。先程のEST A - 014型が配備されているはず

……」

エレベーターと階段は一向に落ち着きを見せない。

「でも…見ませんね…014型…」

外にいるエスタは見た限りでは皆、模造品だ。

「……………明らかに本土の出撃数が少ない…」

嘉島さんの頭もフル回転を見せていたが、情報が少ない。いくらなんでも完全な分析は出来ない。

「民間被害甚大！成宮重工ビル、交通公社、A E I C本社。現在防衛ラインを構築中！」

「航空隊は！！」

「敵エスタタイプに対応していますが、数が多過ぎます！」
指令本部はその機能を殆ど有していなかった。

『黒波』と敵艦隊は距離があり、黒波艦隊は包囲されつつある。空母に積まれたままのエスタなどただの棺桶でしかない。
フロート空母はそれを見越したかのように接近してこない。
戦力値は、塗り変わったのだ。

「……避難状況は」

「居住区画層の避難率は84%。上層は混乱が大きく、41%しか……」

数秒の沈黙が起きる。指令室は静まり返る。

「……A E S M Sを起動させろ！」

「まさか……しかし電力供給に、友軍、都市機能全てが——」
「分かっている！エスタ部隊に退去命令だ。対A E S M S施設へ退避！」

「——了解……！」

オペレーターはまさかといった表情でそれを起動させた。
コンソールが赤く光る。無骨なレバーを最大まで押し上げる。

A n t i E l e c t r o n i c S t o p M e c h a n i c
S y s t e m

その両刃の剣が放たれた。

ツカサ達の廊下は瞬時に暗闇に包まれた。

ただでさえ騒ぎ狂っていたエレベーターホールは混騒を極めた。

非常灯すら消えている。どんな緊急事態でも自家発電が働き、エレベーターが復旧するはず。なのに――

嘉島さんは携帯を引つ張り出す。しかし、

「電源が、落ちてる……」

何度電源を入れても動かない。念のためツカサも携帯を出す。

やはり同じだった。

「どうなってるんだ……」

街は一瞬のうちに静まり返る。地上（と言っても全て人工）に動くのは生き残った避難民だけ。

あれだけライフルを乱射しつつ進撃を繰り返した鉄人はその動きを止めている。

『Anti Electronic・Stop Mechanic System』

「反電磁質電気機器強制停止システム」。現在の駆動式兵器はそのほとんどが内燃機関を持たず、動力源をバッテリー、ユビキタス発電（廃熱発電）、外部電源に頼っている。

「Perhaps. The system which has interfered the power supply of the internal organs, and make a motor and operation processsing late electromagnetically.

」（恐らく、内装電源に干渉し、電磁的にモーターや演算処理を停滯させるシステムです）

「Was it completed?」

（完成していたのか：？）

「Anyway, the use of ESTA is impossible. I let aviation strike force withdraw.」

（とにかく、エスタは使用不可能となります。航空隊を撤退させます）

「Let me leave ESTA which can move rapidly. The support people immediately of the pilot collect it. Withdraw!」

（稼働可能なエスタは早急に撤退。支援部隊は搭乗者の回収。撤退する！）

「司令、敵艦の発光信号を確認!」

「この引き際とはな……」

「我が方の本土部隊も機能停止状態。レーダーも使用不可です。残ったペトリオットの効果は期待できませんが」

「だろうな。稼働可能部隊は敵を掃討!もしくは拿捕しろ。成宮の件もある……」

司令部は再び慌ただしく指示が飛び交った。無線指示もうまくいかないため効率的な伝達は出来ない。

事態は可もなく不可もなく。

それにタイミングを見誤らなかった敵艦隊の撤退。並みの指揮官では無い。

「フロート級空母をリンクさせて調査しろ。分かりませんでは、行政も納得しないだろう……」――

第二章 世界

3時間程の間、敵勢力の全容は判明しなかった。

ただ、フロート級空母、そしてエスタタイプの投入など、特徴はあり過ぎるほどだ。これは明らかな示威行為。

「拿捕したエスタは、ESTA-014型『イオフィエ』に酷似しているものの、そのパーツの殆んどがアメリカ製でした。

ただ基本構造は014型をモデルにしているため、AESMSでの駆動停止に成功したものと考えられます」

司令官は事後処理に追われる指令室で都市相に説明した。

「可能性として敵勢力がアメリカ、ということか」

「否定できません。ただし空中揚陸艇の所属は不明です。フロート級は、三年前に破棄された『キュリオテス』の可能性が高いようです」

「あんなデカ物を保管できるマリナーがアメリカにあるのか……？」

「衛星の死角を作る手段なら幾らでもあります。

アメリカ西部の汚染地帯は地上装甲艦の墓場と言いますし……なんにせよ、もしアメリカだった場合これ脅威になります。宣戦布告の危機です」

「アメリカとロシア連邦の競合もある。こちらは中華帝国と極東先進国家群しか味方がいないのだから」

中華帝国。

かつてユーラシアの東から中央を広く占拠し、その領土を拡大していた一大帝国。

だが、前大戦の折、ロシア連邦からの限定核攻撃により領土の半分以上が汚染され、現在は東南の『極東先進国家群』に首都機能を移転させ、日本の参加を求めている。

「嘉島さん！」

いささか落ち着いた成宮重工ビルの地下シェルター。まだ情報は入ってきていない。

そんなときに嘉島さんと呼んだ声は相当に慌てていた。

「些宮秘書官……？どうした？社長は！？」

ツカサは一瞬だけ父親と出会うことに躊躇いを覚えた。だがこの非常時になって父が気になるのも事実だった。認めたくなかったが。

「……社長の御子息ですね？こちらへ……」

秘書官は嘉島さんに目配せをしてから俺を引き連れた。

「何ですか……？」

些宮と呼ばれた秘書官は何も言わなかった。

シェルターの更に下。幾つものドアロックをくぐり抜けた先、巨大な球体状の部屋に来た。

上階の『情報集積室』に似た雰囲気だ。

ただし規模が違いすぎる。一面の壁に映るデータ。床にも映像と文字が溢れては流れていく。立体映像だろうが、中心にも画面が浮かぶ。

「——いきなりですみませんが」

些宮秘書官が口を開いた。本当に言い辛そうに。

「貴方の御父上が亡くなられました……」

「……………！！？」

唐突な衝撃がツカサを襲った。

今まで父が死んだって絶対にショックも、泣くことも無いと思っていた。なのに、ツカサの胸に空白が出来ていく。

分かっていたはずだ、父が、自分の本当の父親で無い事——

「心中、お察します……」

済まなさそうに些宮秘書官が言う。

「『アンゲロイ』！」

『はい』

突然女性的な声が聞こえる。他の誰かが居るとは錯覚しなかった。どこか電子的な声、感情が機械で付加されたような淡々とした声が返事をする。

「社長の…亡くなった時の映像記録はあるか」
胸が痛む。

『——存在します。投影しますか？』

秘書官がツカサの顔を見る。

何を見せたいのかは分からなかった。だが、

「…お願いします」

『了解しました』

中心の映像が変わる。

『『アンゲロイ』に接続しろ…パスワードは……ヴァイナツ
ツハ…』

ここで終わった。

秘書官が一枚のカードを出す。

「これが社長から託されたカード。『アンゲロイ』に接続すること
で見えます」

嘉島さんがようやく口を開く。

「ヴァイナ…何か思いつきますか？」

集積室の時とは違う優しさと慈愛をもった言い方。

「……ヴァイナツハテン…ヴァイナツハテン605……」

「それが…パスワード…ですか？」

親父がヴァイナツハテンを使うとしたらそれしかない。ツカサは確
信していた。

秘書は床中央のスリットにカードを入れて、それからキーボードで
綴りを正確に打つ。

「…確か、ドイツ語でクリスマスを意味すると記憶していますが…」
「はい…これです………」

俺は胸元を広げてネックレスを見せる。銀白色の鎖の先に、六角形のクリスタルが付いている。クリスタルは中央に蒼い光が淡く宿っている。

「6歳のときに貰ったんですよ」嘉島さんが目を見開く。

「ドイツのジュエリーですね？冷やされると光が六方に拡がるという……」

「冬になると蒼い結晶ができるんですよ……キレイでしょ？」

自分でも力が入らない。座り込めば立てない気がした。

秘書は手を停めていた。

「605というのは？」

「俺の誕生日ですよ……わざわざクリスマスに買ったのにね、でも唯一のプレゼントでしたよ……」

「君は一人じゃなかった——気休めですが……」

嘉島さんが肩に手を置く。

秘書官が口を挟んだ。

「開きます……」

その瞬間球体が蒼から赤く染まる。

『ヴァイナツハテン605を確認しました。コードN4911F。

シークレットデータを請求——掌握。表示には秘書官以上の同意、もしくは現状から判断して社長の遺族の許可が必要です』

「頼む」

俺は決意して言った。

赤い球体の壁面が波打つ。光が溢れるようだ。

『成宮ツカサを確認しました。表示します』

中央に画面が復活する——

「これは……！」——

『19時25分をもって、緊急避難警戒発令の解除を発表いたします』

す。各シエルターは21時25分以降、閉鎖されます。住民の皆様は……」

名雪はようやくシエルターの慌ただしさから開放された。3時間ほど前にいきなり停電してから急に轟音が消えた。

おまけにツカサに連絡しようにも遠距離携帯通信はまだ復旧していない。

ツカサと同じクラスの朝宮 津も居た。

確か学園でもトップクラスの成績。

津によれば、名雪はツカサの……そのあとは色々バージョンはあるが、『嫁』、『カノジョ』、『仲いいよね』、『ツカサはツンデレ萌え』、『将来の仲』等。そのほとんどが津の流したものだ。

「美仲。ツカサ見なかったか？」

心配しているのかしていかないのか分かりかねる。

「さあ…探してるんだけど……携帯も繋がらないし」

途端に津の顔が得意のニマニマになる。

「何よ………」

「心配かあゝ…そうだろうな、将来の仲だもんな………ウン」

しみじみと言われた。

「馬鹿言わないで！あんたの腰巾着にツカサの事さっさと聞いたら！？」

「ハイハイ………」

津の自論は『馬鹿と女には勝てない』だ。いささか偏見が入っているが名雪と知り合ったのは2年前。ツカサと出会った頃だ。

それ以来ずっと振り回されている気がしていた。

「ツカサも大変だ………」

「何か言った……？」

「イーエ」

些宮秘書官と嘉島さんは現れたデータに心底驚いていた。

「どういうことですか…？」

嘉島さんが答える。

「情報の横流しです…実際、成宮重工は5年前から赤字でした。今回のエスタ開発を、日本だけじゃなく…」

秘書官が繋ぐ。

「アメリカにもデータを流していた、ということですよ……」

やはり敵のエスタは日本の模造品だった。しかも開発元が情報の横流しなど。

「アメリカのネオシリコンを中心にエスタの工場が配備されています…生産量は膨大ですね…」

秘書はデータを呼び出しながら解説していた。赤字経営だったことは知らなかった、横流しを父親が知っていたことも。

嘉島さんが別のデータに気付いた。

「ロシア連邦にもエスタが流れつつあります。二大国がエスタを配備すればE・U・や中東に大きな抑止力となる…ロシアと中華帝国の冷戦も悪化しますね」

世界情勢が変わることは、ツカサでも理解出来た。ただ重要なのは、

「日本と中華帝国、極東先進国家群です」

ええ——と秘書官。

「この一触即発の中、日本が極先国に参加し、中華帝国と極先国にエスタを流せば、世界のパワーバランスが崩れる——」

些宮秘書官がようやく振り向いて、

「世界地図が塗り変わります——」

告げた。

事態は深刻だった。既に情勢改変は始まった。アメリカの軍事介入、アメリカ、ロシア連邦の競合。中華帝国の冷戦。

全ては成宮重工が起点になった。

「…親父は…情報操作を知って…？」

「いたようですね。………ただ、社長は一言……言い残しました

………」

ツカサが秘書官に目を向けた。

同時に赤く輝いていた球体が蒼色に戻った。再び幾つもの画面を平然と表示する。

「…貴方に…すまないと、伝えて欲しいと………それだけ言い残して亡くなりました…」

すまない…？どういうことだろう。エスタのことか、今までのことか、それとも実の父でないことを隠していたこと？

「なんでしようね…今になって…」

嘉島さんがやや無神経っぽく言う。

「失礼…。情報の横流しを社長が止められなかった、ということでしょうか？」

「分かんないです…」

秘書官が遠慮がちに言う。

「データをコピーしました。取りあえず出しましょう」

嘉島さんにも目配せする。

「そうですね…行きますか………ツカサ君」

「はい？」

「……気を落とさないで下さいね、気休めですが…」

「…はい」

一筋の涙が出たことを嘉島さんは見なかったことにしてくれた――

「酷なようですが――」

嘉島さんはそう前置きした。

「お父上は、社長は『殺された』可能性が高い」

「どういう…ことですか？」

ツカサは一瞬理解出来なかったが、秘書は同意の表情を見せる。

「アメリカは独自生産に移行しました。これ以上の大国への流出を防ぎたかったのでしょうかね」

確かにエスタは上階を狙った。高層階が崩れたため最上階が孤立し

かかっていた。社長を狙わなくとも、指揮系が墜ちればと踏んだのかもしれない。

どちらにせよ赤石最上層と第七層は被害が大きい。よくビルが崩壊しなかったものだ。

再びヘリポートが見えた。来たときとは違うヘリだ。

「使えるヘリはあるか！」

嘉島さんが声を張り上げる。

負傷者用に救護ヘリがそこら中を飛び交う。ヘリポートにはちょうど大型のヘリが着いた。

「負傷者が多いのでそちらを優先しています！」

作業員が答えた。

「陸路の状態は分かるか？」

「現在、幹線道路はごった返してます。各鉄道路線は停止、緊急ラインだけが動いてます」

しばらくビルに足止めらしい。

「……どうするね、学生寮までかなりの距離ですが」

「一度帰ります……なんとか路線見つけますから」

嘉島さんの携帯が鳴った。

（もう電子機器は復旧した……？）

嘉島さんは適当に返事をして携帯を閉じた。

「すみません、呼び出されました。見送り出来ませんが……」

「大丈夫ですよ」

一人の方がいい。

「わかりました……気をつけて」

そう言っつてその場を離れようとした時、嘉島さんは不意に足を止めた。

「ツカサ君……カバンは？」

「あ……」

名雪のノートが入ったカバン。襲撃のとき落としたようだ。

「探しておきますよ。無事は保証しませんけど」

嘉島さんは少しだけ微笑んだ。

徒歩でビルから出たが、何処へ行っても人が多い。上層の病院施設は破壊されたため、主に第五層から三層までの病院が対処している。ツカサは居住区画の第二層までの直通路を使うことにした。津たちもそのシェルターだろう。

しかし道路はあちこちで寸断され、封鎖されている。

それに直通路自体が生きているかも怪しい。

そうなったら歩くだけだ。

その間に泣いてしまわなかが心配だった。今になって――

親父は俺の実父じゃない。

俺がその秘密を知ったことを、親父は知らないまま逝った。

俺も本当の父親が誰かは知らない。『死んだ』のか、『行方不明』

なのかも分らない。

母は2歳のとき死んだ。少ししか覚えていない。

父親（実父）は俺が生まれてしばらくしてから居なくなった。そのあと母が再婚したと聞いた。父親の死亡認定がされたからだ。

だから今の…もう死んだけど…親父は実質の父親だ。

なのに俺は逃げていた。実父じゃないというだけで。

現にクリスタルネックスをいつもしていた。他人には見せなかったけど。

6歳にしては少し高価だったはずだ。

このクリスタルは特殊で、冬になると六方に拡がる青色の光を中心に宿す。6歳のクリスマスにこれを見て純粹に綺麗だと感じた。

それが最初で最後のプレゼントだった――

「親父……なんで謝ったんだよ……」

「ツカサ」

第二層までたどり着くのに1時間かった。

敵勢力の撤退から4時間。夏も少し過ぎた。8時になれば真っ暗だ。学生寮のツカサの部屋。前で待っていたのは津。

「…遅かったな」

「お前か…」

薄闇の中でも分かるニマニマ顔。

「名雪ちゃんの方が良かったかな？」

「…バーカ」

「……………親父さん…気の毒にな……」

思わず胸が熱く張り裂けそうになる。

津に罪は無いと知りながら胸倉を掴んでしまった。

「……………悪い」

「……………あや…るな……！」

苦しい。涙が出る。

「え……………」

「……………謝るなよ……………！」

胸から込み上げる悔しさ。

今まで逃げてきた代償。それはあまりにも大きくて、重い空白。

「……………」

……………

……………

……………

……………馬鹿野郎……………っ

「……………」

胸倉を掴んだ手が緩む。津は何も言わずに拳を包んでくれた。

俺は皆に守られてばかりだ。

なのに——

真夜中――

嘉島 昂は暗い瓦礫の中、崩壊した社長室に来た。

社長の遺体は回収された。明日ツカサに引き渡す予定だ。

最上層は崩落が酷く封鎖されていた。

この部屋の上はまだ搜索されていない。

「『アンゲロイ』!」

全ての部屋（トイレ除く）はマザーコンピュータ『アンゲロイ』の管理下にあり、常にオンラインで繋がっている。

『はい』

「逝くまでの社長を監視していましたね?」

『はい。記録があります』

「何故この部屋からの退去を進言しなかったのですか」

『…データが不足しています』

「……………どういことです」

『私の論理回路に矛盾が存在します』

「だから!」

『エラー666』

「答えられない…?何故だ……」

『エラー6……』

「…もういい」

『アンゲロイ』とこの手の問答を繰り返しても勝ち目は無い。

嘉島は少しだけ思案してから命じた。

「『アンゲロイ』。今の会話は消去して」

『何故でしょう?』

「第三者の介入の可能性もある――常任部長として命令します」
一瞬の間。

『了解しました』

再び静寂と風の音が部屋を支配した。

「『アンゲロイ』の反抗など初めてだ…マザーの論理回路に介入す

るとなると……」

やはり個人レベルでは無い。

「……社長は……『殺された』……」
——

第二章 胎動

成宮ツカサの父が死去したとの報はすぐに飛び交った。津も深くは聞かない。

翌日の学校は休止だった。そのせいもあってか、名雪がツカサの学生寮まで来ている。

嘉島さんの呼び出し時間は昼。まだ時間はある。

「……大丈夫…だった？ビルに居たって聞いたし……」

「心配してくれてんのか？」

「悪い…？」

「いや……」

嫌な沈黙が流れる。名雪が必死で話題を探しているのが解る。

「「あ……」」

二人の声が重なった。名雪が目で促す。

ツカサはバツが悪そうに言った。

「その……名雪のノート…失くしちゃってさ……ほら、ビルの襲撃で……」

「そんなこと言ってる場合！！？」

いきなり怒鳴られた。名雪の叱るような声が部屋に反響する。

「アンタ、お父さん亡くなったんでしょ？……なんで甘えようとかしないのよ……！私がノートの為に来たとでも思ってるの！？」

「悪い……」

名雪はノートじゃなくて無理をしているツカサの態度に怒っている。ホントに心配しているのはツカサにも分かった。だから、これ以上余計なことを考えて欲しくない。

「…ゴメン……」

「お前が謝らなくても…」

「ゴ、ゴメンって言ってるのよ！」

「分かった分かった」

「何よ……」

名雪が拗ねたよに呟く。

実際こうしていても容姿自体は可愛いんだが、長年振り回されて、今や凶悪な姉的存在である。

「ツンデレってこういうことか……?」

「何、それ?」

「い、いや何でも……」

津にからかわれた時の単語が甦った。いまだに意味がよくわからない。

「……どうするの?これから……」

「今年中の学費は払ってあるし、生活費は学校支給。日用品は今までもなんとかしてきたし……」

父の助力があつたにはあつたが言わなかった。

「何かあつたら言いなさいよ……?別にアテにしてくれなくてもいいけどさ……」

(要はアテにして欲しいんだろうに……)

「分かった……今日は帰りなよ。昼から用事でさ」

嘉島さんが呼んだのは12時頃。まだラインは混雑しているし、早めに出た方がいいだろう。

「うん……じゃ」

名雪が玄関に歩く。

ドア前で名雪は振り向いて、

「ノート……気にしないでいいからね……?」

少し笑んでそう言った。

建前だろう。ホントに何もしないわけにはいかないだろう。

ドアがバネの抵抗でゆっくり閉まる。

部屋が外界と隔てられた瞬間、名雪の居た空間が急激に萎む気がした。

第七層に向かう途中、街中の様々なスクリーンは被害状況を映し出していた。

死者429人、行方不明者502人、重軽傷者1207人。

94棟のビルが損壊。幹線道路は2割封鎖。公共交通機関は全面停止。

交信中継局は一時的にパンク状態になったそうだ。高度に都市化されたビル群はあちこちで煙を噴き上げ、重機の音が絶えない。

行政府は爆砕された支柱を破棄し、その上の区画を凍結する意向を発表した。

成宮重工の真横だ。

「成宮重工は現在指揮系統が潰滅。隣の区画が凍結されるのは？」
「知ってます」

嘉島さんはオフィスの片隅、休憩所でコーヒーを置きながら話した。
椅子を引きながら嘉島さんは、

「いくつ？」と聞いた。

「…歳ですか」

嘉島さんがコケる。

「……ミルクです」

「ブラックで」

嘉島さんが本格的に脱力する。

ツカサに渡しかけたミルクを手元に戻した。ミルクと砂糖を大量にカップに注ぎ、一口飲んでから続きを話した。

「……甘党なものでね、耐ハイで吐く」

些か疲れているようだった。ツカサはそのままのブラックコーヒーをすすってから聞いた。

「隣の区画には、ココの工場がありましたよね？」

「ええ……そこが凍結されれば、全体工業生産率は28%減ります……エスタの開発もすぐそこでしたし……」

ページに染まったコーヒーを一気に飲み干す。

「…嘉島さん疲れてます……？」

「まあね…早朝から事後処理、中央塔が閉鎖されたので作業効率が6割減です………」

今は成宮重工本社ビル、バームクーヘンの中だ。比較的損壊が少ないため業務はこちらにしわ寄せされたいらしい。

「本題に入りましょう。成宮重工のエスタ横流しは、外部の人間では君しか知りません。………どうということか解りますか………？」

口調は穏やかだったが、目は全く優しくなく、真面目だった。

「外部で知っているのが僕だけ………？」

「そう、問題は機密漏洩です」

どうということだろうか。

「僕は…喋りませんよ…？」

「解っています。問題は副社長です」

沈黙が流れる。大企業が故か、内部には何かと多い。

「副社長の内通が懸念されています………情報の横流し………どうやら彼の可能性も出てきてまして………」

獅子身中の虫といったところか。

「…で、遅かれ早かれ、貴方がその横流しを知ったことも知れ渡ります」

「消されるってんですか………！？」

ツカサは思わず声を荒げそうになる。嘉島さんは声を潜めた。

「…実は、些宮秘書官が明朝亡くなりました………」

「え………」

まさか。昨日会ったばかりで――

「『アンゲロイ』のコアルームで他殺体で発見されました。『アンゲロイ』は一切のデータを残していませんでした………」

『アンゲロイ』に居たということは何かのデータを呼び出したのだらう。

つまり、

「消された…ということですよ」

「ヤバイじゃないですか……！」

「落ち着いて。実は…軍から、成宮重工の子息、君に事情を聞いた
いと連絡がありまして……今日はそれを伝える為に招聘しました…
…」

嘉島さんの後ろのドアが開く。立っていたのは二人のいかつい兵と
若い女性士官。

「黒波軍司令部より参りました、奈々瀬・ルノ・クラート大尉です」
黒波の女性士官服に身を包んだその女性は正に堅物といった印象だ
った。

背はツカサより少し低いくらいだろうか、しかしスタイルは抜群。
長く伸びた髪は艶やかな黒。

整った顔は大人といった感じで、口元は微笑んでいたが、目は全く
笑っていない。

「成宮ツカサ君ですね…？」

分かっていて聞いている。多分嘉島さんを利用したはずだ。

「黒波軍司令部の勅により、貴方にご同行願います」

「嫌だと言ったら？」

「適当に逮捕状をでっちあげますか……？」

国家権力は強い。

「伝家の宝刀…とでも言いましょうか……これは政府命令です」
有無を言わせない言い方だった。

バームクーヘンのヘリポートには黒波の部隊章が貼られたVTOL
輸送機が居た。

翼の両脇にジェットエンジンを搭載し、火口からは煙気楼が揺らめ
く。

嘉島さんは同行が許可されなかった。

「成宮重工の情報操作についてはご存知ですね？」

「ええ…一応」

外であれだけ甲高くうるさかったエンジンは、中に乗ると全く気にならない。揺れも少ない。

遠くに見える黒波を見ながら話を聞いた。

「詳しくは黒波でお話しますが、今回の関与について貴方を聴取します」

「それなら嘉島さんとか副社長とか……………」

大尉はすかさず述べた。

「些宮秘書官が明朝、亡くなったそうですね…？」

「…………はい…………」

「その件に関してですが、『アンゲロイ』は軍が管理することになりました。」

「どうして!？」

奈々瀬大尉は、

「危険が大きいですから…………『アンゲロイ』は一切のデータを残していない…論理回路の矛盾についても答えられないの一点張り…………」
そうまくし立てる。

軍がしゃしゃり出てきた理由がやっと分かった。

「タイミングが良すぎるのと、『アンゲロイ』には何かあるってこと…………？」

「そういうことです。今後しばらくは、軍の管理下に居てもらいます」

黒波のヘリポートは潮の香りに包まれており、海鳥があちこちのアンテナに留まっている。

V T O L機はそのまま飛び去って行った。

洋上基地『黒波』――

新日本政府が置かれるフロート都市『赤石』の領空、領海の防衛を

目的とした海上敷設基地。

陸・海・空、全ての作戦に対応すべく建造されたが、事実先の戦闘で黒波側エスタは何の役にも立たなかったことは周知の事実。

「『税金の無駄遣い』といったところですね」

黒波内部は確かにやたらと近代的だった。

「こちらへ」

奈々瀬大尉のカードキーで開けた部屋は会議室だった。

ドアが外界とツカサを隔てる。ツカサが椅子に座ると電気が消えた。「現状の確認からしましょう」部屋に据えられたスクリーンに光が宿る。

「多少は把握していますね？」

「……はい」

昨日の戦闘の映像が音無しで流れる。激しいフラッシュはエスタのライフル銃だろうか。

「敵側が使用した汎用人型戦術兵器、エスタはそのほとんどがアメリカのパーツを使用していました。アメリカの示威行動にロシア連邦の軍備増強。新日本政府が中華帝国寄りになってきているのはご存知かと思えます」

世界情勢の変化はもはや復習だ。

「……僕を喚んだ用件は……？」

「率直に申しましょう……」

どこが率直なものか。

「貴方を軍轄都市に移送します——」

「はい……？」

意味が解らなかった。軍轄都市って何？

「えらく軍国主義的なネーミングだな……」

「……確かに。しかし先の説明通り、貴方は危険な立場です。嘉島常任部長も同様です。昨夜の内に殺されなかったのは奇跡です」

無表情で冷静に言い放つ。さすがに軍人といったところか。

「……お話自体は簡単です。引越しです。今の住居より離れ、下部層の都市に転居して頂きます」

「ちょ……つと待ってよ……勝手な話だけど、選べないのかよ？」

「……ほぼ決定事項ですね」

「冗談……！いくら成宮の息子だからって……！」

「貴方は甘く見ています……」

「やれやれと言いたそうな感じだ。」

「そろそろカンに障りそうだった。」

「貴方がどういう人であれ、成宮ツカサという立場は大きい。敵は明らかに成宮重工の弱体化を狙っている……」

「ホントに一言多いな……」

「失礼……まあ……私は無理強いしません」

はつきり言えば成宮重工の子息が死んでも軍にとってはどうでもいいはずだ。

必要なのは成宮重工の技術。身の安全確保など建前だろう。

「………何かあるんだ……？」

「ええ、大いに」

「………気に入らない」

ツカサは思い切りしかめっ面をしてやった。利用されるのは嫌だった。

「政府は把握していませんが……あ、これは公表しないで下さい？」

“あ、” だけ妙に女っぽかった。

「分かってる」

「……軍半管轄独立部隊『Amphitrite』（アンピトリテ）は独自の情報技術による調査で、」

再びスクリーンが光った。映ったのは世界地図。2世紀前はずっと広がったらしい。

「貴方が生まれた年、月、週にロシア連邦のある施設での混乱が確認されました」

「ロシア……？の、何処だよ？」

奈々瀬大尉がスクリーンから向き直り、目を見つめる。

「中華帝国の真北、戦略強化人類機関です」

「……………！」

ロシア連邦の南に位置する戦略強化人類機関。非公開だが、非人道的な実験が噂になっている。ただ、ロシア直属の組織なので下手に手出し出来ないと、どこかで聞いた。

「何かの被検体が反応を示した…程度の情報しか……」
偶然という気も大いにするんだが。

「被検体のデータは不明、ただその時刻に何らかの影響を及ぼした
ことしか分かっていますせんが、確かに何かがあるんですよ……貴
方には」

「The trend of Narumiya Co., Ltd.
d.？」

（成宮の状況は？）

「I confirmed large-scale reduction.
」

（大規模な縮小を確認）

「I will let you exercise the second grade.
」

（第二段階を発動させよう）

その少年は透明で巨大な、卵のような試験管で静かな眠りについて
いた。

それは静かな、長い空白の終わりであることを、まだ誰も知らない。

『……………さあ……………始めようか……………』

美しい横顔はその微笑んだ眠りを浮かべたまま、再び来たるべき時

に向け、深く沈んでいった

第二章 中華帝国

「起源から200年……長かったよ……」

「待っていたんだね…このときを」

「ああ…彼は導かなければいけない。世界を定める為に……」

「空白の一世紀……取り返せるかな？」

「さあね……まだ眠いんだ……また行くんだろう？」

「…うん。彼を呼び戻しに行かないと」

「ようやく生まれたんだ……彼は」

「成宮ツカサは……」

「…そうだ、最下層の軍轄都市、ご覧になります？」

「第一層の下の方？」

フロートは一般人が住む第一層から第八層のエリアと、第一層の下に位置する軍基地からなる。

八層はそれぞれに大きな吹き抜けがあり、下の層にミラーの併用で太陽光が入るようになっており、上に行くにつれて面積が小さくなる。

しかし第一層には吹き抜けが無い。

「ええ、少し薄暗いですが……見るだけでもかなり凄いものかと思えますよ？」

「へえ……」

黒波からヘリで出て10分程度。第一層の下に確かにもう二枚程層がある。

いくつもの工場や基地、ネオンがひしめき、そして高い建物が無い

からか広く感じる。

「うわ…なにこれ」

「軍轄都市『オケアノス』は隠れた大都市。軍管理は黒波に依存しますが、緊急政府や指令部はここに配備されます」

空中に浮かぶ都市は幾つかの柱で繋がっている。巨大なエレベーターもある。

あちこちに見える工事区画は穴から海が見えた。

「東側が基地。直結する形で北側に行政府や指令部が」

へりは中央の支柱を通り越した。

「西側は都市部。宿舎とは少し違いますが、ここで暮らす軍人も数多くいます」

「…アンタは？」

「私は上です。……暗いのは嫌なので……」

ツカサは窓から街を見つめる大尉の顔を見なかった。

何となく言い方が気になって、怖くなったから――

戦略強化人類機関――

研究員は訛りの強いロシア語で上官に報告した。

「被験体 L - 23 と L - 531 の同時相互通信脳波が観測されましたが……」

「L - 531 …？派遣体だろう」

「……確かに」

「派遣体は今何処にいる」

「…それが……」

「何だ」

上官は苛立ちげに聞き返した。

「所在が確認出来ません……」

「……何？……被験体 L - 531 の名前は？」

「シス・シエルフォード・如月」

「……被験体L-23は……？」

「研究員は恐る恐る述べた。」

「……『Persephone……』（ペルセフォネ）」

「……『破壊者』か……」

黒波指令部——

「指令！中華帝国から入国許可申請が来ました」

「中華帝国……？所属は？」

「帝国空軍第二特装隊……『神天』（シエンテン）……政府特機」

「エア・フォースワンつてところですね……」

「指令官はしばし考え込んだ後、手元のコンソールを操作した。
オペレーターに命ずる。」

「都市相に連絡しろ。それと、念のため随伴機を出す。許可が下り
次第先導しろ」

「了解！」

「何……あれ」

「名雪は友人の蒼海^{あおみ} 香恋^{かれん}とともに遠方に見えた大型艦を眺めた。

「あら……気になりますの？」

「そりゃ……あんなに大きいの……日本じゃ見ないよ」

「香恋は目を眇めて艦を確認した。」

「……中華帝国ですわね。随伴機も出てますし、入国かもしれませ
んわね」

「詳しいのね……」

「伊達に軍事に精通しているわけじゃございませんのよ？」

「なんか高圧的ね……………」

名雪は呆れながら嘆息した。

蒼海 香恋は軍人一家の出身で、そのまま軍属になればエリート間違いないだったのだが、自身が軍属になることを拒みツカサ達の学園に入った。

名雪の学生寮の隣人で、何かと理由をつけては名雪の部屋に転がり込んでくる。

「中華帝国も何かあるのでしょうね……………」

「…それより今日は部屋に帰るんでしょうね……………」

「あら？お姉様ご不満ですの？」

「それ止めなさいって……………」

中華帝国空軍第二特装隊『神天』政府特機 『朱雀』（スーツエー）

紅く輝く双翼の機体は西側から赤石に入港した。

最徐行での入港を確認した随伴機は隣に着停する。

「よく許可が下りましたね」

「何であれ一国の高官が座乗してるんだ。無下にも断れんだろう」

ツカサ達は上と黒波から聞こえる微かなサイレンに耳をすませた。

「あれは？」

奈々瀬大尉は携帯電話を開いて確認した。最新型のタッチパネルタイプ。

「ああ………… 中華帝国が入港しています。エスタの件でしょうか…………」

「中華帝国はエスタ開発は…………？」

「技術はまだ無いはずですが、開発出来る資産も規模も持ち合わせますし、日本は今回の件でエスタ開発が大きく後退しましたから……………」

「…中華帝国傘下の極東国家群加盟は」
「『渡りに舟』ですね……」

中華帝国総領事ビル――

「日本の技術力は我が中華帝国も欲している」
「ダイヤモンド産業の拡大は世界経済を左右しますし」
中華帝国から来たのは外務大使、王冠省と側近の李留美。
二人は流暢な日本語で自国の状況を語った。
「ロシア連邦の我が中華への示威活動は非常に不愉快と捉えています…」

「でしような」
「貴国のエスタ技術、ダイヤ産業…敵勢力の介入で後退を辿りつつある…そうですか？」

確かに。アメリカやロシアは今回の武力活動については黙秘しているが、いずれ日本は追い詰められる。

極東先進国家群に参加することは日本の技術力の向上と拡散を指す。中華帝国傘下の極東国家群はある意味では蛇の巣。

「日本はこれまで独立を保ってきた…我が日本は独自の軍事力で、他国の侵入を強固に拒んできた……」

「…それも危機に瀕しました」

「答えは急ぎませんぞ…？我々としても無理強いはいたくない」

「足元を見おつて……」

小声で言った言葉は、突然響いた轟音で完全に掻き消された――

黒波のすぐ近海でフロート空母が浮上した。

赤石の数多くの民間人が、甲高いミサイルの音を聞いた――

第二章 中華帝国（後書き）

先に予告しますと、次の話し辺りで二人目の主人公が登場します。
名前は……如月。

ああ言っちゃった。。

第二章 了 宣戦

突如飛来したミサイルは真つ直ぐに最上層を目指した。
着弾は民間人が音に気付いた0・9秒後だった。

「お姉様！シエルターへ！」

「それやめなさいってばっ！」

名雪と香恋はシエルターまで走った。すぐ頭上で爆発が起こる。
熱波は容赦無く名雪達を襲った。

「熱っ……」

「……まずい…爆撃機ですわ！」

「ツカサ……何処に居るのよ……」

「第二波来ます！」

「対空防御展開！エスタ発進！」

指令部は頭上の地響きを感じながら喧騒に包まれた。

「敵フロート空母は海中から接近。爆撃機が順次発進しています」

「フロートはレーザーを展開！航空部隊を足止めしています！」

警戒中であつたため、航空隊の発進は早かったが、フロート空母は
登頂部や周囲にレーザー迎撃装置を備え、ミサイルにも対応した。

「天海級空母は『美星』方面から接近させる！」

観光島『美星』は『黒波』の北東。回り込めばフロートの背後に付
ける。

「天海級は急げよ！」

天海級航空空母『白菊』――

「現在本艦は『美星』を周回中。フロート空母到達は6分後！」

航空空母は封鎖された観光島を回り、フロートを射程に捉えようと
していた。

「……………静かですね……………」

「妙だな…もう少し背面に注意していてもいいはずだが……………」

「……………波が……………」

双眼鏡を構えていた士官が呟いた。

「どうした？」

「……………！11時の方向に艦影！！」

「何！」

瞬間、警報が鳴り響いた。

艦橋の画面はみな赤を示す。

「11時の方向、アルツエルン級空母3隻！」

水平線に見えた3つの空母に光がまばらに輝いた。

「艦砲射撃確認！」

耳障りな音と同時に衝撃が足を揺らした。

顔を上げると甲板で煙と炎が溢れ出す瞬間が見えた。

「……………！待ち伏せか…?!」

「フロートからの砲狙撃も確認！！」

観光島の支柱をえぐられながら、天海級艦隊は激しい水柱の中で翻
弄されつつあった。

「上まで急上昇します！つかまって！」

奈々瀬大尉はツカサに向かって言った。ヘリが一気にスピードを上
げた。

「海中から敵潜水艦！」

「何ですって!?!」

あちこちの工事区画の穴。そこから水しぶきが弾けるのが見える。

「……マジ……？」

間髪入れずに下部層の地面が爆発した。薄暗かった空間が無理矢理照らされる。

恐らく上にミサイルを放ったのだろう。

「……！直ぐに応射が開始されます……！！……っ！」

すぐ手間の支柱が脆く崩れかける。ヘリは大きく旋回し破片を回避する。

奈々瀬大尉は携帯電話を取り素早くボタンをプッシュした。

「応戦はどうなっているの……！」

『海中から多数の攻撃を受けました！現在索敵中です……！』

「急がせて……！」

ヘリは層を抜けて洋上に飛び出す。

「なんてこと……！」

大尉は窓から『赤石』を眺めた。

赤石は朱く燃え盛り、今もミサイルを受け火を噴いている。

「名雪……津……！」

「名雪……！」

ツカサは第六層の縁側で名雪ともう一人よく知らない女子を見かけた。

「ツカサ……？」

着陸したヘリから走るツカサを見付けた名雪は安堵したようだった。

「無事だったんだ……！」

名雪が小さな涙声でそう言ったのを香恋は目敏く気付いた。

「……どうした？泣いてんのか？」

「あ……うん……！」

「あの……」

隣にいた名雪の友人らしき女が声をかけた。

「ツカサさん？と言いましたわね？」

「あ……はい」

なんか苦手なタイプだ。

「ヘリコプターで黒波の『特殊部隊』まで送って下さるようお願いできませんこと？」

「特殊部隊って……『Amphitrite』のことか？」

「あらご存知でしたの？」

何なんだコヤツは。

名雪に視線を投げた。

「え……何？」

…アイコンタクト失敗。

「話が早いですわ。シエルターには辿り着けないようですし、黒波は危険ですし、何より父が『Amphitrite』に居ますので」

「へえ……」

「貴方達！急いで！！」

奈々瀬大尉が微妙にヌルかった空気を飛ばしてくれた。

「あ、私は蒼海 香恋と申します。お見知りおきを」

ヘリに乗り込む途中で振り返ってから、仰々しく挨拶をされた。

「何なんだ……？アイツは……」

「軍人一家の愛娘よ。ちよつと性格がアレだけど……」

ヘリの中で自己紹介した蒼海 香恋を奈々瀬大尉はまじまじと見つめた。

「あら……蒼海って……蒼海中佐の娘さんって貴女だったの……？」

「ええ。父は『Amphitrite』に？」

「……ええ恐らく……」

奈々瀬大尉も些か困惑している。かなりの天然なのか、蒼海 香恋は普通の表情で会話している。

大尉は早々に話を済ませるとコクピットに逃げた。

「で……ツカサさん？」

「は……はい」

「私の名雪とはどのような関係ですの？」

とんでもなく柔和な笑みで聞かれた。おまけに『わたくしの』と来たもんだ。

「いや…どうって」

「ちよつと勘違いしないでよ！？べ、別にツカサとはただの幼なじみよ！！」

「あら、お姉様顔が赤いですわよ？」

「うるさいわよ！それと、お、お姉様つてやめなさいってば……」

「なんか…姦しいな…」

心底疲れきった名雪の前で蒼海は余裕の顔で向き直る。

「私のお姉様に異性交遊を望むのでしたら……」

「あの…別に名雪とは…」

「そつよ！！こんなツカサが彼氏にでも見えるっての！」
こんなつて。

蒼海は可笑しそうに喉で笑った。

「ですわよねえ……ツカサさんにお姉様を押し倒す度胸はありませんわねえ……？」

「どさくさに紛れて何言つてんのよ！！？」

だから顔が赤いつて。

「ではくれぐれも……ね？」

美少女の本気の微笑がこんなに恐く見えたのは初めてだった。

「……香恋……後で覚えときなさいよ……」

「あら、楽しみですわ？」

うわあ。

『Amphitrite』の入口はかなり入り組んだ解りにくい位置にある。

第一層の分厚い構造物の最も北側の角。ヘリポートは無く、ただ巨大なハッチが口を開いた。

「『オケアノス』の中に『アンピトリテ』……お洒落ですわね？」

奈々瀬大尉も戻って来ていた。

「神話にあやかった名称としか知りませんが……女神の名前でしたか？」

ツカサにとってはイマイチ付いて行けない話だった。

「ポセイドンの求婚を拒んだアンピトリテが身を隠したのが、オケアノスの宮殿ですの」

「よく知ってるわね……」

「恋色沙汰は大好きですもの……」

空気に色があつたら今はまさにピンク色だろう。

『確認したかい？如月君？』

『やめてくれよ……まだ馴れてないんだ……』

『フフ……で、どう？』

『最大戦速で急行中。成宮は『Amphitrite』に入ったよ。好都合だね』

『他のイレギュラーは……？』

『廃除するよ………』

「敵フロートは黒波防波堤を突破！押し込まれます！」

「なんと豪胆な……！」

今回はフロート空母の潜水からしてまず異例でもあった。

前回の襲撃からまだ日にちも経っていない。既に撤退したものだと思っていたが、

「まだ近海に潜んでいたとはな……ペトリオットは！？」

「展開しきれていません……！エスタ部隊がある程度上陸しましたが」
後方に付くはずだった天海級空母艦隊は足止めされほぼ役に立って

いない。

鉄甲弾は燃える赤石を徐々に崩していった。

ヘリは内部のマリーナとでも言うような場所に着陸した。

実際、かなり広い。戦闘機やらエスタやらが大量に格納され、その全てが息づくように起動している。

奈々瀬大尉はツカサのすぐ前を通り過ぎる、ヘリのドアに手をかけた。

「着きましたね……降りますよ」

「あれ……大尉の制服って……」

名雪は近くに居た女性士官と奈々瀬を見比べて気付いた。

「あ……ご説明してなかったですね。私、正式には『Amphibite』の所属です。個人的には公にしないようにしてたので……」

「嘉島さんには言わなかった？」

「そういうことです」

大尉は先に降り、近くで待っていた士官と何やら会話をする。

隣の蒼海 香恋が名雪と話し出す。

「あの奈々瀬大尉……スタイルがよろしいのね……」

「何よ藪から棒に……」

「ンん……？お姉様何か気になりますの？」

蒼海が得意げに胸を張る。

「そうですねえ……先程からツカサさん大尉の胸ばかり気にしますものねえ……」

「ンなっ……違っつて……！」

「私のではご満足頂けませんわよねえ……」

「……ツカサ……最低……」

名雪は蒼海の胸とツカサを交互にジト目で睨む。

「仕方ありませんわ、殿方ですものね？」

「だから違つて……」

名雪はこっそり自分のスレンダーな肢体をジッと眺めた。

「あらお姉様…胸が大きくても肩が凝るだけですわよ？色々と」

「……別に気にしてなんかないわよ……」

「そうですの……？」

ツカサはしばらく聞こえないふりをしていた。

「お父様？」

蒼海 香恋は『Amphitrite』のオフィスで一人の男性に声をかけた。

「おお香恋。大変だったな……」

奈々瀬大尉は男の前で敬礼してから述べた。

「ご息女の指令によりご息女以下二名お連れしました」

俺達は以下二名かい。

「ご苦労だった大尉」

「中佐…ここをお教えになったので？」

「『Amphitrite』の存在は特に秘密というわけではないよ…それに香恋は分別もあるし、ああ申し遅れた。蒼海 克司、中佐だ」

まるで話を聞いてない気がする。

「…上はどうだった…？」

「地獄絵図ですわね……」

克司中佐はデスクのコンソールを軽く叩いて画面を出した。

「敵は第一層から最上層、更にオケアノスまでを焼くつもりだ。黒波も攻撃を受けつつある」

「『Amphitrite』の出動はまだ要請されていません……
そうですね？中佐」

「ああ」

そういえば半独立とかいう名前だった、ツカサはふと思った。

「……仲が悪いんですよ……」『belongely under

the black foundation.」…『黒き礎のもと孤独に在れ』……建前ですね」

嘉島 昴は第七層成宮重工本社にいた。

ごった返すシエルターで思案していた。

嘉島自身はツカサのことは心配していない。軍と一緒に黒波か何処かに行ったはずだ。

「しかしあの制服…正規軍ではない……」

正規軍の女士官制服は一度見たことがある。

奈々瀬大尉が着ていたのは明らかに別部隊。それに証明章すら見せなかった。

とすれば噂にあつた独立部隊か。

「ツカサ君を何に使おうと……」

「先輩！」

「お」

慌ただしいシエルターで嘉島は後輩と出会った。

「成宮重工の上層部が中華帝国へのエスタ技術協力を承認したらしいですよ……？」

「何……?!……政府か……」

「多分、行政府の決定に逆らえ無かつたんですね。エライことですよ……」

「冷戦の悪化……最悪だな」

「The city function of AKASI was reduced to half.」

（赤石の都市機能は半減）

「good……We surround KURONAMI!」
(よし…黒波を包囲する!)

「A captain! A new body comes c
lose from the west!」

(指令!西側から新たに接近する機影が!)

「Anything!」

(何だ?!)

「It is a Chinese empire!!」

(中華帝国です!!)

深紅の巨大な中華帝国戦艦『朱雀』(スーツェー)は短い滑走路でも充分な滑走距離とスピードを得られ、その火力は通常戦艦に引けを取らない最新型空中揚陸艦である。
尾のように伸びた船尾はジェットエンジンの煙気楼で揺れ、『朱雀』の名前の由来を誇示した。

『朱雀』艦橋――

「西側からの新型機を受領後、赤石を発進。敵艦隊を殲滅する」
「了解!!」

白い矢は赤石に向かい真っ直ぐに急行した。青い海面を波立てながら新鋭機は紅き双翼に近付いていった。

中華帝国の最新音速飛行型ユニット。

窓の無い、全面がスクリーンとなったコクピットで幼げの残る一人の少年が呟いた。

『シス・シエルフォード・如月、目標艦隊を攻撃する――』

『無理はしないでね…エスタも確認したよ』

『…任せて』

「艦長！中華帝国籍の新型機を視認！」

「着艦指示を！」

「はい……………っ！」

「新型機はなおも加速中！艦隊に向かっていきます！」

「何…？パイロットは？！」

「シス・如月…！応答しません！」

「何を考えてるんだ……………」

「シス・如月！艦隊を視認……！」

その戦闘機は明らかに従来の型とは一線を画していた。

左右の羽は細く斜めに伸び、胴体の中間から後部には二つの尾が伸び垂直尾翼が鋭く天を刺した。

左右に広く延ばした羽のパイロンには長いミサイルが三つずつ。

「翔ける！『白波瀬』！」

呼応するように窓無しが無機質なコクピット部に一筋の光が走った。
三つのバーニアが一斉に火を噴く。

「本艦に接近する機影！通常の倍の速度です……！」

「誘導弾で迎撃！」

ロシア艦隊はただが一機と、ミサイルを十数発撃っただけだった。

『白波瀬』にとつてはほんの十数発。

「……………たやすい……！」

如月はレバーを巧みに操作し誘導弾を簡単にかわした。寸分の無駄も無く機体を回転させていく。

「何だと？……！」

「過ち……………それは甘く見た……軽視！」

通り過ぎ様にパイロンを開放する。

細長いミサイルは真っ直ぐ艦隊に向かった。

「機銃座……！」

戦艦はミサイルに弾膜を浴びせる。

一発も当たらずにミサイルは空中で炸裂する。爆発から一瞬白いラインが多方向に弾けた。

少し間を置いて輝いた光跡の先が爆発を重ねる。爆発の火の輪が周囲に出来上がる。

艦隊が焰に吞まれる。

「多段式特殊炸裂焼夷弾……艦隊など敵ではない……!!」

空母の一つは浸水し、徐々に傾いでいった。

「The fleets of the Russian Federation were exterminated!」

（ロシア艦隊全滅!）

「Shit!」

（クソつたれ!）

「An AMAM I fleet stuck behind!」

（天海艦隊が後方に付きました!!）

「Fight back!」

（応戦しろ!）

戦局は確かに変わり始めた。たった一機の白き鷹によって。

「何だあの機体は……!」

「……中華帝国です。コールサイン確認しました」

黒波指令部はリーダーに一瞬映った機影の動きに呆気にとられた。

中華帝国が協力姿勢なことは解った。ただあんな新兵器を開発出来る技術力があるのなら、

（中華はエスタで何を求めるのだ……）

「フロート級空母が撤退します。天海艦隊が追撃を進言しています
が……」

「船速はこちらのほうが速い。追撃隊を組織させろ」

「了解！」

「……なに……？」

事後処理に追われた指令部で画面を睨んでいたオペレーターが声を漏らした。

「どうした？」

「中華籍機が……『Amphitrite』に……」

「何だと?! 『朱雀』に着艦しないのか……？」

「はい……『Amphitrite』のドックに向かっています。『朱雀』も随伴」

「『朱雀』は我が黒波の管轄だぞ！要請しろ!!」

指令官はがなりたてた。

「蒼海を呼び出せ」

「……フロートが下がったようだ……」

「攻勢に出ましたの？」

『Amphitrite』のオフィスの喧騒は少し雰囲気が変わった。様々な画面は艦隊の後退を示す。

「あら……おかしいですね……」

「ええ……敵が圧倒的だったというのに……」

ツカサは赤石の被害が気になった。津や嘉島さんのことも。赤石は……どうなってます……？」

名雪が不安げに聞いた。大尉が答える。

「上層はほぼ壊滅です……焼夷弾で徹底的にやられましたので……」
「成宮重工は……？」

「シエルターは生きていますでしょう……お知り合いが？」

「はい……」

ツカサはこちらに走ってくる職員を見付けた。

奈々瀬大尉と蒼海中佐で視線を泳がせたが、結局中佐に向き直る。

「こちらのドックに中華帝国の『朱雀』が入港しました……随伴機

も入っています…！」

「何…？」

「蒼海部長！黒波から入電！指令長です！」

「…繋げ！」

モニターに黒波の指令室が映る。中央にいるのは佐官。

『Amphitriteに中華帝国機が入港したな？何故だ！？』

ノイズが交じって更にうるさい声になった。部下が密かに音量を調節した。

「上層部が決定したことだ。私が関与することじゃない……」

『中華帝国軍は黒波の管轄だった！』

「行政府は何も言っていない。貴軍の容認でもあるのだろう……」

『ち……』『朱雀』は一時的にAmphitriteに収容させておけ。有事の際は』

「分かっている」

『フン…！』

通信は一方的に切られた。

「日本政府は中華帝国への技術協力を決定したのですわね…？」

「多分ね…極東先国群への加盟も時間の問題ですな…」

ツカサは改めて実感した。世界は変わり始めた。

成宮重工を始めとして、幾重もの思惑が戦いを生んだ。

「ツカサ……説明して…？」

「え……」

名雪はこっそりとツカサに聞いた。

「何か、知ってるでしょ……？」

「………ああ……」

香恋はツカサの後ろ姿をしばらく深刻に見ていた。

シエルターにいち早く逃げた朝宮 津は妙に蒸し暑い中テレビを睨んでいた。

報道規制でまだ大きな情報は無い。

「全く…嫌になるね……」

ツカサや名雪の姿も見えない。何処に行ったのだろう。

しかし、今まで代わり映えしなかったテレビ画面が突然変化した。ノイズと共に一人の男が映し出される。

男の後ろには一枚の旗。

赤と白のストライプ。印象的な星。

そう、星条旗。

「ユナイテッド・ステイツ……！！」

『動き出したね…アメリカが……』

『やっと第一段階だよ…世界が変わるんだ』

『僕らの手で……！』

『私は、アメリカ合衆国大統領、トリリアム・グラハムです……』
テレビは同時翻訳された文章を流す。

機械的な文章は正確に、無慈悲に合衆国大統領の演説を翻訳した。

『我が合衆国はかつて中華帝国の核に汚染され、蹂躪された。日本国は中華帝国に組し！世界の覇権を我が物とせんと画策した！』

『アメリカは決して屈しない！再び中華帝国はロシア連邦の前に崩れ去り、世界は統一される』

「マジかよ……これって……」

『我がアメリカ合衆国、そして同胞ロシア連邦は……！日本国、及び中華帝国に対し、宣戦布告をここに宣言する……！』——

第二章　了　宣戦（後書き）

やっとここまで来ました。これから合衆国と日本の戦争が激化していきます。

如月や『』の声の少年はロシアも関わってます。

中華帝国は日本を利用する形で動いて行く…予定ですね。。。

そろそろ寄り道してキャラが濃い「蒼海　香恋」でSSを書いてみようかとか考えてます……

外伝SS 蒼海 香恋の一日（前書き）

かなりキャラが濃い『蒼海 香恋』でSSを書いてみました。
登場人物は蒼海 香恋と美仲 名雪。二人のちよっとドタバタと、
恋話。

微工口注意です。

外伝SS 蒼海 香恋の一日

蒼海 香恋の一日の始まりは少し独特だった。

学生寮の部屋のベッドでモゾモゾしながら、目覚まし時計をぶつ叩くのはいたって一般的なのだが、寝言が少し常人とは違う。

「あと一分……」から始まって、「お姉様あ……」や「ぬっ殺しますわ」「グラマンホークアイ」等々。かなり違う。

今日の寝言は、

「求めよ、さらば求められん……」だった。

蒼海 香恋は現在16歳、高校2年。

学生寮で一人暮らしをしている。隣人は美仲 名雪。言わずと知れた『お姉様』である。

香恋はベッドでのモゾモゾに終止符を打った。

少し大きめのワイシャツにパンツ一枚。ブラすらしていない。スタイルは良いのでかなり際どい格好である。

「今何時ですの……？」

さつき叩きのめした時計を見た。朝の8時。

今日は土曜日なので学校も無い。

「……もう一度寝ますわ……」

誰に言うでもなく再びベッドに潜り込む、が、

「……………お腹が空きましたわね……………」

「何もありませんわよねえ……………」

香恋はやや乱れた髪を押さえながら冷蔵庫までぺたぺたと歩いた。学生寮備え付け冷蔵庫の中身は、

「ジュース……ブランドーチョコ三枚（彼女は未成年です）……………」

め苺…チューハイ（彼女は未成年です）……」

後は何だか分からない食品が並んでいる。

念のため冷凍庫も開けたが、

「アイ。ノン…氷……」

後は棒アイスが50本程入っていた。こないだ夏用に買い込んだのだ。

「んん…んむん……パツ…ふぁ……ふめたいでふわ……（冷たいですわ）」

棒アイスを口に含みながら足で冷凍庫を閉める。

溶けたアイスを垂らさないようにノートPCを点けた。これは自前だ。

ほんの1〜2秒で立ち上がり、エンターキーでネットに繋げる。

「んん…もふおいへふゆわめ…（遅いですわね）」

少しアクセスが集中したのか接続が遅い。それでも自覚しない人は全く気にしない程度の間だった。

そのままクローゼットに向かう。制服と共にカジュアルな物やら可愛いげのある物やらが並んでいる。

「んふ……ぷあっ…ひょうわおねうえひやまとよいひまひゆか……

…（今日はお姉様と行きますか）」

そろそろ喋り方が間抜けなのでアイスをこりこりと噛んで飲み込む。

一度ワイシャツを脱ぎすて、ブラをしてからTシャツに着替える。

スカートは割と短いやつ。

「暑いですわね……」

ある程度のサイトを巡回して、髪を整えてから腹ごしらえに、隣人である名雪の部屋に行く。この時間なら確実に起きているのが彼女だ。

生真面目でキツイ印象もあるが、実は部屋に少女的な物がごろごろしているのを蒼海 香恋は知っている。

「だから可愛いんですのよね…お姉様は」

蒼海 香恋の隣人、美仲 名雪はいたって普通の高校2年。そしてもちろんノーマルな人である。

幼なじみの成宮ツカサはただの幼なじみなのだが、周囲は幼なじみの範疇に収めるほど甘くない。

名雪はテレビ画面をぼんやりと見つめている。

不意にチャイムが鳴る。誰だか何と無く見当がつく。

「……まさか…」

玄関まで歩いてドアの覗き穴から外を伺う。

『お姉様あゝ？ いまさんのゝゝ？』

「げ………」

案の定だ。魚眼視界の中央に蒼海 香恋の柔らかな笑みが見える。穴から見て握るのを把握したように愛らしい顔で見上げてくる。

『お姉様あゝ……？』

「ハイハイハイ………」

観念してドアを開ける。香恋の微笑が満面の笑みに変わる。

「お姉様、朝食はお済みですか？」

「それやめなさいってば………」

香恋はいつの間にか名雪を『お姉様』と呼び慕い、部屋に転がり込むたびご飯を共にする。

「まあたご飯たかりに来たの………」

「たかりとは聞き捨てなりませんわね…… あくまでもお姉様の食生活改善の一環として………」

「……別に隠さなくてもいいわよ」

やれやれといった表情で眉間を押さえた。だが香恋のニコニコ顔は全く変わらない。

「分かったわよ…… 入りなさい………」

「お邪魔致しますわ」

「さてお姉様、私が抱える当面の問題についてですが……」
「解ってるわよ……朝ご飯に事欠いてるってところでしょ……？」
「あらご存知でしたの」
「さも以外そうに口に手を当てる。いかにも大仰と言おうか。
だがちょうどいい。」
「私もまだ食べてなかったのよ……何か作るわね？」
「それをお待ちしましたの（ハート）」
少しは遠慮なさい。

蒼海 香恋とは事実、気の置けない仲で度々行動を共にする。
ただしちよつとした噂が流れ始めている。
香恋の『お姉様』発言は、香恋が『そっちの人』との噂を流すのに
充分だった。

そして、
「いい迷惑よ。こっちはとばっちりで『両刀遣い』の称号授けられ
て……」

「『両刀』……」
香恋が不思議そうな顔をする。
「何？」

名雪は冷蔵庫を閉めながら振り向いた。
「あら……お姉様、殿方とのお付き合いがあたりですか？」

「な、無いわよ！」
「小耳に挟みましたわ、成宮とおっしゃる方と関係を持っていると
か……」

「な、な……なな……！??」
名雪の反応に香恋の顔が紅潮していく。次第に声が甘ったるくなる。
「今度お会いしたいですわぁ……」
「勘違いしないでよっ？ツカサとは何も……」
「まあ……！名前で呼び合う仲ですね?!」

「ただの幼なじみよ!!」

「ですわよね…幼なじみなら、お互いをよく知っていますものね…ズバリ……」

名雪が嫌な汗をかく。顔がすっかり熱い。

「…恋ですわね!？」

名雪の顔が真っ赤に染まる。

こういうことに一切免疫が無いのが美仲 名雪だ。もちろん香恋はそれを承知でからかっている。

「……ば、馬鹿言つてると追い出すわよ!」
「んふふ……」

香恋はひとしきり肩を揺らして喉で笑った。

「……アンタは恋人作んないの？」

「私の柄じゃありませんもの……」
微妙な沈黙が流れる。

「お姉様が良ければお相手致しますわ?」

「そっちの趣味は無いわよ……」

不意に香恋の表情が自虐的な、愁いた笑みになる。

「……そうですわよね……」

「どしたのよ……」

「ふふ………何でもありませんわ?」

そういつて視線を逸らした。

「そもそもですわねえっ 最近の殿方は自己を律するに足る精神を持ち合わせないのでしょ!」

「はぁ……」

香恋はやや上気した顔でチューハイの缶を叩き置いた。

まだ少ししか飲んでいないのにこの乱れようである。（彼女は未成年です）

名雪はブランデーチョコをちびちびとかじって香恋の話を聞いて

いた。（お察しの通り彼女も未成年です）

いつの間にか酒盛りになったのは迂闊だった。

「近頃の殿方といったら！レズだの巨乳だのくっだらなことはないことばかり！女性のスカートの中がそんなに神秘的のですかぁ！！？」

「いや……私に聞かれても……」

完全に酔っ払っている。ちなみに今は香恋の部屋でテーブルを挟み大騒ぎしている。

ただし香恋の独壇場だが。

「ふう………名雪さん……？」

「は、ハイ?!」

いきなり『名雪さん』に呼称が変わった。一体どういう基準で代わるのだろう。

「《ピーツ!》に関してどう思われますのです!？」

「な、な……ハア!??」

「やはり殿方はその事ばかり考えるものなのでしょう……?」

やけに深刻な顔で完全な下ネタを吐いた。（不適切発言の部分は自主規制させていただきます。あしからず……）

「……名雪さんは巨乳の方が良かったと思われますのっ?」

「……べ、別に、大きいからどうってわけじゃ……」

「違いますわ!」

香恋がテーブルをドンと叩く。香恋の胸元の大きな膨らみが僅かに揺れた。

「……どう思われますの?」

再度問いたです。

「あ………えっと……色々大変、かな……?」

「そう……これまでもんな思いで貞節を守り自律を強いてきたか……!」

再びチューハイを仰ぐ。

（ていうか女の子にしか興味無いだけじゃないのかな……?）

「何か言いまして……?」

「い、いえ……」

「……名雪さんは何カップですか？」

「……76よ……」

正直に答えた。

「大丈夫ですよ？貧乳はステータスという至言もございますし」「大きなお世話よ！」

「……お姉様あ……」

「うわ……？」

寝言だった。

すっかり騒ぎ疲れた香恋は酔いが回りきって熟睡している。

「こうしてれば可愛いのに……」

少し紅い顔で寝息を立てる香恋は名雪の膝上で眠っている。

事実、蒼海 香恋はそれなりの美少女でスタイルもいい。彼女に想いを寄せる男子はきつと多いだろうに、

「何でこんなに頑ななんだろ……？」

香恋はどこか男性を男性として見ていない節がある。男という種は理解していても男性というカテゴリを路傍の石ころのように考えている。

同性愛者、まして自分が対象とは思いたくないが、

「私だって男の子好きになるんだよ……？」

香恋の髪をそつと撫でる。サラサラで質のいい、先端に癖の付いた髪。

香恋の顔がむず痒いように動いた。決して嫌そうでは無いが。

「私……誰が好きなんだろうね……」

頭に真つ先に浮かぶのは成宮ツカサ。常に傍にいたし、幼い頃から知ってる。

香恋の指摘はある意味正しい。

ただこれが恋心なのか分からないだけ。

人間として好きなのか、幼なじみとして好きなのか、異性として好きなのか。

時計を見た。

夕方の6時前。気が付けば部屋がオレンジ色に染まっている。

「香恋？」

肩を揺すって名前を呼ぶ。香恋が寝ぼけ眼を擦って頭を起こす。

「あれ……お姉様………？」

「起きた？」

香恋は自分が名雪の太腿を枕にしていたことにようやく気付く。火照った顔で名雪を見上げる。

……妙に上気した煽情的な顔だ。

「あのぉ……香恋……？」

「お姉様ぁ……？」

「………げ」

と声を上げるのも無理は無い。

香恋の手が名雪の頬に置かれたのだ。

「ちょ……！ちよつと?!」

「お姉様とうとう私を……！」

「ち、違う……！」

香恋の顔が余計大人っぽいものになる。浮かべた微笑が美し過ぎて恐い。

「いいんですよ……？お姉様がその気になられたのでしたら……」

「やーめーてーッ……！」

腕が名雪の首に絡む。振りほどこうとするが、

「……強い……！」

「今更何をおっしゃいますのぉ？私は……構いませんわよ………？」

「だから違っつてばっ！」

「何が違っんですの……？私を部屋に連れ込んで何やらナニしたかったのでしょうか………？」

「ここアンタの部屋よ……！」

「嘘…… お姉様往生際が悪いですわよ……？」
「だから顔近付けんなぁーッ！！！」

酔った勢いでキスまでしようとした（その先に何があったのかは不明）香恋はドタバタの末、何とか説得して静めた。

少し残念そうな上目使いで名雪を睨んでいたのは言うまでもない。

「分かりました……今日は帰りますわ……」

「だからここアンタの部屋ってば……」

「あ、そうでしたわね…… お姉様、泊まっていけます？」

「遠慮しとく……」

「残念ですわ……」

ここに居たら明日の朝までに無事でいられるか不安だ。

「じゃ、またね」

「ええ、またいらして下さいですの」

「立場が逆でしょ……」

香恋が玄関前まで見送る。名雪が靴を履いて振り向こうとしたとき、

「お姉様……？」

「ん？」

「成宮ツカサさんとおっしゃる方……どうお思いですか？」

「な……別に……」

名雪の顔が紅く染まる。さっきの続き？

「傍に居たのでしょうか？ならばそれは、ただの知人でも、路傍の石ころでは無いのでしょうか……？」

香恋は名雪に問っている。決して不真面目でなく、確認させるように。

「何を言わせたいのよ……ツカサは別に……っ」

「ふふ……可愛いんですのね？」

「……何よ？」

「素直におっしゃったらいかがですか……？」

「……………そうよ……………」

確かに――

「私はツカサを、好いてる……………」

「……………」

「それが恋か同情か……………分かんないだけ」

香恋は微笑んで、優しく、

「……………いいお返事ですわ……………」

「え……………」

「こうでもしないと、お姉様不器用でまどろっこしいんですもの」

「……………な……………」

「きつと好きになりますわ……………その殿方が」

香恋のその目は少しも冗談や嘘が無かった。名雪を見て来たから解る。

自分よりずっと長く傍に居た存在がいかに大切に愛しいか。

香恋は一度大きく息を吸って、力を抜いた。

「……………ふうう……………随分青春してしまいましたわねえ……………」

「ホントね……………」

「……………ああ……………じゃあさっきの続きでも致しましょうか？」

「あのね……………何でソツチに行くのよ!？」

「ん……………何となく間を持たせようと思ひまして？」

「まったく……………頭の中がピンク色なんじゃないの？」

「あら、今頃気付きましたの？」

「ハイハイ……………」

「じゃ、明日は来ないようにね？」

「大丈夫ですわ。明日は父と約束がありますの」

「あの軍人の……………」

「ええ、新部隊設立の祝賀会とかで……………呼ばれたんですの」

「へえ……………大変ね」

香恋は肩をすくめる。

「仕方ありませんわ？軍人一家の業ですもの」

「うん……じゃあ明後日ね？」

「ええ」

名雪は隣の部屋に帰っていった。香恋は幾分か暗くなった空を見上げた。

夕日がビル群と重なり輝く。

香恋はしばらくそれを見つめていた。

「……情勢も不安定ですし…新部隊設立も仕方無いのですわね……」

……」

旧世紀大規模地殻変動により、日本の国土が5分の1になってから150余年。

新たな都市国家、『赤石』は世界の波に吞まれつつある。

時に、西暦2367年——

夏の始まり——

外伝SS 蒼海 香恋の一日（後書き）

本編を書いた時に何気に出したのが『蒼海 香恋』でした。

強烈なキャラを作ろうと思ってお嬢様みたいになっただんですが、かなり濃いめの設定になったのでこの期にSSを。

香恋は『お姉様』に少しエッチい感じで迫るんですが、名雪の淡い恋心を知っているのでああゆう対応になりました。

次は成宮ツカサと朝宮 津辺りかな、とか考えてます。

本編にある程度メドがつき、津のキャラが固まったら書くつもりです……

第三章 序 緒戦（前書き）

一番長いです。かなり時間がかかりましたが、本編第8話ですかね？
では、どうぞ。

第三章 序 緒戦

二世紀前の話――

超大国の経済悪化により大規模な世界恐慌が到来。

経済・軍事産業のパワーバランスは崩れ、中東諸国との摩擦は激化した。

貧困・食料難・人口過密等のイレギュラーは世界、人類を陥れた。

西暦2138年

地球規模の地殻変動は限界を超え、世界各地で天災が多発した。

アジア諸国は列島の火山降下物に汚染され、ヨーロッパの島々は引き裂かれた。

あらゆる自然災害は既に形骸化した世界の領土、経済、文化、人民を根底から滅ぼした。

西暦2252年

経済と資源を発端に中東から始まった大戦は瞬く間に大国へ広がり、人類史上最悪の戦争になった。

ロシア、中華帝国、アメリカ合衆国は限定核を行使。

塗り替えられた世界は再び人類の手で汚された。

西暦2298年 12月24日

大戦は終決した。

中立国家の日本が仲立ちとなり、中華帝国は独立を保ち、国際非核条約が締結された。

大戦による環境被害は大きく、疫病や二次災害による戦死者を含めると総人口は3分の2にまでなったことが、後の統計で明らかになった。

歴史は繰り返す。

問題はそれがいつか、ということだった――

一週間後――

「赤石の被害は凄かったけど……」

「最上層は完全封鎖。第一層も半分が焼け野原ですわね……」

アメリカ合衆国が日本、中華帝国並びに極東先進国家群に宣戦布告してから一週間。

戦闘は主に太平洋上で発生しているらしい。

名雪と香恋は学園の教室で雑談中。

皆が話す内容といえば専ら戦争の事だ。授業も短縮された。

ただ、幾つかの学生寮は焼け落ちたため、学園内の緊急寮が開放された。

そのため放課後の今も大勢の生徒が学園に残っている。

「ツカサさんから、聞きましたのしょう？」

「……うん……昨日……」

名雪はツカサが何か知っていると感じていた。軍のヘリに乗っていたこと、『Amphitrite』の存在を知っていたこと。確かに不自然だった。

――「成宮重工は、新型兵器の開発をしてた……その技術はアメリカやロシアにも拡散しててな……」

「それで戦争が……」

名雪はツカサの部屋で話を聞いていた。昨日の事だ。

「日本とアメリカの関係は大戦の時からずっと悪かったし……中華帝国の介入で、関係が悪化したんだよ……」

「……でも……急過ぎるよ……！前段階が無い……っていうか……その……」

「工業島のダイヤ産出も関係してるんだろ……」

ツカサは冷静に言い放つ。

「……」

「どした？」

「お父さん……亡くなったんでしょ……？」

「……っ！ああ……」

「戦争なんだよ？なんで平気なの？！成宮重工の武器が、戦争になったのよ！？」

「……責めてるのか？」

「……違うよ！ただ……私、何も知らなかった……！」

「……？」

「アンタだって、苦しんでるでしょ！？お父さん死んで、戦争まで起きて……！」

「解ってるよ……！」

名雪は泣いていた。一人でしょい込もうとしていたツカサに。

名雪の頬を涙の筋が濡らす。ツカサは指でなぞって拭いてやる。

名雪はツカサの手に触れる。

「誰かに頼りなさいよ……！言っただでしょ……？」

「……すまん……」

名雪の涙はツカサの胸を締めつけた。名雪が泣くなんていつから見
てないかな。

「悪かったよ……名雪」

「……うつん……ごめん……」——

「そうですの…やっぱり新型……」

「成宮重工の嘉島っていう人が詳しく教えてくれたって……」

「社内機密とかどうなのでしょうね……」

香恋はやや呆れたように言った。

「確かに工業島のダイヤ産出は目覚ましいものがありますけど……だからといって」

「合衆国の狙いは中華帝国みたいよ……？」

「前大戦の仕返しでもする気なのでしょうか？」

香恋は少しばかりおどけて言った。

「日本は……多分先進国家群に加盟するだろうね……」

「中華帝国の戌……気に入りませんわね……」

中華帝国。

1915年に成立し、それ以後帝政を続ける一大帝国。

成立後に発生した革命による『護国戦争』は反乱軍の大敗に終わり、その後の内乱も散発的に終始した。

護国戦争は、日本が中華帝国側に付き反乱軍を鎮圧し、更に軍備増強に加担したことにより一気に終結した。当時の中華帝国に利用価値があったからだ。

それからの中華帝国の支配と発展は凄まじい。

一時期は南アジアも支配したが、前大戦でロシア連邦と合衆国に敗れ、領土は半分が核で汚染された。

「つてところか……」

ツカサは改めて名雪のノートを成宮重工本社ビルで探した。

世界歴史の内容はほとんど暗記してしまった。今度のテストは大丈夫だろう。

本社ビルはバームクーヘンが崩壊し、ビルが更に傾いできた。今回の事で正式に封鎖されるそうだ。成宮に限ったことではないが。名雪のノートは襲撃で消し炭になったと思ったが、何処で落としたのかも分からないし、取るもの取りあえず辿った道を探すことにした。本人は気にしないといいと言ったが、

「そもいかないだろうに……」

帰り際に少しだけ振り向いて名雪は言い残した。まあ実際困っているだろうし、探すだけはしておこうと思った。

できれば無傷で見つけたかった。同情？下心？知らんけど。

成宮のビルに入るのは結構苦労した。嘉島さんに話してコッソリ入れてもらったのだ。

もちろん嘉島さんも多少気にかけていたが、ビルの崩壊の危険から探すのは断念したようだった。

「……でもな……」

もつと気になるのは謎の感覚。最近、頭に直接響く謎の声。

それは聞こえるか聞こえないかの境目を行く声。会話かどうかも怪しい。

それでいて妙な既視感。

遙か何年も前に聞いたようなむずむず感。

もどかしいってのはこういうことだろうな。

そして、

「また……っ」

『合衆国は日本を占拠して、中華帝国進軍の橋頭堡にするつもりだよ』

『……ロシア連邦は中華に進軍しないのかい？』

『核で汚染された国境があるからね……手は出しにくいよ』

『ふうん……あ、そうだ』

『うん？』

『ドイツはロシア連邦への加盟を正式発表したよ』

『E・Uも割れたねえ……』

『密約があつたんでしょ……まあ助かるけどね』

『ヴァイナハテンのこと？』

『そう……早く成宮ツカサと接触してくれよ……？』

『分かつてるよ』

太平洋上――

太平洋ではハワイ諸島から発した合衆国の『キュリオテテス』艦隊と日本天海艦隊との艦隊戦が開始された。

日本艦隊は合衆国艦隊を横向きに待ち受けた為、全ての砲門を開け合衆国艦隊の正面を砲撃した。

火力は日本が有利である。

中華帝国の旗艦『朱雀』は高高度から合衆国艦隊を爆撃。

『キュリオテテスは空からの空襲に充分堪えうる防空火力を持ち合わせます……朱雀は決定打が出せずにいますが……』

『合衆国艦隊は浮足立った。新型の到着までの時間稼ぎには充分だ……』

新型。中華帝国と工業島『島津』が協同開発した新型エスタ。

『早いですね……新型エスタとは……』

『ESTA-015F型……期待出来るのか？』

中華帝国製空中揚陸艇『玄武』（シェンウー）――

「『メタトル』は順次臨戦状態へ」

「エンジンは最高度臨界。ユビキタス発電スタンバイ」

如月は『玄武』のドックで新型機を見上げた。

「データは？」

近くの整備兵が懇切丁寧に答える。

「全高13・6m。全備重量15・9tです。最大旋回時Gは16を確認しました」

「強いね……でも15・9tってのは……？」

「今回の開発コンセプトに伴い徹底的に軽量化されたんですよ」

「羽根が付いてるけど？」

「機体の浮遊はその揚力に依存していません、ぶっちゃけ。ジェットエンジンで無理やり飛ばしています」

確かに薄暗く慌ただしドックに10機ほど佇む『ESTA-015F メタトル』は背中に『白波瀬』のテールユニットと、付け足したように羽根を備えている。

足は014型の重鈍なものではなく、鋭い流線的な形をしている。接地性は二の次といったところか。

「足は……展開するのかい……？」

足は三本の流線型を束ねたような構造をしている。

一本は長く、二本はヘリコプターのローター型。付け根にはゴツイエンジン。

「よくお気づきで。足は展開してサイドバイサイドローターになります。フラッピング（上下動）、ドラッグング（回転方向の動き）、フェザリング（角度の変化）の全てを再現し、オートローテーション（エンジンが停止しても降下を続けることでメインローターを回転させ、安全に着陸させる機能）も稼動します！ぶっちゃけ！」

だんだん興奮してきたのか顔が紅潮している。

「あ……うん……スゴイネ……」

やれやれ。

アメリカ合衆国海軍籍フロート空母キュリオテテス搭載型三連式長
長距離大型鉄甲砲撃移動砲台 MC-003S 『スーパーキャ
ン』――

この移動砲台のまず一番有名なことは名前がやたらと長いことであ
る。

あめりかがつしゅうこくかいぐんせきふろーとくうぼきゆりおてて
すとうさいがたさんれんしきちょうきよりおおがたてつこう
ほうげきいどうほうだい。

平仮名で71文字にもなる前書きを持つこの『スーパーキャノン』
は全長107mの威容を誇り、三連の巨砲を持ち、『イオフィエ』
にも似た図太い脚部が一对。

戦艦の艦砲台に脚を付けたイメージだ。

移動砲台と銘打つが実際の移動はキュリオテテスに依存する。

とにかく無駄にデカイのである。

だが観測所の支援を前提としたその射程はゆうに1500kmを越
える。

赤石の地面を削り続けた鉄甲弾はこの『スーパーキャノン』が放つ
たものである。

「スーパーキャノンが撃つ前に敵本丸を墮とす！射線に入らないよ
うに接近し基部を破壊！メタトルの到着までエスタ部隊を維持させ
ろ――！」

「了解――！」

天海艦隊の搭載エスタは敵艦隊を徐々に引き裂いたが、キュリオテ
テスの砲撃は業火の如く襲い掛かる。

「多段式焼夷弾を第二、第六艦は時間差で一斉射！」

イオファイエの追加装備であるハンド・ミサイル・ランチャー。攻撃ヘリのミサイルパイロンを流用した手持ち用装備だ。

「てえーッ！……！」

「始まつてるね……」

如月は開放されたハッチから双方向に延びる曳光を下方に眺めた。

『メタトル部隊！発進急げ！』

艦内放送はメタトル発進を急かす。

『1番2番小隊は敵フロートの右舷、3番4番小隊は左舷へ！残りは戦力を分散させつつ航空隊を支援！気張って行け！！』

『レッド小隊発進！！』

メタトル三機が一気に飛び立つ。発進してすぐにエンジンをふかし急加速していく。

全体的に鋭いカーブを描く流線型だが、

「よく飛ぶよね…あんなのが」

「如月中尉！発進準備です！」

昇降機が上がると共に頭部が見えた。胸部が張り出していた為に見えるかったのだ。

『白波瀬』のコックピットスリットに似た眼を持つ頭。

「行きますか……ブルー小隊発進する！！」

「新型が到着しました！！」

「来たか！」

天海旗艦『白菊』はいち早く新型の到着を感知した。

頭上を薄い青色の機体が擦過していく。高高度からのスーパーキャノンへの急速接近。

スーパーキャノンにエスタのような小蠅を相手にする余裕は無い。

問題は防衛火力。

空中で真っ直ぐ向かってくるエスタなどただの的でしかない。

スピードは戦闘機には遠く及ばない。

装甲は軽量化の為貧弱。

唯一の対抗手は、

「——機動性は遥か知れず!!」

OSによりアシストされたメタトルは機敏に蒼天を舞い、急加速、急減速、急上昇を繰り返す。

如月の身体に急激なGがかかる。

「……んぐッ……流石に……!しかし!」

それは、

「力の証明……!確信!!」

「What's that!？」

（何だあれは!?!）

「It's a Japanese flight type」

（日本の飛行型です…）

「Defend SUPER CANNON to the death」

（スーパークャノンを守りしろ!!）

スーパークャノンに備えられた対空機銃が一斉に火を散らす。無数の鉛弾が弾幕を張り、スーパークャノンは鉄甲弾の発射態勢に入る。

「I operate by an anchor. Move about the grounding position」

（アンカー作動。脚部を接地位置へ）

「I start the loading of the bullet」

（鉄甲弾の装填を開始します）

「Waste heat processing started」

！」

（廃熱処理開始！）

スーパーキャノンは脚部から生える長いアンカーを下ろしキュリオテススの甲板に突き立てる。

背面部に開いた巨大な廃熱ダクトから蒸気が咆哮するように噴き出る。

メタトルはスーパーキャノンの変化に気付いた。

「隊長！キャノンが発射態勢に入りました！！」

「射線上には入るなよ！」

如月は映像から分析を始める。キーボードを素早くタイプした結果、

「射角 - 17.5 度、三発一斉射ですね…」

「Fire！」

（発射！）

辺りに耳をつんざく轟音が響いた。

三連の大口径鉄甲砲は一斉に火を噴き、全く同時にメタトルの一機を粉碎した。

重さ10tの鉄甲弾はメタトルを一瞬で砕き、推進剤は引火する前に霧と化し細切れになった破片を瞬きの間焼いただけに終わった。

スーパーキャノンの打ち放った鉄甲弾はメタトルを障害とせず正規の放物線を描いて海を叩いた。

天海旗艦のすぐ真横が爆発した。

「隊長！4番機が！！」

「うるたえるな！」

無線が一瞬水を打ったように静まり返る。

「3番機がカバーしつつスーパーキャノンに接近！連射は不可能のはずだ！一気に叩くぞ！！」

確かに隊長と呼ばれた士官は優秀だった。誰かが冷静にならなければ事態は悪化する。

「中々だね…あの隊長も……」

「遊んでるのかい？」

声が響いた。

「まさか…僕は傍観者だよ…？」

「スーパークャノンだけでも壊してよね？日本にも帰り易くなるしね…」

「ハイハイ…御心のままに」

「『メタトル』が敵防空圏に突入しました！」

「6番艦のエスタはキュリオテス防衛機を狙撃！ロシア連邦艦は？」

「現在、北約200kmの地点です。本海域に急速接近中」

「それまでには墜とせる……」

「ロシアの新型機についてはどうなさいます……？」

ロシア連邦は以前から次期新型戦闘機『Mk-Z』を開発していた。つい最近まで自国社同士のプレゼンがあった。エスタは運動性や戦術的機動性に優れるとはいえスピードは戦闘機より遥かに劣る。

運用次第ではエスタに対抗出来るのである。

「メタトルの働きでエスタの必要性が変わる」

「コストパフォーマンスは決して良くないですし…」

レーダーに着いていたオペレーターが口を挟む。

「指令！メタトル8番機がキュリオテスの後方から侵入成功！」
艦橋が歓喜の喧騒に包まれる。

「よし…！敵の防衛火力は薄れている！艦隊を前進」

「指令！！」

「……どうした？」

「キュリオテスから大型機が…！」

『如月……何?』

『キュリオテテスが新型……新型エスタを出した……!』

『新型……?! 早過ぎる……』

『……ハッ!?!?』

『何?』

『この脳伝達通信の感覚……』

『ちよつと見せて………なっ?!!』

『十二神……』

『アテナ……!! 生きてた……?』

キュリオテテスの登頂部から発進した、白いエスタ。

細い中に力強さを秘め、純白の機体を起こした。

全天視覚型コックピット。その中で微笑んだ一人の少女は楽しむように呟いた。

「さあ……女王様プレイはおしまい!」

『アテナ……戦略の女神……!』

『厄介な……!』

「今度はこっちが!」

白いエスタは通常よりも巨大な、17・4mの機体を光らせ、肩から伸びた長い翼が展開させた。

「責めてあげる!!」

背中ジェットエンジンが爆発するように火を噴いた。

異常な加速度で飛び立った新型、

「このツアドキスは! 翔ける……!」

進行方向に見えた一機のメタトルに目を付ける。

「あんた達より！」

腰にマウントした槍を手で回しながら構える。

「ずっと速く！！」

長大な槍を一閃させ、メタトル5番機の胸部装甲を横様に剥ぎ取る。5番機パイロットは目の前の巨体を焦燥しながら見た。トリガーをいくら引いても目前の恐怖は消えない。

集音された声がコックピットに響いた。

『やめろ！！消えろ！消えろお！！！！』

「バーカ……」

ツアドキスの少女は無慈悲にレバーを動かす。

「助けるわけ無いじゃない……？」

肩の銃口がコックピットを指す。

『やめろお！！死ねえ！！死ねよ！！』

「って聞いてないし……」

次の瞬間にはパイロットは弾丸を身体で受け、血と肉片を散らせながら死んだ。

「ああ鬱陶しいなあ……」

ツアドキスが離れた時には爆炎の中に消えていた。

その跡を見ることもなくエンジンをふかし艦隊を目指す。

「装甲に血が付いたじゃないのよ……全く……！！」

「新型機はエスタタイプと判明！大きさは軽く15mを超えます……」

「！」

「飛行型か！？」

「間違いないようです！」

艦橋からもツアドキスが出す光が視認出来た。

その光は一隻の空母を沈黙させたところだった。

『聞いてないよ……？新型……しかもアテナが搭乗なんて』
『僕も知らないよ……アテナは死んだはずだ……』
『もう一度探したほうがいいよ……オリュンポス十二神……』
『まず解ってるのは君と僕だね』
『……茶化すな』

暮れなずむ夕方の街で、名雪と香恋は携帰路についた。

どうせ部屋は隣り合わせだ。仕方ないので蒼海　香恋の『お姉様』
にも付き合ってやる。

「あれ……お姉様？」

「やめなさいそれ」

「確かツカサさんのお父様って……」

「えっと……成宮ビルで亡くなった？」

「……そうで無くて、ホントのお父様です」

香恋は割と真面目な顔で言った。

「ああ……で、何……？」

「ツカサさんが幼い頃亡くなったと……？」

「……そう言ってた……」

「お名前は？」

「ううん……知らないわね……」

二人の前に第三管区学生寮直通鉄道『学都線』の駅が見えた。学生寮はある程度点在しているので鉄道が欠かせない。3つ程『学生寮前』の名を冠した駅があるくらいだ。

「今度ツカサさんに聞いてみて下さいませんか？少し気になりますの」

「……自分で聞きなさいよ」

「あら、いいんですの？」

「何企んでるのよ……？」

香恋の表情が甘ったるくなる。

「ツカサさんを誘惑したらお姉様悔しいんじゃないですか？」

香恋が、本人も密かに自慢にしている胸を、たゆんたゆんと揺らす。
「すんなー！てゅーか悔しくないわよ！馬鹿！」

結局、香恋の悪戯っぽいからかいは部屋に着くまで続いた。

『どうする？運動性ならメタトルの方が有利だけど』

『アテナはそんな単純な女じゃないよ……』

『でも遅かれ早かれ、彼女も脳伝達通信に気付く。場所までは解らないだろうけどさ……』

『エリートだよ……あの娘は……？』

「段違いなのよ……！」

ツアドキスの長い超圧縮鋼の槍は空母に列んだエスタを一蹴した。
槍は裂くというよりも装甲を無理矢理剥ぎ取るといった感じだった。
エスタのコックピットは背中に寄った位置に在るので助かったパイロットも多かったが、どの道爆発で焼かれるのがオチだ。

「ふう……けど……さつきから脳伝達が走ってくる……何処……？」

あくまでも漠然とした感覚。ただ何か居る、知ったような奴が居る、という警鐘が鳴り続いた。

「オリュンポスが何人が生きてるはずだけど……3人居るかどうかなね……ええい……！」

再び横から接近したミサイルを肩口の速射砲で撃ち落とす。派手にジャンプし、空母を目一杯揺らして飛び立つ。

「しつこいよアンタら……！」

イオファイエの重装甲をまるで障子をぶち破るみたいに突き通す。パイロットはミンチだろう。

「もう気持ち悪いなあ！逝って！」

腕に内装されたグレネードが些か間抜けな音と共に撃ち出された。直撃した大型輸送船があっさり引き裂かれ、電子レンジの茹卵の如く弾ける。

「…嗚呼……あの中で、何百の生命が散っていく……」

その口元に言葉とは裏腹に不敵な笑みを浮かべていた。

「ホント……快感……！」

「一機、異常な突破力の機体が接近しています……！」

「撃ち落とせ！」

それが出来たら苦労は無い。今まで既に三隻の空母が沈黙した。しかも一隻は完全に吹き飛び沈んだのだ。

「狙撃エスタは！」

「右舷側でスーパークャノンを狙撃しています……！」

「呼び戻せ！大型エスタを迎撃させろ……！」

如月はさつき発進した巨大エスタが旗艦に向かったのも把握していた。しかし目の前にはスーパークャノンの砲火が迫っているのだ。迂闊に背中を見せられない。

「隊長！旗艦からの狙撃援護が途絶えました！」

「何……と！？旗……んが沈……だの……か……？」

雑音が交ざった耳障りな応答が聞こえた。どうやらアンテナが損傷したらしい。

「新型が向かいました。援護を！」

「……ん型？！そんな……が居……のか……！？確認は……！」

この隊長。まさか新型に気付いて無かったのか。

如月は少しだけ呆れながらデータを転送した。

「まあ…混戦してたしね……」

これは独り言だ。

『我々は…ス…パーキャ……の…壊を………て……る…旗……はエス…に』

「わっかんねえよ……」

これも独り言。

電波障害もあるのか無線が通じない。

恐らく旗艦の防衛は近くのエスタに任すということか。

「援護が無きや近付けないって……」

既にスーパーキャノンは第二射を撃った。

今度こそ空母を正確に撃ち抜くだろう。時間が無い。

別のメタトルに無線を繋ぐ。割と近くなので聞こえるはずだ。

「伝える！！内部に入ったメタトルに、司令塔の制圧を急がせろ！」

『ハッ！！』

キュリオテスは確かに内部から攻撃をされていた。

ただしメタトル二機が侵入したのは比較的防衛戦力の強いエリア。

飛んで火に入るなんとやらだ。

「普通内部でミサイル撃つか！？」

『撃たないでしょうね！常識的に！！』

広い空間だったが跳ぶのも限界がある。

まだ多段式焼夷弾があつたが下手に言えば自機も焼かれる。

「シエルターに飛び込んで敵に焼夷弾を撃ち込む！！最大加速で突破するぞ！」

『無茶苦茶っていうんですよ、そういうの』

「いや…むしろ無謀かな…？」

ロシア連邦艦隊――

「荷電粒子砲の納入は？」

「ドイツ側が未完成の兵器を売り渡すのに慎重で…電圧の調整がまだ最終段階ですし」

「全く……」

ロシア連邦艦隊は太平洋上を南下していた。

かなりの船速だがまだキュリオテスは見えない。

「ドイツの空艇艦がキュリオテスから接近との噂は？作戦の邪魔になる」

「杞憂でしょう…今艦艇を出す理由がありません……」

どこからリークされたかは分からないがドイツの航空艦艇が発進し、キュリオテスに近づくとの情報が入った。

「……キュリオテスは何と言っているか」

「まだ持ちこたえることは出来るが、墜ちるのは時間の問題と」

「どっちなんだ……」

いい加減水平線にも飽きた。苛立ちは募るばかりだ。

「荷電粒子砲の開発…アメリカは参入していたのか？」

「ええ…一応」

荷電粒子砲。

つまるところ『ビーム』である。

比較的質量の大きい粒子、主に電子、陽子、重イオンを荷電化させ、加速機で一定値まで加速・収束させると、その荷電粒子は質量欠損により運動エネルギーを生ずる。

それを蓄積させ、発射する。

荷電粒子砲の大まかな理論はそんな感じだ。

随分SFチックだが、理論自体は二世紀前からあった。単に加速機の小型化が進まなかったのだが、今回ドイツが画期的に小さい粒子

加速機を開発したため、そちらに技術協力していたアメリカ、ロシアに納入される。

目下、荷電粒子砲の発射に必要な大電力を発生し得る基地はキュリオテスしかない。

粒子砲の効果として期待出来る電力はおよそ20ギガワット。電気代どころの騒ぎでは無い。

「連射は出来るのか？」

「スペックは不明ですが…期待出来ます」

「だと良いが…」

夜。

夜を引き裂く青白い曳光は、双方向に飛び込んでは光球を生み出し、消える。

真っ黒い水柱は辺り一面で針山地獄のように発生した。

「有視界戦闘に支障は無いが…戦力の疲弊も著しい……」

日本艦隊にとって長期的戦闘は不利だ。

キュリオテスと違い、土台が無い。基地としての機能を持つフロート型空母キュリオテスは、夜間であろうが長期戦であろうが関係は無い。

何しろ水中巡航が可能なのだ。機動力が違う。

「そうなんですよね…」

「ん？」

「キュリオテス程の基地が水中に潜るなんて…正直馬鹿げてますよ」

もちろん完全な沈降ではない。上層はある程度の突起を収納して、海面に張り出す。

キュリオテスは大まかに別けて四層。

土台部分は広大な面積を誇り、スーパーキャノンを二つは収容出来る。

主立った戦闘機の発着はこの第一層で行う。

第二層は迎撃主体。

第三層も戦闘機の発進をメインにしている。

そして第四層は司令塔。キュリオテスの脳だ。

それだけの規模を持つフロートが何故水面下に身を隠せるのか。

「まさに七不思議だな…」

「司令！ロシア連邦艦隊が通信可能域に到達！」

「……遂に来てしまったか」

ドイツ空艇艦『ST-25 fECC』――

巨大なレドームを持った、高高度戦略観測型航空艦。

細身のボディに、埋め込まれたように大型ジェットエンジンを左右一基ずつ搭載し、更に両翼の上にもエンジンが2つ。

元々は長距離弾道ミサイルを空中からレーザーによる迎撃を目的で開発された『ST-24 AL』である。

キュリオテスに大量配備されたレーザー迎撃装置はこれと同じであり、ミサイル表面に熱を加えることで表面を弱らせ、飛翔中の圧力で機能不全を引き起こさせる。

もちろん飛行型エスタにも効果は期待できる。

しかし、『ST-25 fECC』はドイツの新兵器の為に新規改装されたタイプ。

その中間に設けられたカーゴベイ。

「キュリオテスの戦況は？」

「日本側に押されていますね…持って2時間です」

「『ヴェルリム』への電力供給は？」

「発電は順調です。現在荷電重イオンを精製中」

カーゴベイの中で眠る銀色の矢。解き放たれるときが、急激に近づいて行った。

「ヤバ… キャノンが死にかけてる…」

ツアドキスのパイロット、『アテナ』。軍での名前は『ミリア・ノル・早見』。

本人はあまり気に入っていない。

オリュンポス十二神の一人、『戦略の女神・アテナ』の名を持ったこの少女は、その名の通り、戦略的・戦術的認識能力が常人より桁違いに優れている。

スーパーキャノンの危機を空間の変わり方で感じとった。

『十二人で生まれた僕達は最初の『能力者』としてオリュンポス十二神の名を冠された……』

『ただし、その中で自我覚醒を果たしたのは僅か四人』
如月が自嘲するように言った。

『僕と君、アテナと……後は？』

『……ディオニュソス……』

『……！……狂乱の……神……』

『だったらお前……ペルセフォーネなんて冥府の王妃、でしょ……？』
『……まあね』

「まだ脳伝達は響くし… キャノンはヤバヤバだし……嫌になるわね」
アテナ、軍属の名を早見。

少女は苛立ちながらツアドキスをスーパーキャノンに向かわせた。
天海級旗艦は後でも充分墜とせるし、スーパーキャノンが殺られたらどうにもならない。

しかし未だにスーパーキャノンの第三射が来ない。天海級も回頭し始めた。

「射線外に出たら終わりじゃないのよ……」

無線で手近の部下を呼び出す。

「スーパーキャノンはまだ撃たないの！！？」

『げ…在…砲筒が…熱異…うの為、…冷却…うです…っ射はまだし…らく…』

「チツ…」

光る弾丸とミサイルの嵐を横目にツアドキスを最大加速でスーパーキャノンに向かわせる。

しかし、キュリオテスに差し掛かった所でレーダーが耳障りな警告音を鳴らす。

ミサイルとは違う、

「速い！」

暗闇でも解り易い純白の機体に二機のメタトルが急接近する。

「生意気…！まだ懲りないんだ…！」

腰にマウントした巨槍を取り出し様にメタトルの顔面を突く。カメラアイが砕けガラス片が飛び散った。

頭から火花を噴いているくせにまだ軌道を立て直す余裕がある。

「気に入らないし…！奥の奴…！」

もう一機のメタトルが胸のガトリングを乱射しながら突進する。

「この機体…脳伝達通信の奴…！！」

そう、もう一機のメタトルに、

「誰…！？デイオニユソス？違う！」

『アテナ…やはり貴様か…！』

雑音が僅かに交ざりながら聞こえた通信。公開周波数での無線だろう。

「その声…ヘルメス…！」

声はオリュンポス十二神、『鍊金術の神・ヘルメス』。

『その名、封じた…！今は！シス・シエルフォード・如月…！』

「何？…やっぱり、コイツ変…」

“あの時”から変わっていない。

「世界は錬金術じゃないんだよっ！」

やや馬鹿にした言い方と共に槍を回す。

『戦術なら！！こちらも！！！！』

メタトルがほんの僅かな隙間を残し、左側に回避する。

しかし、ツアドキスの長い槍が脚を砕いた。

「フン…このアテナ様に勝てると！！」

機体を回転させる動きに併せ横殴る。

「思ってたら大間違い！！」

『キャノンが墜ちるまではやらせん！！』

「そういうの……日本語で生意気っていうんだよ！！」

お互いに高速で飛び回ってる為、擦れ違い様に切り結びながら、二機はキュリオテス上空を滑空する。

端から見れば目にも留まらぬ速さだっただろう。

『我が願い…それはペルセフォーネの念い……野望！』

「やつぱりペルセ……あのナルシストちゃんか！」

『ペルセと僕にはやる必要がある！』

「悪いけど…私は職業軍人なのよ！」

肩の速射砲をフルオートで発射する。他の操作で余裕が無い。

「…アイツ…結構やる……」

余裕さえあれば口笛を吹いてあげたい気分だ。

あのダメージでまだガトリングを撃ち、接近戦に持ち込もうとする。その時、ツアドキスのコックピットに赤い表示が現れた。

見ずとも解る。

「…後退命令……！…今更……！？」

一瞬戸惑いが見えたのだろう。右脚のローターと頭部を打たれた如月が急速離脱する。

三基のジェットエンジンが臨界まで開き飛び発つ。

「速…逃げ足は達者ね……」

もう一機も何処かへ消えていた。如月が負けたのなら退くしかない。無線。

「リア……や見大尉……！後退め……令が出……います！キュリ……テス内……の敵機を撃破し……下さい」

「……分かってるわよ……」

しつこい、と思いつつツアドキスを旋回させる。

キュリオテテスの内部。上陸したのなら恐らく飛行型だろう。

キュリオテテス第三層の中央まで来たメタトル二機は、既に機能の半分が停止していた。

「隊長……どうします？」

「このすぐ上が司令塔だというのにな……」

敵部隊の追撃は激しい。多段式焼夷弾はあと二発。

「隊長……VTOLでなんとか上がれませんか……？」

「この天井を破った所が司令部とも分からん……援軍が居れば……！」

「ん……隊長！3時方向から飛行型が！」

「……？戦闘機……いや」

「メタトルですよ！援軍です……！」

確かに真右の通路から機影が確認出来た。

しかし、

「デカイぞ……この推力……！」

「……そこ……ご明答……！！」

スピーカーから突如少女の声。部下ではない。

「……！おい、下がれ！」

「え……」

通路から黄色い疎らな閃光。

そこから放たれた弾丸は、残らず僚機に辺り装甲を穴だらけにした。間を置かずにメタトルが爆散する。

断末魔の叫びが無線から聞こえた。ほんの一瞬だったが。

「……飛行……型だと……！？……ええい！一か八か……！」

隊長機は迷わず上に焼夷弾を撃ち込む。少し間が開いてから天井が

砕け、焼け落ちた。

「う……！痛あ……何すんのよアイツ……！」

瓦礫やパイプがツアドキスに襲い掛かり、動きを止めた。
メタトルは、居ない。

「上……？司令塔を墜とすつもり……？」

地図を思い出し、司令塔までの道を考える。

「ヤバイ……障害物が無い……」

ここからなら上を破壊してしまえば後は倉庫や通路、配管エリア。
その気になればエスター機は楽に通れる。しかもさっきの焼夷弾は
内部を相当吹き飛ばした。

「しかも瓦礫が邪魔だし……それにこの機体上昇出来ないじゃない
のよ……！」

バーニアがほぼ固定されている為、真上に跳ぶことが出来ない。

頭上にはエスタが楽に通れる大穴。

ただ腕を上げて機体を上まで持ち上げるエネルギーは残っていない。
せいぜい1時間だろう。

歯痒さと共にコンソールを叩く。

「全く……嫌になるわよ……」

——司令塔陥落は、それから約30分後だった。

キュリオテスの頭頂部がオレンジ色に膨らみ、次の瞬間に煙が溢
れ出すのを多くの日本人が目撃した。

時刻にして20:24。キュリオテスの指揮中枢『AXIS』が
墜ちた。

8番機メタトルは僚機、6番機メタトルを引き連れキュリオテス

内部に突入し、ツアドキスの妨害を経て司令塔を陥落させた。

「8番機は……！」

オペレーターが確認を取る。

「あの爆発です……6番機の撃墜は既に報告されましたし……」

「見込み無しか……」

撃破、若しくは行動不能になったメタトルは6機。

エスタに至っては23機にもなる。

「だが……アメリカ合衆国の旗艦……キュリオテスを沈黙させた。これは重大な意味を持つ」

「指令！キュリオテスの緊急脱出を確認！追撃しますか？」

「行き先はロシア艦隊だろう……一応、追撃隊を組織しろ」

ロシア連邦艦隊は結局戦場に辿り着けなかった。一個中艦隊とはいえ、戦力は侮れない。もし合衆国の援護に来たら厄介だったのだが。

「合衆国の緊急脱出なら収容するはずだ……スーパーキャノンは？」

「依然、沈黙しています」

メタトルが墜としたとは聞いていない。キュリオテスの陥落と共に降伏したのだろう。

「スーパーキャノンには利用価値がある！敗残兵は殺すなよ」

「キュリオテスは負けたね」

「みたいね」

「……アテナは？」

「少し前に後退したよ……でも……僕も墜落してさ……」

「……大丈夫……とは聞かないよ？」

「結構……日本にも帰れるしね」

「うん………」

「………どした？」

「嫌な予感がする」

「………何？ハッキリ言っね」

『ロシア……違う……』

『……ねえ何？どしたの？』

『分からない……でも……気持ち悪い……』

『は……ちよっと？何か……来るのか……？』

ドイツ空艇艦『ST-25 f E C C』――

暗闇の太平洋上空。その中を静かに飛ぶ機影。

先頃大きな爆発が見えた海域が近付いた。黒いのはキュリオテス、豆粒のようなものは空母かエスタ。

巨大なカーゴベイがゆっくりと、儀式のように口を開いた。

内部の中央に据えられた、銀色の円柱。横向きになっていたのだから、今はキュリオテスを指すような向きになっている。イメージは塗装の無いドラム缶。

巨大なジェネレーターと冷却装置、更に加速機。そしてその兵器の存在意義を誇示する照準機器とレティクル。

ドラム缶は非常に分厚く密な印象で、中心に小さな穴が一つ空いている。

あちこちからコードが延び、煙が染み出しているものもある。

すぐ真横に鎮座する砲筒を見上げながら、一人のドイツ軍士官が技師に聞いた、

「この艦の発電量では発射が一回なのは分かるが……連射は可能か？」

「高速度冷却装置を装備しましたし、砲筒は装甲を開放しての冷却も可能ですから……およそ30分で次射が可能です」

「ま……そんなものか」

再び遠くに見えたキュリオテスを見た。

何しろ合衆国の要請だ。遠慮無くデカイ獲物を撃てる。

「少佐！発射準備完了です！！」

「よし……」

士官や技師達は一斉に中に戻っていく。

「荷電粒子収束87%」

「重粒子パルス状変圧加速ロータリーシリンダー正常！同調よし！」

「電力に異常無し。抵抗率は正常範囲内」

「電力、21.56ギガワット！各部伝達異常無し！」

「最終安全装置、解除！」

オペレーターの一人が向き直る。

「完了しました……！」

大型荷電粒子砲、『ヴェルリム』。

世界で初めて、実験ではなく、実戦で兵器として。

ジェネレーターのファンが回転する。

ラジエーターが煙を吐き続け、砲身の至る所から火花が散る。

放たれる。光の矢が。

『まずい……逃げて！』

『ちよっ……ペルセ？』

『死ぬぞ……！』

「指令……1時の方向に新たな艦影！」

「何！？ロシア艦か！」

「いえ！空中艇です……！」

艦橋がアラームを鳴らし、危機感を煽りだす。

「超高熱源体です……！なおも増大！」

「メタトル部隊！急行しろ……！」

「日本の部隊が接近…いかが致します？」

「蹴散らす…」

画面が『STANDBY・OK』を映し出す。

「ヴェルリム発射！！」

太い砲筒に不釣り合いな小さい砲口から光が溢れ出す。

呆気なく撃ち出された青白い荷電粒子線。

ビーム。

その切っ先は、過たずキュリオテスの焼けた頭頂部を破壊し、スーパーキャノンを一瞬で貫通した。

間髪入れずにキャノンが火を噴き始める。まさに断末魔のように。

三連の巨大な砲が、根元から吹き飛ぶ。落下した先にあつたエスタの防空部隊が一気に破壊された。

スーパーキャノン内部の鉄甲弾に引火し、爆発を伴いながらキャノンの中を跳ね回り、爆散する。

天海旗艦まで衝撃が届くような大爆発が夜空を黄色く照らし出す。

「スーパーキャノン…大破！！」

誰がどう見たって分かる

少し遅れて天海旗艦が大きく揺らぐ。巨大なキノコ雲は煌々と輝く炎を纏った後、暗闇に消えていく。

「……………」

……………」

誰もが目の前の惨状に言葉を失った。

突然天から伸びた光がスーパーキャノンを貫き、引き裂き、轟沈させた。

「て……敵の……いや、今の火線の発射源を捕捉しろ！中華帝国の可能性もある……！」

「りよ……了解……」

違うとは分かっていた。

中華帝国が、休戦を宣言したスーパーキャノンをわざわざ撃破するなど。

『今の……何？』

『……知らない……確認が取れない……』

『……かなりの熱量だったよ……あの光』

『分かってるよ……！……中華帝国でも合衆国でもロシアでも無い！』

『可能性としてはE・U……とすれば』

『ドイツか……』

暗闇の中、キャノンの爆発に伴いキュリオテスが少しづつ傾いでいくのを、両軍が眺めていた――

第三章 序 緒戦（後書き）

一つ勘違いしないで欲しいのは、この世界観に『ビーム兵器』という物は一切存在しませんでした。

今回初めて出たのはドイツが開発した『荷電粒子砲』。

大電力を必要とする為、まだまだ兵器としての実用性が問われます。実際、現在でも荷電粒子砲の構想はあります。レーガン大統領のときからも盛んに研究されていました。

まあ三世紀後ですし……出しても問題無いかな、と思い登場させました。

さて、キュリオテスは、完全には、沈んでいません！
再び合衆国によりサルベージされます。

更に中華帝国も新型を開発。

ドイツは……あんまり……（笑）

というわけです。

では近々、物語はツカサの視点に戻ります。

お楽しみに…

第三章 日常（前書き）

特に大きな展開は無いです。

そろそろ合衆国が赤石本土へ侵攻しそうなので、その布石です。

第三章 日常

L - 23 『P e r s e p h o n e』 ペルセフォネ

戦略強化人類機関第三世代被験者、12人の一人。

二世紀前からこの機関は存在し、何千もの被験者を『開発』し、兵器にしてきた。

ペルセフォネは機関で23番目に自我が発現し、その能力を開花させた。

しかし第三世代の11人は殺された。

自我発現が見込めなかったからだ。

『アテナは僕、L - 251と同じ、君の模造品…』

『……強化人類機関がまたオリュンポスシリーズを開発したのか

………』

『オリジナル……第三世代の中で発現したのは君だけだけど、それ故に能力が桁違いだったんだよ』

『でも今回のオリュンポスシリーズでも発現したのは君、ヘルメスとアテナ、デュオニュソスだけ………』

『強化人類機関はこのことを？』

『知ってるね……皆散り散りに逃げたか、アテナは軍属だけど』

『僕もね』

『その方が成宮ツカサに近付きやすいんだよ……』

『解ってるよ？これから赤石に帰る』

『うん……ツカサの件は任せる』

『………分かった』

ツカサを蒼い光で囲む『アンゲロイ』のコアルーム。
Amphitriteの管轄になったアンゲロイに入るのは意外に
簡単だった。

奈々瀬大尉に、適当な理由をでっちあげて入室許可申請してもらった。堅そうに見えて、意外といい加減なこともしてくれる。
本人曰く

『今回だけですよ……（溜息）』

「ま、意外な一面かな……？」

「何か言いました？」

「イーエ」

奈々瀬大尉は少し首を傾げてから踵を返し、

「では、私は外で待ちますので」

かかとをカツカツと鳴らし、早足で部屋を出た。この部屋が苦手なのだろうか？

しかしツカサは特に気にすることも無く、『中枢』に話しかけた。

「アンゲロイ？」

『はい』

少し前に聞いた声と全く同じトーン。

「えーっと……名雪の……名雪って知らないか……」

『……特別な関係でしょうか』

「違う……最近のパソコンは変な事言うな……」

『スーパーコンピュータです』

即答された。

「……俺の、鞆……知らない？」

アンゲロイは全てのフロアを管理し、データ化し記録し続ける。鞆なら見付かるかもしれない、というのは嘉島さんの助言。

『……サーチに時間がかかります……お待ち下さい……』

蒼い画面に『Search』の文字が泳ぐ。

目まぐるしく変化する表示は、確かに退屈はしない。

『現在のフロアデータが欠落しています。過去のデータでよろしいですか？』

「うん…構わない」

『発見しました』

「早っ」

『中央塔67階第二区間通路で発見しました。表示しますか？』

「お願い」

蒼穹の中心に画面。地図が現れた。

『職員以外の鞆を発見しました。ただしこれが貴方の物か否か、更にその保存状態については保証しかねます』

「……………ま、いつか……………」

『他にご用件はありますか？』

「……………」

ここに来た理由はもう一つある。

義父。父がどれだけ知っていたか。

父が何を知っていたか。

どうせアンゲロイはAmphitriteに管理されてるのだ。戦略強化人類機関に関しての情報もあるかもしれない。

「僕の父が残したデータ…それと戦略強化人類機関について……………」

『貴方のお父上に関してはアクセス制限があります。許可出来ません』

「やっぱり何かあるんだ……………機関は？」

『表示します』

至る所に画面が現れた。地図、写真、文書。

読むのはかなり苦勞するだろう。

『…詳細を解説しますか？』

「いや…口頭をかい摘まんで頼む」

それでもかなりの時間がかかるだろう。

「奈々瀬大尉には帰ってもらおうか……………」

中華帝国官営工場――

中華帝国本土、旧日本海側に建設されたEST A専用工場。

元々は『白波瀬』の開発に伴い建設された。

その新型開発用ドック。

「現在『変面』の開発状況は？」

「素体は完成していますが……面のフィードバック方式に問題が発生しました」

二人の士官が話す前には一台のエスタ。鋼鉄の内部骨格が剥き出しになっており、頭部は灰色のベールで隠されている。

機体の至る所には漢字のマーキングが描かれていた。

「合衆国の新型機に対抗する為の機体だ……急がせろ」

「出来る限りは……」

『ロシア連邦の南部に位置する戦略強化人類機関は、現在ほぼ活動を休止しています。13年前に複数の爆発が、衛星から確認されました』

「爆発？」

『外部からの攻撃では無いようです』

「じゃあ内部の……いざこざ？」

『不明です。幾つかの熱源の脱出が確認されましたが』

「……ふうん……逃げ出した奴の行方って分からないのか？」

『ロシア連邦は現在に至るまで、所在を掴んでいないようです。人間と決まったわけではありませんが』

強化人類機関ならまず人間で間違い無いだろうに。

具体的にどんな実験があつたか知らないが、被験体が脱出したのなら大問題。

「『あの声』とも関係…無いよなあ……………」

「？」

「……………何でもない」

蒼海 香恋は隣の友人に話しかけた。

「お姉様？」

「……………」

名雪は、また『お姉様』か、という顔をする。

「？どうなさいましたの？」

「いや…別に……………で、何？」

名雪は諦めて無理矢理本題に戻す。

「今日はツカサさん見ませんか？」

「今日、授業中止じゃん…ツカサなら早々に帰ったわよ」

短縮授業が終わり、気が付いたらツカサは帰っていた。

ちなみに中止の理由は細かく教えられなかった。まあ今に始まった事ではない。

赤石内では日本本土への避難・移住も検討されている。

それだけ赤石のダメージが大きいのだ。

「最近…ツカサさんの様子もおかしいですわよね？」

「…そう？」

「いつもなら隣の殿方と帰るというのに……………今日は特に急いでましたわね」

そういえば、

「…あまり私とも顔合わせないしね」

「お姉様、寂しいですわよねえ？」

また香恋のニマニマ顔。

「貴女……結構メンド臭い……」

名雪が嘆息する。

香恋は少し喉で笑い、

「そろそろいきますか？お姉様」

「そうねえ……」

赤石の太平洋側から、中華帝国航空艦『玄武』が入港した。艦内で、シス・シエルフォード・如月は窓から初めてフロート都市を眺めた。

上層は瓦礫の山。

中層からも、所々荒れ果てている。

「スーパークャノンか……派手にやられたんだ……」

淡いグリーンの船体は、海上に敷設された滑走路に着水し、緩やかに支柱のドックへ入った。

「ツカサ君？」

「あ……嘉島さん」

アングロイのコアルームでデータの閲覧を終わったところに、嘉島さんが入ってきた。

「誰か居たようなので来てみました。何か調べものですか？」

「ええ、まあ……前に奈々瀬大尉居ませんでした？」

嘉島さんはチラッと振り返り、

「ああ、まだ居ましたよ？……少し、退屈そうでしたが？」

少し悪いことしたかな、とツカサは後悔した。

「そろそろ夕方です。今日はこのくらいで」

嘉島さんは左手首の時計を見せた。午後4時半。いつの間に。

「分かりました……あ、一度67階まで行けますか？」

嘉島さんが若干微妙な顔をして、

「どうでしょう……現在の封鎖状況は把握していませんし……どうして？」

「ちよつと、ね」

もちろん目当ては名雪のノートだ。

「ツカサ？」

成宮重工を出、駅前に来た辺りで朝宮 津に出会った。

「津……どうして？」

「交通公社のエリアが封鎖されるってんでな、少し見に来た」

津の父は赤石フロート交通公社に勤務していた。その関係で津も来たのだろう。

「暇だったからな」

「そういえば今日お前休みだったなあ……サボりか」

「なんだよ、人聞きの悪い……」

そう言いながら口元が緩んでいる。学園が退屈で最上層まで来るとは。

「言つたろ？暇だって……まあ特に何も無かったけどな……お前は？」

「ああ……成宮重工に、な」

「名雪ちゃんのノートか？」

ツカサの体が一気に固まる。

「んな！？何でッ！？」

「美仲に聞いたよ。失くしたんだって？」

「あ、ああ……」

津は駅のホームに向き直り、

「別にいいんじゃないの？……仕方ないことだし」

「簡単に言っつなよ……」

そうなのだ。

結局名雪の失くし物は見付からなかった。あの崩壊だ。とつくに封鎖されて崩れていた。

「これから何処に行く？」

「とりあえず……名雪の寮まで」

津は、そうか、とだけ言い残し、改札に歩く。

「俺、まだ行くところがあるんでな、じゃあなツカサ」

「ああ」

ツカサは携帯電話の時計を見る。

次発まであと3分。

「行くか……」

赤石第七層中央駅の裏、ターミナルエリアを一望出来る歩道橋。

朝宮 津は携帯を取り出し、周りを一瞥しながら耳に当てる。

3度のコール音の後、もの静かな返事が返ってきた。

「朝宮です……ええ、もうすぐ『玄武』が入港します……成宮ツカサと如月は……？」

ターミナルにまた一つ環状線の車輛が入った。多分ツカサが乗る便だろう。

「じきに……はい、最上層は閉鎖されました……ええ……成宮重工も中部層支部に……わかりました……ええ……」

頭上の高架を、高速線が擦過していく。激しい風と轟音の中、たなびく髪を押えながら一言付け足した。

「……………デュオニユス……」

『キュリオテス』——

ドイツの荷電粒子砲により、移動砲台『スーパーキャノン』が轟沈されたため、『キュリオテス』の下部層が浸水。

少しずつ傾いでいく各部は、常に鉄が軋む音が響き、その身を削っていく。

「衛星写真で確認しました。キュリオテテスは合衆国艦隊のサルベージにより、改修を受けています」

「最上層は破棄するのだな？」

「そのようです…スーパーキャノンも使用は不可能のようですね…」

「それはそうだろう…あの爆発だ」

あれ以来、荷電粒子砲特有の電磁波妨害、大出力熱源、磁気異常は観測されていない。

そもそも大気中での粒子砲使用は、決して効率的なものでは無い。

使用電力は従来の兵器とはケタ違いであり、更に荷電粒子精製と加速は相応の技術力を要する。おまけに大気中では、重力、自転、湿度、地磁気等の影響から、荷電粒子線は直進しない。

兵器としての実用性に若干の疑いがあつたのは事実だ。

「もともとドイツでの開発は、噂にはなっていました…」

「極秘…：：：だろうな。最初から兵器への転用を前提にしていたということだ」

「……………兵器以外の使い方があるんですか……………」

オペレーターはひとり呟いた。

名雪の寮は、ツカサ達の寮より少し離れている。基本的に学園からは、学都線で寮前の駅に帰るが、女子寮の方が学園に一駅近い。

なんつー不公平。

名雪の部屋は3階の右端。

隣には見慣れた『蒼海 香恋』の文字。

インターホンに手を伸ばす。

「……………」

何故か躊躇してしまう。名雪が怒ると思わないが、

「……やっぱマズイかなあ……………」

まあいい。何か買ってやろう。

何がいいかな。

ツカサはしばし迷う。ここまで思案し、名雪の趣味について深く考えたことが、今まで無かったことに気付いた。

それにあまり高価な物も好まない……かもしれない。

「……………あいつの趣味って何だ？」

……………やっぱり思い浮かばない。

「ま、いつか」

インターホンを押した。

『はい……はいはいはいはいはい？』

『はい』が段々近づく。

中で何やらボタンボタンと物音が。何をやってるんだと、

ガアンツとドアが激しく揺れた。

「うおっ？」

名雪が何かドアにぶつけたらしい。

『いたた……………（ガチャ）……どなたあ……………」

「……………」

名雪のデコが赤く腫れている。この期に及んで何につまづいたんだ。

「いたあ……ちよつと缶踏ん付けて……」

確かに名雪の足元にはスプレー缶が転がっている。

『ゴキブリスターα』……………

「ゴキブリ出るのか……………」

「うん……ちよつと……………」

またデコを摩る。相当強くぶつけたな。

「その……何か……用？」

「あ……迷惑、だったか？」

そう聞くと名雪はブンブンと頭を振り、

「うっんっ？ そんなことないっ！ ど……どうぞ？」

まだ中に入れるとは言っていないぞ。

「入んないの？」

名雪が目パチクリさせながら、俺を見つめる。

「いや……あの……お前の……」

「？」

「の、あと……」

イカン。声が詰まった。

「へ？ 男？」

「違うっ」

あと、を男と聞き間違えたらしいな。

「お前のノートの件……な」

「んー……だから別にいいって言ったじゃん」

「けどなあ……」

名雪自身も困るだろう。

「大丈夫だってば、ちゃんと香恋のノート、写したから」

「でも困っただろ？」

「うん、思いつきり」

少しは気遣いつてもものを持て。普通はそんなことないって言うだろうが。

「だって困ったもん……」

名雪が、少し上目使いでツカサを睨む。やっぱり少しばかり怒ってるな。

「……………悪かった」

「ホントにそう思ってる？」

……………試されてる？

「えーと……何が望みだ……？」

「美連屋の限定クレープ、トッピングは3分限定のスパイスペシャルオンリースリーミニッツエクストラバーション、店は第六層の

第4区画支店ね、あと特製コロボドリンクを――」

「ちよつと待て。それは一体いつまで続くんだ？」

「んー……あと3品くらい？」

「くらい？じゃない。俺の財布事情も知らんと。

しかも美連屋^{みづなや}って言ったら高級クレープ屋で、赤石でも相当に有名だぞ。

しかも第六層って……

「……ウ・ソ……」

「……は？」

名雪の顔がとたんに悪戯っぽい笑顔に変わる。

「探してくれたんならそれでいいよ。うん」

ホントに？

「言っただでしょ？気にしないって……」

「あ、ああ……」

我ながら気の抜けた返事だ。

「そのかわり」

「まだあるのかっ」

フン、といった感じの顔で名雪が胸を張る。

「当然でしょお？それなりの手間賃ってやつよっ」

結局金を使わされるのか……ツカサは腰に手を当てて、胸を『えっ

へん』と言うように張る、幼馴染を見た。

スレンダーな身体は、どう頑張っても変化無し。

「……断崖絶壁には変わりないんだが……」

「……何か言った……？」

ヤバイ。殺されるっ

ガシツつと肩を掴まれるツカサ。

ちよ、

「つと待て、落ち着けっ、まだ何も言っていないだろ！」

名雪は俯いたまま、何やら重い笑い声を漏らす。

怖い。

「齒ア食いしばって」

「……………え？」

「……………どうせあたしは香恋みたいに巨乳じゃないわよ！！
馬鹿！」

肩を掴まれては、為す術も無い。

結局ツカサは名雪に、知る限りの格闘技を繰り出されてから解放された。

「……………川が見える……………」

「多分、三途の川ね」

そんな殺生な。

如月はようやく入国審査を終え、赤石の街に降り立った。

軍人とはいえ、中華帝国側から出撃したため、普通の軍人とは違い審査が厳しかった。

終わった頃には既に陽が傾き、ネオンサインが輝き始めた。

もちろん街の被害は凄まじかったが、それでも活気溢れるほど赤石は広大だった。

彼は、自分が向かうべき場所を分かっている。

成宮ツカサ――

「予定通り…成宮の意識が近い……………もうすぐだな」

彼とペルセフォーネには、確かに成宮ツカサが必要なのだ。
世界を変える。再び、破壊者の手で――

軍司令部――

「都市相は？」

「やはり、決定事項のようです。アメリカ軍の赤石侵攻を確認しま

した……」

「そうか……………」

司令官は重々しく呟いた。

そうなのだ。このフロート都市、赤石は限界に達している。

軍フロート基地『黒波』だけでは到底、赤石の防衛は出来ない。

日本政府は決定させた、

「赤石を、放棄すると……？」

政府機能の、日本国本土への転移。

赤石の余命は、確実にカウントダウンを速めていた――

第三章 赤石放棄

先の大規模地殻変動については、もう説明の必要は無いと思う。
今現在は急激な変動は停止しており、小康状態にある。

日本についても同じだ。

本州はほとんど姿を消し、四国と九州の一部が壊滅、北海道は大雪
山系を残し沈下。日本はこの状態で国土を保っている。

首都機能は、一世紀程前に『赤石』に移転し。それ以来、赤石は国
交、政府機能、経済、産業の全てを担ってきた。

『……現在確認中ではありますが、アメリカ合衆国の艦隊が、赤石
に接近しており——』

ツカサの目の前には、記者会見らしき壇上で演説している、初老の
官僚が映し出されたテレビがある。

学生寮で何気なくテレビを点けたら映っていたのだ。

「……………何だこれ？……………」

さっぱり分らない。

今更合衆国が侵攻だ、なんて珍しくもない。

しかし、ふと気になって画面右上の文字を見つめる。何だか怪しい
表現が、ゴシック体で表記されている。

そこには、

「……………赤石…放棄……………」
とあった。

同時刻——

「お姉様！」

「あ、香恋……」

同じ学生寮の隣人、蒼海 香恋が、美仲 名雪の元にやってきた。香恋特有の柔和な笑みが無い。

「お姉様も観ましたのね……？」

「うん……」

名雪は自分の部屋奥のテレビに向き直る。香恋も近寄って、同じ様にテレビを観た。

「——よって、日本政府は、赤石の完全放棄を、ここに発表致します……！」

「どうなるんだ？俺ら」

「さあな……港じゃ、もう疎開連絡船が運航してるみたいだが……」

翌日の学園でツカサと津が、担任教師の話を盛大に無視しながら相談した。

「日本本土は受け入れを進めているし、極東国家群に行く便も増えるしな」

「……学園はどうなるんだ？」

「本土に姉妹校みたいなものがあるらしい……そこに転校だな」というのは津の解説。

「ふうん……で、軍は？」

「戦力はそのまま温存……だそうだ……」

「……戦ったって……何も無いだろうに……」

「……政治って、不器用だからな」

観光島『美星』——

『13:00時、美星発、九州準フロート港行き106便、定刻通り出航となります……ご乗船のお客様は速やかに、ご搭乗願います……』

…北海道準フーロート空港行きは、30分遅れです……—」

観光島美星は、本来海外からの旅客、及び国内の娯楽を対象とし建造された、低海上型フーロートである。

割と海面に近く、高台の裏には人工海岸やホテル群がひしめく、一大テーマパークだ。

が、現在は日本本土に向けての疎開連絡船、空路が大幅増設され、国外出入国は制限されている。

「大尉！」

「？」

奈々瀬・ルノ・クラート大尉。彼女は空港管轄支部に派遣され、その凡怠な職務にうんざりしていた。

そんな彼女に部下が報せをよこした。

「何？」

「黒波発、軍移送艦第三便の出航時刻が決定しましたが……乗船しますか？」

「…まだ行く前にすることがあるけど……いつ？」

「明朝、0730です」

「早いわね……」

奈々瀬が部下の持っていた資料をめくる。

胸辺りへの視線が気になるが無視した。

「都市相は？」

めくりながら部下を一瞥し、質問。

「既に、第三便への搭乗が決定しています」

「……だから政治家は嫌いよ……」

奈々瀬自身、高みの見物をしながら、椅子を温めることしかしない政治家、管理職が嫌いだった。

それに、Amphitriteが何度正規軍と都市との間で振り回されたか。

「Amphitriteの『アンゲロイ』移送を確認したら、本土便に乗ります。移送艦の余裕は？」

「急いだ方がいいですよ……？合衆国と、ロシアの侵攻の問題がありますから……」

そんなに時間があるとも思えない。

一ヶ月以内には全住民の退避を完了しなければならないのに。

「了解：今日はいいわ……後は税関に任せるわ」

「……………いいんですか……？」

「本部に仕事如山積みなのよ、ここはもう十分」

「……………了解」

若干呆れたように溜息を吐いて、部下は帰って行った。

奈々瀬自身も、こんな感じで軍での生活を送って来た。特に問題になつたことも無いから不思議だ。

『13：00時発106便、出航します…次発、佐世保行きは16：54時を予定しております……………』

ホルルの巨大モニターに、海中高速艇が出航する光景が映つた。

MHSS-08型、高速潜水旅客艇。

九州まで2時間もかからないだろう。

奈々瀬はふと思ひ出す。かつて、オケアノスに移転してもらうよう要請していた、

「…………ツカサ君はどうなるかしら……」

黒波正規軍指令部――

その男は怒りと焦燥を隠しもせずに、部屋に足を踏み入れた。

指令部は、初めて合衆国艦隊が襲来したときと同じ、いやそれ以上の喧騒に包まれていた。

「指令！フロート級1、空母3、イージス艦24、大部隊です！」

「ECM、ECCM起動、赤石の住民退避を急がせろ」

指令官が席に着いた途端、第一次警戒態勢が発令される。

未確認の勢力が侵攻する場合に発令される、非常警戒発令である。

「艦隊は順次発進、エスタは赤石本土侵攻に備え迎撃準備」

「連絡船団を防衛対象、クラスAと認定。艦隊は優先度に留意」

オペレーターの命令は復唱され、情報モニターを埋め尽くす。

と、突然表示が深紅に染まり、3DCGが展開された。

「敵艦、初弾発射しました！着弾まで、3、2！…」

ぴったりのタイミングで振動が部屋を揺るがした。しかも近い。

「…！ペトリオット、自動迎撃発射！絶対防衛線を死守しろ！…」

「了解！」

如月は確かに合衆国艦隊の侵攻を察知していた。

あの時と同じ、アテナの脳伝達通信の気配も同様に。

「……ペルセ？」

「…何？」

「合衆国艦隊の侵攻…関知してるの？」

「まあね…？どさくさに紛れて、成宮ツカサを確保…頼めるかい？」

「ふざけるなよ……赤石に来る為に軍に潜り込んだっていうのに…」
「構わない。ツカサを優先して」

「……………」

如月は一方的に脳伝達を遮断した。

成宮ツカサの確保が最大の目的であったが、ならわざわざ軍人になる意味が無い。確かに日本が戦時下に置かれるなら、軍を通しての入国は楽だ。

なら尚更、可及的速やかに成宮ツカサを拉致すればいいだけだ。

恐らく、軍人としてのシス・シエルフォード・如月に、

「オリュンポスの処理をさせたかった……かな？」

だがペルセフォーネ自身も、アテナの出現は予想外だったようだし、多分行方不明のデュオニユソスの始末を任せなかったのだろう。

「…………嫌になるね」

如月は揺れ動く街を歩き出した。

成宮ツカサの気配はまだ消えていない。彼まで辿り着けば全てが終わる。

それこそ、ペルセフォネ無しでも世界を変えられる。その何か、成宮ツカサにはある。

あるのだ。

無自覚の力が成宮ツカサには。

既に合衆国艦隊と日本艦隊は交戦状態にあり、赤石の街は静まり返っていた。

全域退避が発令され、これ以降、街に居座るのは事実上不可能となる。

住民は恐らく、中華帝国側空港に移動したのだろう。

海路、及び太平洋側空港は封鎖された。残るは先の空港と、観光島の海中高速連絡船。

如月は一度、太平洋側空港に行き、VTOL機を借りてから再びツカサの住む層へ向かった。

ただし借りたというのは正確ではない。空港に侵入、適当な航空機を選び、勝手に持ち出す。全て簡単なことだった。

『錬金術』

それが如月に与えられた、名であり、力であり、業であった。

触れた物を例外無く、原子のレベルから変質させ、その反作用で変形させる。

彼はそれを、『Alcymia』（アルキュミア）と名付けた。ラテン語でそのまま錬金術を意味する。

ただそれだけ、簡単なことだ。

「ツカサ！」

「名雪！？」

退避勧告は既にツカサ達の住むエリアにまで届いており、多くの学生は荷物を抱えて送迎ヘリに走る。

その最中、美仲　名雪に呼び止められた。例の巨乳美少女は居ない。名雪は手揚げだけを持って走って来たようだった。

「荷物は大胆、連絡便の貨物に乗せたから…」

と言っても一人につき、段ボール一つが上限なのだが。

だが、ツカサ自身は一切気にしなかった。どうせ私物はコンボや安い漫画類（ちよっと人には言えない本も含む）、携帯電話、私服くらいだ。

後は学園が支給してくれる。父が死んだせいで、奨学金制度も受けられた。

遺産もある。

ただ名雪には言わなかった。

「あのお…ちよっと、ツカサに来て欲しい所があるんだけど……」
言葉の節々が遠くからの爆音で霞む。

「え……何処？」

「ちよっと……ね……何？迷惑？」

「い、いや……いいけど……」

名雪が少しだけ睨む。

面倒な奴だ。話したら幾らでも出来るのに。

「……ここじゃ……駄目なの……よ……」

名雪は何か決意したような、それでいて思い悩むような表情をして、ツカサを誘った。

『第六、第七輸送機、戦線離脱！帰投します！』

『……！……！……！第八艦隊……を……む！聞こえ……いのか！？』

『右翼メタトル小隊が孤立しています！援護を！』

空域に入り乱れる大量の無線が、目の前の情報戦術モニターが流れる。

それを、目の視界から外すことなく、一人の少女がコックピット内装のキーボードを叩く。

黒波正規軍や Amphitrite のパイロットウェアズとは違う、身体をピッタリ絞めるタイプのスーツ。

その為、幾らか大人びた表情の少女の、スレンダーな肢体がよく判る。

彼女は旧東京湾沖、海上で待機する機体。

『メタトル・カスタム』

その中の少女は作業を中断することなく、無線回線を開き、呼び掛ける。

「新美小隊長機、軍の連絡船を確認、赤石方面無線を掌握。指示を」あくまでも職務のように述べる。

返って来た無線も、同じく簡潔な物だった。

『連絡船の到着が予定より遅い。赤石からの部隊撤退を考慮し、貴隊は現状待機。ユア・レディ？』

「アイ・レディ。サキルにも連絡を」

そう言い残し、無線をシャットダウンする。

相変わらず赤石方面の無線は混線している。黒波の無能は噂程度に聞いていたが、

「バカばっか……」

日本本土正規軍、旧東京湾艦隊所属、新美にいみなつき 捺姫少尉はそう呟いた。

同地点直下海中――

新美 捺姫の乗機が空中待機する、その直下。

初の水陸両用型エスタ『サキル』。

日本本土で開発された次期海中活動型エスタは2タイプ存在する。海中での精密作業を前提とした工作機械タイプ、『紅穹1号』

そして海中作戦術型タイプの『サキル』はよりスタイリッシュなフォルムを持ち、空中型のメタトルを粗体になっている。腰部や脚部、背部に推進用スクリューと、沈降用バラストを備えている。

右手にはスナイパーライフルを彷彿させる巨大な銃を軽々と持っている。

同じく内部では一人の少年が眠っていた。

比喩ではなく完全に眠っている。ただコックピット内のカメラはOFFにしている。ばれる気遣いは無い。

『……少尉！……寝てる……かよ……ちよつと！……』
ばれた。

静かだったコックピット内に、雑音が響き渡る。

どこかで聞いたような少女の声。

「……… ああ……？……… 新美しよおい………」

『しよおい、じゃない！……海中……撃体制はどうか！』

「……… アイ・レディい………」

寝ぼけ声と寝ぼけ眼で、無線の周波数と音量を調節する。

『ハックするわよ』

「うー……… わかった……… 作戦ポイントは？」

『現状のまま待機。撤退してくる部隊に備えよ。ユア・レディっ』

「アイ・レディ………！」

今度はハッキリとした口調で、日本本土正規軍旧東京湾艦隊所属、
みなみる けい
皆見 圭は答えた。

第六層は赤石の中でも有数のビル乱立地帯だ。

元々は工業区、及び電気街のようなものだったが、いつの間にか賑やかなしい、『特殊』な街になった。

ついたあだ名は『新秋葉原』。由来はよく知らない。

「んつと………ビル街………？」

「うん………」

今はビル街を一望出来る展望台公園に、二人して立っている。

やっぱり幹線道路、脇道、ビル問わず人影が見えない。全ての企業、店舗が封鎖されているのだ。

特に興味があつて来たことは無かったが、随分殺風景に感じた。きつといつもは活気に溢れた街なのだろう。

それに、結構薄暗い。原因は解る。

フロート都市共通、そして一番の難点が、太陽光が極端に入りにくい、ということだ。

赤石の場合は、陽の当たる建造物の屋上、及び各層の天井に大ミラーを設置しており、光の反射拡散を利用して影地区に太陽光を充てている。時間に応じて稼動するそのミラーが停止している。その為、曇り空のような空間が広がる。

「覚えてる？」

名雪はそんなことも気にせずに続けた。

「え……？」

「ここ……」

名雪は眼下に広がる街を観る。

「あ……」

そうだ。名雪と再開した、ツカサにとっては妙な場所。幼馴染みといっても、ずっと一緒に育ち、一緒に過ごしたわけではない。

一度、ツカサの母が死んだことで、成宮家は引越した。それから2年経った後、この街で再開した。

冬、雪の降る夜に出会った。クリスマスイヴの前日だった。

「私が本買いに来たときだったね……」
思い出した。

「ロボット物の漫画ばっかしだったな？」

「あ、あれは弟に頼まれてっ！」

名雪があからさまに赤面した。

「……………悪い？」

「いや？」

名雪が普通の少女マンガを読まないのは、前々から知っていた。ただしヌイグルミや、妙に『ほわほわ』したモノは大好き、というのを知っていた。

「もう12年か…」

「なんか…懐かしくて…ね」
「だな……」

お互い、2年ぶりに出会った印象が全く違った。

ツカサは何だか『ぶつきらぼうになった』と言われ、名雪は『そそつかしく、やかましい』と言われた。

お互いに面倒臭い人生を送っているのかな、というのはツカサの印象だった。

「なんか…色々あってさ…この街も沈んじゃうんだねえ…」
「……ああ……」

と、突然不快極まりないサイレンが鳴り響く。同時に落ち着いた女性性の声。

『赤石行政府より警告致します…第一層第3区画の完全退避を確認しました…第3区画の強制パージを実行します……ご注意下さい』
その少し後に巨大な物が弾け、鉄がねじ切れる音が遠く響いた。
遙か下の第一層、外側に位置する区画が、周りの工業区を巻き込みながら消え去っていく。

海上で続く艦隊戦の放火が、落ち行く地面を砕いていく。

大きな水しぶきと共に、振動が展望台公園を揺らした。

「……いつまで続くのかな…戦争……」

「さあな…」

「………私ね…両親が嫌いだったの」
「……？」

突然、そんなことを言われたツカサは少し戸惑った。

「…父親が、浮気しててさ…母親が若い男と駆け落ちして……いつも弟と二人ぼつちで…」

ツカサとある種似ていた。父親が居ず、常に孤独に苛まれた。

名雪はうつすら見える海上の爆発やミサイルを眺めている。どこか虚ろな感じ。

「……若い女に逃げた父を、母は全然問題にしないで、毎日夜遅くに帰って来て……」

名雪の声が少し潤んだのを、ツカサは聞かなかったことにした。

「……そう……か」

俯いたままだった、セミロングの髪をたなびかせた少女は、やおら振り向いて、

「私…… オトコが、ムリなのかな？」

自虐的に微笑んで言った。

ツカサは口を開いた。名雪が、何か望んでいるのなら、ツカサは言うべきだった。

「……俺は……」

「……」

「……それでも……お前、が……」

だが、続いて発した言葉は、突然の轟音に遮られた。

ツカサが振り向いたその先、コンクリートが砕けるのが見えた。しかも、鼓膜をつんざくような雷鳴が聞こえる。雷ではない、コンクリートと中の鉄筋が軋み、無理矢理歪められた轟音が肌を震わせた。

「何……あれ……!？」

名雪が呻くのも当然だ。

コンクリートが、鉄が、まるで粘土のように伸び、そして窯で焼かれたように変質していく。

普通では有り得ない挙動を、地面が見せ付ける。

円い孤を描く、コンクリの先端は真っ黒な鉄に変わり、それは牙となって再び地面をえぐった。

ツカサと名雪は考えるより早く駆け出した。

「何なのよ！あれ！」

「俺が知るか！」

名雪は必死でツカサの手を握り、駆けている。ツカサが少しでも走りを緩めれば、名雪はツカサにしがみつき座り込むだろう。

それを狙うように、展望台公園のあちこちから、牙がアーチとなり襲い掛かる。

「うわっ！」

ツカサのすぐ後ろを鉄筋が横切った。

名雪はその鉄筋に強かに腹をぶつけ、崩れ落ちる。

「……あう……痛……ッ……」

「名雪……！」

その瞬間、ツカサと名雪の空間が開いた。すぐ足先の地面が砕けたのだ。

「えっ?! キヤアアア! …!」

名雪が倒れた地面が崩れ落ち、激しい土煙がツカサを覆い隠す。その間も鉄の雷鳴は続いた。

『第六層で異常発生!』

「第六層……? 退避は完了したはずなのに……」

奈々瀬大尉は軍用の最新V／STOL型兵員輸送機で、無線を受けた。

兵員輸送機とあって、定員は20人程。

今は奈々瀬大尉と操縦士の二人が搭乗している。

輸送機は、上から見ると尻尾の無い、やたらと羽を横に延ばした、エイのようだ。しかし横から見ると甲殻類を思わせるフォルムをしており、更には下に伸びる脚を備える。

脚といってもリアルな物ではない。滑らかな表面の補助脚だ。

「行かないわけにはいかないでしょうねえ……」

「私達が一番近いみたいよ……急行して」

操縦士は手早く発進させ、第六層を目指した。

灰色の闇が消えるのにはしばらく時間がかかった。

先程まで整然としていた展望台公園は、メインラウンジが真つ二つに割れ、少し傾いていた。

周りのビルの窓ガラスは粉々に砕け、辺りに散乱していたが、ツカサの周囲には数える程しか無い。

ガラス片を6枚数えたところで、カウントを止めた。それより異様な物が、ツカサを取り囲んでいたからだ。

さつきまで生きたように襲って来た鉄牙が、ツカサの空間を護るように、あるいは隔離するようにそびえ立つ。

さながら鳥籠のようだ。

「……………名雪……………」

幼馴染みの姿を探すが、見当たらない。

とにかく、この狭苦しい鉄籠を抜け出す。そのことを考え、鉄筋に手を触れる。

「触らない方がいいよ……………」

思わず手を引っ込める。

声は透き通るようで、有無を言わずに近付いて来た。

「……………電線から高圧電流を引いたから……………死ぬよ……………」

まさか、と思い、近くの鉄片を蹴り上げる。

鉄筋にぶち当たった鉄の断片は、強烈な火花と光を出し、墜ちた。

「……………誰……………」

「上……………」

と聞こえる。

反射的に頭上を見上げる。

ツカサは、やけに挑戦的な顔をした、それもかなりの美少年を、そこに見つけた。

鉄籠の上に悠然と立っている。何故か感電している気配は無い。あまり長くはない髪は、あちらこちらに跳ね上がり、薄く青みがかっ

ている。

「もう一度聞くけど…誰…？」

自分でも落ち着いてるなと思う。

「……呼びたいなら…如月でいいよ？」

「………」

何処かで聞いたような声だ。あの既視感に溢れた、頭に響き続けた会話。

その時の声だ。
多分。

「……来てもらう…一緒に」

「…この状況で信じるはずないだろ」

「すぐだ。じきに楽しくなる」

まるで話を聞いていない。

この鳥籠といい、展望台崩落といい、名雪も居ないし、今度は謎の美少年？

ふざけるな。

若干俺よりカツコイイし…

「………錬金術って知ってるかい？」

「は？」

錬金？ナニソレ？

「要は元素の転換、電荷量、陽電子……言っても解んないか」

「遠回しに馬鹿って言ってるな……」

如月、と名乗った少年が肩をすくめる。

「…理論は簡単だ、あらゆる物質を形作る原子の性質を、原子核の周囲を回る電子の操作によって変更する。後は、僕の体内の電荷の操作と、必要な力を加えてやればいい。3世紀前の技術だ」

つまりは、ツカサ自身をこの鉄籠に閉じ込める為に、鉄、ひいてはコンクリートまで変質させたと言いたいのだろう。

そして名雪を引き離れた。

「…名雪は何処だ！」

「さあ…君の檻を創るのに精一杯でさ……女の子には手が……」

「ふざけるな！！！」

思わず叫んだ。

そろそろ限界だった。いきなり戦争が起き、父親が死に、軍に監視されかかり、見知った街は沈み、今度は錬金術モドキの男、揚げ句の果てに名雪まで居ませんか？

ホントに、本当に訳がわからない。

「……失礼な口を聞かないで貰いたいな」

突然声に陰がこもる。

今まで平然としていた眼が、抜き身のナイフのように鋭くなる。まさに切り付けるような、恐ろしく冷たい眼だ。

「……この僕を何だと思ってる……？オリュンポス十二神、錬金術を司りし、創られ生み出された神」

雲の海から這い出た太陽が、再び辺りを煌々と照らす。

その少年の逆光はまるで、観音像のような神々しさと、眩しさを放った。

エルメス

「錬金術の神：HERMES、出来れば『如月』なんて俗世的な名で呼ばないで貰いたいんだが……」

「か……み……」

「………そっ………信じるかい……？」

幾らかくだけた話し方にはなったが、眼はこれっぽっちも笑っていない。

「君には生きて、来てもらう……少し手荒くするけど」

「………どうする気だ」

実際、相手を睨むだけでも精一杯だ。

足は震えているし、握った手は汗ばんで気持ちが悪い。今すぐにも逃げ出したい。電磁籠が無ければ。

「さて………僕のV T O Lは些か小さい。複座型だけど……流石に一人の籠を積んで飛ぶようにはなっていない」

「………どうする気……？」

本日二回目の同質問。

如月、もとい、神様は迷ったようだ。

大体、予想はつく。

ツカサを殴って連れていくか、説得するか。

如月は小さく呟く。

「……………機体にぶら下げるか……………」

予想外だった。

「……………面倒だな……………わざわざ生かす意味が……………」

瞬間、如月の目付きが変わった。それこそ、さっきとは違う、危機感に溢れた眼に。

それと、ジェットエンジンの咆哮が聞こえたのはほぼ同時だった。

『まさか……………如月中尉!』

奈々瀬大尉の声だった。その方向に、また見慣れない戦闘機が見えた。

少し大型の、奇抜な形をしたVTOL。

引き続き、奈々瀬大尉の声は響き渡る。

『……………敵前逃亡罪は時効無し、場合によっては公開処刑ですよ?如月

中尉……………」

また刺々しい声色で物騒なことを言った。

「奈々瀬・ルノ・クラート大尉……………面倒だな……………倦怠」

『警告します……………!貴方を逮捕拘束します。異論は!』

「無いよ……………」

そう言つて、如月は鉄籠の上でしゃがむ。

ゆっくりと、手が鉄筋に触れる。まずい、何かする。

ツカサはとっさに感じ、叫んだ。

「大尉!」

『中尉!止まりなさい……………!発砲します!』

「遅い!」

如月がそう叫んだ途端、鉄筋に力強く手をたたき付け、瞬時に鉄筋が、それに繋がるコンクリートが、ビルが奇怪な音を立て軋む。辺り一帯の、ありとあらゆる鉄、コンクリ、ガラスがV T O L機に襲い掛かる。

まるで触手だ。至る所、鉄、鉄、鉄。

しかも異常な硬さを誇る、それこそ鋼の如く。

『チ……撃ちます!!』

奈々瀬大尉の舌打ちと重なるように、V T O L機の回転式自動機銃が火を噴く。けたたましい爆音が耳をつんざく。

だが、弾丸は鉄の触手、そしてツカサを隔離する鉄籠にも効果が無い。

無残に弾き返され、ビルの外壁を砕く。

『……成宮君!!逃げなさい!!』

無理言うな。

「しぶといな……僕に当たったらどうするんだ…?」

ツカサも正直、生きた心地がしない。

機銃掃射は、明らかに自分にも跳ねて来ているのだ。

鉄の触手が無かったら今頃死んでいる。

しかも一番心配なのは名雪。

急に胸が苦しくなった。名雪が居なくなったら、どうなるんだろう。名雪が死んだと分かったとき、どうするんだろう。名雪がもう自分に笑いかけてくれないと知ったら、どうすればいいんだろう。

そんなことを考えた。

その思考を無理矢理中断したのは、一つの大爆発だった。

まさかとは思ったが、ミサイルは放ったのだ。ただし隣のビルに。爆風と熱風が身体を煽る。

そして倒れかかってきたドデカイ鉄骨A N Dコンクリが鉄籠を潰した。

ツカサは今度こそ死を覚悟した。

が、見事に脇を通り過ぎ、檻は半分近くが砕けた。

一瞬、電流が流れていないか不安になったが、如月がピンピンしているのと、鉄骨になんの変化も無いことを思い出す。それでもたつぷり1分は悩んだ気がする。

ツカサは今度こそ逃げ出す。
いい加減、耳も麻痺している。機銃の砲爆音に、鉄が擦れる不協和音。

「ッ……一旦引くか……」

振り向いたとき、如月はそう呟いた。

そして、手を素早く振り、空を切る。

瞬間、空気が爆発していくのを見た。

空中に一際大きな放電をしたと思ったら、急に熱波と眩しさが襲った。

あ、焼け死ぬかも、と思った。

それでも炎は辺りを巻き込み、視界をひとしきり奪って、消えた。計算して爆発を起こしたのなら、たいしたものだ。

ついでに如月の姿も無い。

ツカサはしばらく身を伏せていたが、VTOLのエンジン音で身を起こす。

『……成宮君！無事ですか！？……』

「……痛……しかも、熱いし……暑い……」

『成宮君？……隣の展望台まで行つて、そこで乗り込んで下さい』

ツカサは痛む身体に鞭打つて、力の限り叫ぶ。

「……名雪が下に居ます！！助けてやってくれ！！」

『名雪さんが……』

VTOL機はそのまま隣に残った公園に向かった。

ツカサははやる気持ちを抑え、歩き出した。

ただ名雪が無事でいてくれれば。それだけを必死に願った。

神様にではなく、何かに。

如月は頭上に展望台公園を見上げ、左腕を押さえながらVTOL機まで歩いた。

その最中でもペルセフォネからの脳伝達通信が響く。

『ヘル!』

『……成宮ツカサ…は、すまない…』

『知ってる……まだ機会はある…』

言葉とは裏腹に少し苛立ったようだ。

『……奈々瀬大尉に見られた…軍にも居られない…』

『分かった、その大尉とやらは始末する』

『……どうやって』

『もちろん、君が片付けてくれ』

『……分かった』

『ツカサの件、どうしようか…』

『もう赤石も沈む。合衆国の連絡便襲撃を利用する。メタトルを奪取してくる』

『了解……』

如月は焦った。

成宮ツカサさえ居れば、

「ペルセ…調子には乗らせないのに……」

そう奥歯を噛み締めながら呻いた。

本当に憎い。神様なんて何人も創るものじゃない。

そう実感した。

ロシアの強化人類機関で生み出された『神々』は、今まで幾重もの失敗を抱えて来た。

自我発現の失敗。精神崩壊。肉体の劣化。固有能力の散漫化。

それらの子供達は、ある特有の条件下でのみ生み出され、育てられる。

第三世代型被験体の12人の成功者は唯一人。外ならぬペルセフォ
ーネだ。

そして16年前、第三世代型被験体と、同条件下で生み出された1
1人。

更に13年前の人類機関脱出事件。逃げ出した3人の神。

その一人、アテナは、軍での偽名をミリア・ノル・早見と名乗って
いる。本当に気に入らない名だが、元々人類機関が造ったIDカー
ドに、そう記載されているので仕方が無い。

ヘルメスやアテナが軍の戌となるのは、本来の人類機関の目論み通
り。

ただし元来の計画のロシア軍所属では無く、日本に合衆国軍。散り
散りになった被験体を捜すには、人類機関の情報収集能力は、余り
にも小さい。

エスタ空母のドックで、アテナはそんなことを思った。

窓ごしに、幾多のケーブルに繋がったツアドキスが見える。

赤石の陥落が間近だというのに、未だにアテナに出撃命令が出ない。
軍属としてのアテナは、キュリオテスの崩壊後、階級は降格され、
少尉となった。敵部隊の侵攻を阻止出来なかったものとして、責任
を取らされたのだ。

アテナにとっては耐え難い屈辱だっただろう。

だがそれでも、ツアドキスの専任パイロットの肩書は変わらなかつ
た。

そもそも、軍隊に専用機なんていう概念自体が異質であり異例なの
だ。

ただ類い稀なる空間認識能力を持つだけで、専任パイロットが務ま
るはずはない。

「上手く行き過ぎなのよね……全部」

美伸 名雪は真つ暗な闇の中、目を開けた。

物凄く非現実的光景が襲ってきたと、逃げ回った揚げ句、展望台公園の崩落に巻き込まれた。

身体中が刺すように痛い。

展望台の直下の階層は工事区画であり、赤石内を複雑に入り乱れる通路はまだ封鎖されていない。

名雪はそこに落ちたようだった。

上に戻ろうにも鉄骨や瓦礫が堆積し、登れそうも無い。

「ツカサ……」

落ちゆく中一瞬だけ、ツカサの焦りきった表情と、こちらにて差し延べられた腕を見た。

展望台のメインラウンジが落ちた後、そこに出来た坂道を転げ落ちた。助かったのは奇跡に近い。

「…第六層、3061通路……？」

壁にはそう書かれていた。

その奥の通路は、淡い青色のライトが点々と輝いている。

複雑に絡み合った地下通路は、いずれ何処かに通じる。名雪はそれを信じ、携帯電話を取り出す。

画面の電波表示は良好を示している。これは赤石の特長の一つである。

迷わずにツカサの番号を押す。

「……………」

コール音が何度か鳴った後、

『名雪！？』

出た。

『名雪！無事か！！？』

答える前に携帯の受話音量を下げる。

「うん…なんとか……」

『よかった……』

本当にそう思っているようだ。悪い気はしないものだ。

『…今何処だ!』

「えつと…地下……」

『地下通路ですか?』

「はえっ?」

いきなり敬語かと思っていたら、いつだったか出会った大尉。

「えと…奈々瀬大尉…?」

『覚えておいででしたか……地下通路というと…3017番通路ですか?』

「え……いえ、3061番です…」

何と無く不安になる。もう一度番号を見ても、やはり3061は不変だ。

『……61…?随分下ですね…4階程下です』

「4階つ?」

まさかそこまで落ちていたとは。

『今、緊急事態発令が出たので、あと…27分後に第六層、12分後には第八、七層も破棄されます。それまでに脱出して下さい』

「どうやってですか!」

『今現在、通路に繋がる出口は全て閉鎖されています…下手に破つても、シャッターで阻まれるのが関の山……』

奈々瀬大尉は少し思い悩み、多少ゆっくりと告げた。

『第二次赤石改装工事に伴い、通路はほとんどが工事区画。セキュリティの解除をしようにも、ネットに繋がっていないので無理です。道は唯一つ、最下層のサブ・マリナーまで行って下さい』

「サブ…?海ですか?」

『はい。大支柱まで行けば、後は直通エレベーターがあります。下で合流しましょう』

「ちょ……ここを、一人で行くんですか……?」

早口で説明された上に、一人でこの通路を渡って行け、と言われたら誰でも戸惑う。

『大丈夫です。道は案内します』

「……………」

いくら電話をしながらでも怖いものは怖い。不安と焦りの声を漏らすと、電話の向こうで動きがあった。ツカサだった。

『名雪、その……まだ、約束のクレープ奢ってないだろ……えつと……早く、来い……』

「……………」 バカ……………」

『……え?』

「……………」 別に……………」 アリガト……………」

ツカサは、ホントにとことん不器用なんだ。素直に帰ってきてと言えばいいのに。

『…………… まあいいや…… 奈々瀬大尉が通路を調べてる。取りあえず、南だ』

近くには地図があつた。もちろん周辺だけを描いた簡単なものだったが、方角は分かつた。

「……ねえツカサ……………」

『ん?』

名雪は少し胸に引っ掛かっていた事を聞いてみた。

「…………… 展望台で襲われる前……なんて言おうとしたの……?」

自分の胸の内を吐露した展望台公園。

最後にツカサが言った言葉は、結局聞けなかった。

ツカサの長い沈黙。

そして、

『……………」 教えねえ……………」』

名雪が通路を走る間、奈々瀬大尉は第二次赤石改装工事について説明してくれた。

『……赤石の老朽化に伴い、18年前の第一次赤石改装工事で下層を改修、今年の二次工事で上層を改修する予定でした』

先日のA E S M Sもこの時敷設されたそうだ。

名雪は既に第六層を脱出していた。

近くの作業用エレベーターを作動させ、第五層へ入った。相変わらず通路は薄暗い。

自分でも息が徐々に上がっているのを感じた。割と走りは自信があったが、あちこちの傷や打ち身が痛む。

『大丈夫…ですか？』

奈々瀬大尉は心から心配しているのだろうが、確かに名雪は苛立っていた。理屈では無く、疲れと痛みが苛立ちを呼び覚ました。

「…ええ……何とか…」

そう言うのが精一杯だった。

『……名雪？』

ツカサが電話に出た。

「……何？」

『…もうすぐ第八、七層が崩落する……衝撃が来ると思う…』

「…マジ……？」

『その際、一時的に電力がカットされるんだ…エレベーターが停止するかもしれないから、その場でじっとしてろ、いいか？』

「……うん…」

すぐに衝撃が来た。周りの青色のライトが散ら付き始めた。突然、大規模な爆音と振動が足を揺るがした。名雪は悲鳴を上げた。

真っ暗な中、終わりの無いように思える振動が、とにかく怖いと感じた。

それでも名雪は携帯を握りしめた。ツカサが居なくなるのが嫌だった。

「……ツカサ……！！！」

上昇する兵員輸送機、ツカサは其中で赤石の上層崩壊を目の当たりにした。

第八層の政府主要施設、第七層の成宮重工、鉄道、ビル、太陽光ミ

ラーが崩れ落ちる。

第八層を支えるアンカレイジに点火され、その崩壊に第七層が押し潰される。

「名雪……」

「……名雪さんは第五層……あの崩壊でも、第六層全体が崩れることはありません。……大丈夫です」

崩壊の光景を見る限り、とてもそうは見えない。

支えを失った第八層はいとも簡単に割れ、第七層に突き刺さる。ビル群は呆気なく潰れ、

とうとう第七層が傾ぎ、ほんの一部を残し、瓦礫と火の海と化した。

「……名雪は……」

ツカサは携帯電話を耳に当てた。

電波中継が断絶された為、しばらくノイズが走った。

「……カサ……ツカサ……！」

再びスピーカーが仕事を始めた。

「ツカサ……！生きてる？」

「それ、こっちのセリフだろ……」

「あ……うん……大丈夫……上の板が落つこちで、たんこぶ出来たけど……」

想像するとシニールだな。

「電気は？」

「……点いてる……だいぶ暗いけど……」

奈々瀬大尉が検索した、大支柱までの道を確認する。

備え付けの画面には、携帯電話波から割り出した名雪の位置が表示されている。

「名雪、そこから東が大支柱エリアだ。工事区画だから、天井も無いと思う」

「わかった……」

確かに、300m程歩くと巨大なシャッターがあり、その横にひっそりと存在したドアを抜けると広い空間が現れた。

名雪は同時に、目を眇めた。日の光が頭上から降り注ぐ。

そして穏やかなくらいに静か。思わず立ち尽くすほどに幻想的だった。

『…名雪、そこが大支柱の入口だ。道なりに進むと、エレベーターが見えるはずだ』

「う、うん…」

進んだ先の広大な空間の中央には、巨大な穴が空いている。

全く底が見えないうえに柵が無い。少し距離を取ってから迂回する。

「電気付いてないけど…エレベーター動くの？」

上には真っ青な空が広がっている為、灯りは必要ないがエレベーターが動かないとどうしようもない。

『近くに配電盤があるはず……そろそろ第六層が落ちる。身構えろっ』

「え…もう？」

さつきより随分大きな震動と轟音が襲った。

天井の穴から第六層の頭が覗いていが、そびえ立つ建造物が脆くも崩れていく。

膨れ上がるオレンジ色の火球は黒煙と化し、砕け散った構造物の欠片はすぐ近くにも降り注いでくる。

「…第五層の崩落はいつ？」

少しだけ声を張り上げてツカサに聞く。

『あと13分。エレベーターなら間に合うよ……』

一階層だけの破棄なので、震動はすぐに終わった。

『……名雪さん…配…盤を探し…下さ……E-0…5です』

「…え？E-0…？」

『…E-0265です…配電盤…電源を全て作動…せて下さい』

配電盤にまで番号が付いているとは。一体どれだけの数があるんだろっ。

エレベーターホールはすぐに見つかった。作業員用と言いながら随分整備されたホールだった。

ついさっきの道も、通り過ぎる間にトイレや広い回廊が見えた。何かのアミューズメント施設にでもするのだろうか。

キッチンと整備された部屋の為、配電盤は極端に見つかりにくい。あちこちに目線を走らせるが見当たらない。まるで初めて都会に来た田舎少女だ。

見つけたのは、今日数えて6回目の警報が流れた時だった。既に第二層外周のパージにかかっており、第一層は最低限しか残されていない。

配電盤はあっさり開き、名雪は迷わず全てのレバーを落とした。

その瞬間、ホールは柔らかくも、煌々とした明かりに照らされた。

「電気、つきましたよ？」

『それでもいいので、エレベーターで一番下に向かって下さい。私達はサブ・マリナーに到着したので、安心して下さい』

ようやく安堵感が訪れる。エレベーターに乗っている間は休むことが出来る。

赤石のエレベーターはとにかく速い。その割に揺れや酔いが少なく、床に立てたコインが決して倒れないのが売りだ。

そのため名雪のホールに到着するのも速かった。

「……………乗ります」

『お待ちしてます……』

高速エレベーターは名雪を乗せ、一気に降下していった。

第五層から海面上に敷設されたサブ・マリナーまで、およそ2分かかるそうだ。

各層を抜ける度、窓から遠方の戦火や、崩れ行く都市を眺めた。

無人の学園が見えた。見知った学生寮や学都線も見える。

ようやく実感できる。名雪も、おそらくツカサもこの街が好きだった。

その街が簡単に消えるのを、ずっとわだかまりとして疑っていた。
「やっぱり……無理なんだ……」

次の層が近づく。

最後に、学園が崩れたのを見た瞬間、窓が漆黒の闇に包まれた。
少女はもう、窓に目を向けることはしなかった。

ドアが開いた先に、ツカサが待っていた。

「「あ……………」」

声が重なった。とりあえずツカサが目で促す。

「た……………ただいま……………」

我ながら、これは無いと思った。だが、それだけ安心感があったのだ。

それにツカサが、

「……………お、おかえり……………」

こう返してくれるのも確信していた。

ツカサは一度だけ咳払いをして、

「…大尉が高速潜水艇の準備してる。第一層の崩落までは、あと40分あるってよ」

「ふうん…わかった……………」

「大丈夫、だったか？痛むか？」

「そりゃ…盛大に、痛いわよ……………」

ツカサは少しうつむいて迷ってから、向き直ってからこう言った。

「こっちこい」

「へ？」

何処かと思えば医務室だ。

ちよつと待つてと言いたかった。若い男女が医務室でって、そんな。

「……………顔赤いけど…どうした？」

「バカ……………」

ツカサは表情に疑問符を浮かべ、医務室ベッドを見てから明らかに赤面した。

「ば、バカ野郎っ……さっさと座れっ」

そう言いながら絆創膏を手渡してくる。足と腕は自分で貼ったが、額に出来ていた傷に苦戦する。

「あれ……ちよっ、どこ？」

どうしてここには鏡すらないんだ。

見かねたツカサが絆創膏を奪い取った。

「ほら、貸せっ……」

「わ、わ……」

小さく声を漏らす名雪を無視して、ツカサが絆創膏を額に張り付ける。その間、名雪はしばらく目のツカサの唇を注視して、やはり目を背けて赤面した。

「ほい、前髪で隠れるから、ちょうどいいだろ？」

「……うん……」

ホッとしたのか残念なのか、いまいち分からない。少なくとも香恋が居なくて良かった、そう思った。

「お姉様は何処に行きましたの……!？」

蒼海 香恋は軍の連絡便で、Amphitriteの司令官、つまり父親に会っていた。

母親は本土に居る。

久しぶりに母親に会えるのは楽しみだが、肝心の名雪が何処にも見えない。

随分前に忘れ物をしたと、学生寮に走ったままだった。

「まさか殿方と……駆け落ち……!」

蒼海 香恋は勘はよかった。ただ思考が斜め上を目指しているだけだ。

「香恋、落ち着きなさい。ついさっき、クラー特大尉から成宮君と

美仲さんを保護した、と」

「そうですね……よかった、ですけど……」個人的には全然よくない。よりもよって成宮ツカサと駆け落ちたとは。

「……やはり関係はアリですね……」

「……で、これからどうすんの？」

「高速潜水艇で連絡便と合流する。ここは元々軍の施設だったらしいけど、今は改装工事で使われてなかった」

サブ・マリーナの中央。

サブマリン・ベイのバース（発着場）には、一隻の潜水艇が浮かんでいた。

旅客船なのか、少し大きく、豪華だ。

全長は30m弱。

コンドルのような船首に、胴体両脇に備えたエンジンからは、長く巨大な針が伸びている。ランス、とも呼ぶのか。エンジンブロックと長槍は、僅かな隙間を開けて繋がっており、隙間からはロータースクリューが見えた。

胴体から真後ろには、中世の両刃剣のような尾が伸びる。

それら全てに、ヨーロッパ風の模様がそれとなく施されている。豪華な印象はそこからだった。

甲板で、奈々瀬大尉がベイを眺め、そしてツカサ達と目が合った。

「もうすぐ、本土連絡便が出港します！それと合流して、本土に向かいます！」

「りょうかーいつ。名雪っ」

名雪は医務室の入口でベイを見つめていた。どこと無くボーツとしている。

「名雪？」

「あ……ご、ゴメン……」

心底すまなさそうに走ってくる。足の痛みは引いたと言っていたが、

それでも走るのは辛いだろうに。

「…無理、すんなよ」

「いいからっ、早く乗ろ！」

「お、おう」

バースの接舷橋から乗り込む。たった四人で乗るには少し大き過ぎないか、と気が引ける。しかもタダで。

「出港します。加速が来ますから、席に着いて下さい」

奈々瀬大尉がそう言い、後ろでドアが閉じ、空気が抜ける音と共にロックされた。

中は座席が並んでおり、真新しい印象だった。窓から見えるエンジンが、低く唸るのを感じた。

「パイシーズ、発進します！」

操縦席から、操縦桿を引く音が聞こえた。同時に三つのロータースクリューが一斉に回転する。

「一度、深度200mまで潜水して、赤石を脱出します。赤石の西側で、旅客船が待機していますから、そこで浮上します」

窓の外が碧い空間に飲まれた。海に入ったのだらう。

海中の広い通路を抜けると、視界が一気に開けた。

「わぁ……」

名雪が感嘆の声を漏らす。アクアマリンの世界に、魚が縦横無尽に泳ぎ、海面からは太陽の光が降り注ぐ。綺麗だった。

この時点でも、かなり赤石外周に近いのが分かった。でなければ日が差し込んでくるはずがない。

と、急に加速が始まった。

徐々に、しかし急激にスピードが増す。飛行機の離陸と似た感覚だ。やがて加速感は消え、スピードが一定に落ち着く。

「…巡航速度ですね。旅客船は？」

大尉は操縦席の部下に聞いた。

「前方10km地点に確認。停船中です」

「無線連絡は？」

「…おかしいですね…無線回線が閉じてます」

「回線が？」

「反応、ありません……」

ツカサは名雪と顔を見合わせた。

名雪が奈々瀬大尉に事情を聞いてみる。

「……10km先に、旅客船が待機しています。残った住民を収容させる為だと思いますが……」

「？」

「無線回線が閉じています…広域開放周波数でも駄目でした…一体……」

「何かあったんですか？」

ツカサも交じって聞いてみた。大尉は俯いたままだ。

「とりあえず、接近してみます。トラブルかもしれませんし……」

ツカサはふと、赤石を見上げた。海中からでは、ぼんやりとしか見えませんが、それでも見つめていた。

津はどうしただろう。蒼海は、嘉島さんは、皆は。

きつと名雪は、街が崩れ落ちるのを目の当たりにしただろう。

どんな想いで見ただろう。辛かっただろうか。

「……名雪……」

窓から目は離さずに呼んだ。

「……………」

窓ガラスに、名雪の顔が映った。その目に、

「……………いや…何でも……………」

「う、うん……？」

その目に涙が浮かんでいたのを、ツカサは見なかったことにした――

第三章 赤石放棄（後書き）

長いです。ホントなら、日本本土まで行くところも、まとめようと思ったんですが、次回に回しました。

次回、摩天楼の海
お楽しみに。

裏設定集 〱世界篇〱（前書き）

本編ではありません。

この物語を執筆する上で作った、世界情勢等の裏設定です。
ひよっとしたらネタバレかも…

裏設定集 〈世界篇〉

赤石

世界各地の大国が有する『海上多層構造国家機能都市』に分類される都市。

海底に支柱を突き刺し、海面の浮標で浮力を得る。支柱を通して海中の港に直行することが可能。

八層に分かれ、世界有数の採光技術を設置し、中心以外は常に明るいのが特徴。ビルの屋上、及び各層の天井に巨大な採光ミラーを敷設。間接光により陰影区を照らす。

時間ごとにミラーが稼動し、実際の日の動きを再現している。

また、多層構造フロートでよく起こる症状として、『越層症』がある。

越層症は、より上部の層へ移動すると耳鳴り、めまい、立ちくらみ、吐き気をもたらす症状で、高山病にも似ている。

上層は気圧が下がる為、慣れない人間がこのような症状をよく体験する。

アングロイ

成宮重工の地下に存在する、超高度並列光学ニューロAI。最大演算能力は60ペタフロップス。（一秒間に浮動小数点計算を60京回行える演算能力）

自律思考、及び質問に対する返答が可能。日本でもトップクラスの能力を持つスーパーコンピュータ。

赤石放棄に伴い、本体は本土に移された。

アンビトリテ
Amphitrite

黒波正規軍より独立し、かつ全く異なる作戦行動を目的とした特殊部隊。

成宮重工とも繋がりが深かったが、その事実を知る者は非常に少ない。

赤石の下層部には、密かに増築された都市オケアノスが広がり、Amphitrite本部が配備される。

また海面、海中への警戒はほぼオケアノスが行い、対洋上戦闘に優れる。

赤石放棄後、事実上正規軍に吸収された。

正規軍との折り合いは悪く、常に反目しあっている。創立者の言葉、
『be lonely under the black foundation.』（黒き礎のもと、孤独にあれ）は、ある意味では事実である。

エスタ（E・S・T・A）

正式名称、Every Situation Tactical Armament。汎用人型戦術兵器。

主な納入元は、赤石に本社を置く『成宮重工』。

成宮重工製初の完成型は『ESTA-001 ラファエ』。初の軍正式採用型は『ESTA-014 イオファイエ』。

強固な装甲を持ち、必要最低限の設備と装備で各種作戦活動を可能にした汎用機。内部構造は非常に単純化され、動作不良も少ない。

ただし、黒波正規軍への納入以前に技術が外部に流出した為、合衆国にも類似機が多数存在する。

オリュンポス十二神

ロシア連邦の戦術強化人類機関が研究開発する、『強化人類』計画の中核を成した、『オリュンポス・プロジェクト』により生み出された十二人の特殊能力者。

特定条件下により生み出された彼らは個々に特殊な力を持ち、人間としての耐久性も高い。

ただし不安定であり、今までにも、被験者の200人前後は死去している。

二世紀前に最初の覚醒体『ペルセフォーン』が生まれ、残り11人は大戦後に再び生み出された。

その中で、能力の発現かつ自我が目覚めたのは十二人のうち5人に満たず、能力発現者はペルセフォーン、ヘルメス、アテナ、デュオニウソスの4人だけ。

そのうち、ペルセフォーンを除いた3人をロシア連邦、ドイツ共和国、ギリシャ共和国が搜索しているが、三国内では行方不明としている。

それぞれヘルメスは中華帝国、アテナはアメリカ合衆国、デュオニウソスは日本近辺に滞在している。

ペルセフォーンは未だに戦術強化人類機関で眠っている状態にある。

荷電粒子砲 (Charged particle Cannon)

ドイツが独自開発した軍用兵器。

大気中の電子、重水素粒子を荷電化させ加速機内で蓄積させるとき、圧縮荷電粒子は質量欠損により運動エネルギーを生じる。これを利用し発射する。地球上で粒子線を直進させるためには、極端に大きな電力が必要となり、最低でも10ギガワットが必要とされる。ま

た加速器の小型化が進んでおらず、現在は艦船の搭載が中心となっている。

観光島『美星』

赤石北東に建造された、国内外開放型の観光島。
東側は山岳地帯であり、西側は人工海岸を望む高級ホテル街。
2322年建造開始。
現在も東側は工事中であり、基礎部分の柱が露出している。
空港は二カ所設備され、港はほぼ無数に存在する。

学都線

第三層を中心に赤石中に広がる、巨大な環状鉄道。
第三層だけでも寮前駅が三つ存在する。朝、夕方、夜は非常に便数が多いが昼間は極端に少ない。
学生は料金が割引されるため、多くの学生が利用している。

極東先進国家群

ユーラシア東部の大型国家群。
国土を失ったアジア諸国や、インド、中華帝国が参入する一大勢力。
現在の覇権はほぼ中華帝国が握る為、巨大な兵器工場が各地に点在し、日本の技術を取り込むがために、日本の極東先進国家群参入を促した。

一つの国ではなく、共同体に分類される。別名、A・U。
アジア・ユニバース

ギリシャ共和国

二分されたE・Uの南部を統べる巨大な共和国。
軍事国であるドイツとの対立が著しく、E・U二分の要因ともいえる。

ギリシャ政府教会はロシア連邦の戦術強化人類機関の密かな資金源となっている。

そのため、ロシア自体もドイツ派とギリシャ派の二分化が進みつつある。

軍事島『黒波』

太平洋側に位置する軍用要塞フロート。

航空機の発着場が無数にあり、防衛にも力をいれるが、世間的には税金の無駄遣いと批判される。主に正規軍が使用し、Amphitrite^{アンピトリテ}は赤石下層のオケアノス軍轄都市に本部を構える。
赤石放棄に伴い破棄された。

工業島『島津』

赤石と同時に建造された、工業分野に特化した小型のフロート都市。
中華帝国との共同工場が一つ存在する。官営から民間まで多数の工場がひしめく一大工業区。

飛行型エスタの工場も完備。

一世紀前からダイヤモンドの採掘が盛んになり、経済的な支えとなった。

現在はダイヤモンド鉱山が閉鎖され、物資はほとんど残されないま

ま破棄された。

新秋葉原

赤石第六層の別称。

かつては電子機器産業の栄えた地域だったが、現在はアニメ、漫画、その他特殊な文化に特化した街になっている。展望台公園が整備され、観光名所にもなった。

世界変動

2138年に本格発生した、地球規模の地殻大変動。極東のプレートの歪みが限界を超え、突発的に地震が世界各地で発生した。同時に沸き起こった各地の噴火現象は、ユーラシアを火山降下物に汚染させ、更には引き込まれるプレート、そして隆起するプレートが世界地図を塗り替えた。後の大戦の間も変動は続き、被害は拡大していった。

第三次世界大戦

便宜上そう呼ばれることもあるが、普通は『前世紀大戦』、『旧世紀大戦』と呼ばれる。2252年勃発。

中東の化石燃料問題（新たな電力供給技術により、化石燃料式動力を始めとする多くの内燃機関が縮小される為、中東の経済を圧迫）により、アメリカ合衆国やロシア連邦に対するテロが激化。

一気に世界大戦に発展。

ロシア連邦、アメリカ合衆国、中華帝国が限定核兵器を行使した為、

ロシア・中華帝国間国境、アメリカ西部、南アメリカ、アフリカ北部に汚染地域が発生。生身での立ち入りは完全に禁止されており、砂漠化も進んだ。

日本は中立を保ったが、ダイヤモンド鉱山の隆起による各種兵器転用技術の開発や、戦争特需により経済的にも安定した。

2298年12月24日終戦。同時に『国際非核条約』締結。

中華帝国

かつて、ユーラシアの中央から東部を広く占領した、巨大帝国。

1915年成立。翌年の護国戦争は日本の協力により鎮圧。以来散発的に発生した革命は全て拡大せずに終始した。

現在は議決制になっており、皇帝君臨の帝国体制は形骸化している。第三次世界大戦の折、限定核兵器により合衆国を攻撃、その報復として合衆国に国土の半分が汚染されたが、現在も独立を保つ。

航空機の開発に特化しており、その技術は日本のそれを凌駕する。

日本と中華帝国の、飛行型エスタ共同開発はそのためである。

ドイツ共和国

E・Uの中でも、より戦争色の強かった国家。

現在E・Uは二分されており、主義の異なるドイツは独自に戦力を保有し、独立した行動をとる。

特にギリシャ共和国との対立が著しい。

荷電粒子の開発を進めており、世界初の荷電粒子砲を完成させた。

また医療大国でもあり、ロシア連邦の強化人類機関に技術支援もしている。

成宮重工

赤石第七層に本社を置く重工業株式会社。

2312年創立。

作業機械の生産、開発を主とする。成宮ツカサの父が創業させ、大戦の戦争特需により急成長した。その裏では、副社長が情報の横流しを長年続けており、内部状況や開発記録を他企業や他国に売り渡していた。（後に副社長は逮捕）

その後、社長兼会長が死亡、及び赤石の破棄により、事実上本社を失い規模を大幅に縮小。

本土の支社での開発に移行した。

ロシア連邦

ユーラシア北側の連邦国家。

大戦や沈没で国土が減少した為、国内での政府直轄事業が大きく後退しつつある。

政府直轄の戦術強化人類機関は、対立関係にあったドイツ、ギリシヤ両方からの資金、技術援助を受けている為、ロシア連邦もE・Uのように二分化が進行している。

現在はギリシヤ寄りの流れを有しており、オリュンポス十二神のプロジェクトもギリシヤ共和国政府教会が発案、支援した。

裏設定集 〱世界篇〱（後書き）

次回の裏設定集は未定ですが、次は人物篇ですかね？
なんだかWikiみたいです。

第三章 摩天楼の海（前書き）

なっがいです。

最長記録更新です。

ちなみに、今回は海です。

奈々瀬のドキドキデレシーンも完備っ。

でわ

第三章 摩天楼の海

「何…あれ……」

操縦席の強化ガラスから、海面を見上げた奈々瀬・ルノ・クラート大尉は絶句した。

奈々瀬大尉だけではない。ツカサ、名雪、操縦士さん、全員が言葉を失った。

当然だろう。

海中から、巨大な客船を見たのは、生まれて初めてだった。普通なら黒い船底が見える。

確かに見えていたが、船底のシルエットが妙に歪んでいる。

喫水線、だろうか。それが、普段より確実に深い位置に浮かぶ。

しかも通常、真横一直線上にあるはずの三連のスクリューが、斜めに傾いている。船全体が傾いているのだ。

「…あれ……！」

名雪が指差す。

海上の旅客船の、左舷船底後部。

ぽつかりと、大きな穴が開いている。内側からぶち破ったように、弾け飛んでいる。

客船が穴から浸水し、傾き、沈みかけているのは明らかだった。

「浮上して下さい！救出します！」

奈々瀬大尉はやおら命令した。かなり、焦っていた。

これも当然だ。

何しろ海面には、救命ボートの一つも浮かんでいないのだから。

累々と積み上がる、死体。

辺りに広がる、血の海。

時間が経つ毎に、傾斜が増す船内。

時折響く、重い鉄が軋むような音。

その全てが、シス・シエルフォード・如月を、ヘルメスを高揚させた。

巡航中だった旅客船に、上空から急降下し、操舵室を墜としてから既に10分。

本来味方機であるはずの、メタトルが攻撃してきたのだ。驚愕以前に、何が起こったか分からぬままだっただろう。

居住区画の制圧などは簡単だった。

吹き抜け、大回廊から突入し、ありとあらゆる重火器を乱射するだけで、全て終わった。

急降下する際、救命ボートをあらかた落とし、更に魚雷で穴を空けた。

遅かれ早かれ、成宮ツカサを乗せた船も来るはずだ。

事実、一隻の海中高速艇が近づいている。

「……来た……」

MHHS-003、海中高速潜水艇は、最大俯角で海を裂き、緩やかに浮上した。

僅かな振動だったが、客船にしては乱暴な浮上だった。

ツカサは窓から旅客船を眺めた。その偉容は、既に過去のものとなり、船首が持ち上がり派手な傾斜が見せている。

ボートは全て吹き飛び、所々で火が燃え盛る。黒煙は高く立ちのぼると共に、海面を鏡にして孤を伸ばす。

「…襲撃……？民間船が、どうして……」

大尉が声を絞り出した。

甲板に出た乗客は、煙と炎に道を阻まれ、海に身を投げていく。

いくら海でも、季節は夏だ。凍死することは無いだろう。

「接舷して下さい！救助します！」

「あれ……」

名雪が声をあげた。

崩れかけた船首の甲板に、一機のエスタが見えた。

飛行型エスタ、メタトルだった。

大尉は見慣れていたが、ツカサや名雪は信じられないようだった。人型のエスタが空中静止し、途端に滑空しだしたのだ。

「こつち来た！！」

叫ばなくても分かる。

飛行型エスタは明らかにこちらに突進してくる。右手に握りしめた小振りのライフル。その悪意の矛先が、ツカサ達を捉えた。

「伏せて！！」

大尉が張り詰めた声で叫んだ。

ライフルが火を噴き、海が針山のように逆立つ。

咄嗟に身を庇おうとして、衝撃が邪魔した。

同時に名雪がバランスを崩し、ツカサに倒れこんできた。

名雪が小さな悲鳴をあげた。思わず名雪を抱き止めたが、今度は自分の体勢が危うくなり、あっさり倒れた。

爆音が、倒れたツカサと名雪を震わせた。

「…噓……」

窓から見えた右舷スクリューエンジンが爆発した。現代の船のほとんどは、エンジンに電源を搭載し、モーターで駆動する。

滅多なことでは爆発しないはずなのだが。

「爆裂弾……？ いったい何処で……」

奈々瀬大尉が呟き、軍用の無線を取り出した。インカムタイプだ。

「所属不明のメタトルから攻撃されています！ 確認を！」

『…て…先程基地……撃され……える……た！ ばメ……ト……』

「…どうということなんですか……？」

名雪が不安げに聞いた。

「あの……名雪？」

「……あ……」

「どいて、くんないか……？」

名雪は尻餅をついたツカサの、馬乗りになる形で倒れこんでいる。

「ふえっ！わっ、わ…！」

名雪が素早くツカサから飛びのいた。

……顔が真っ赤だ。

奈々瀬大尉はそんなやり取りを無視し、無線を睨んでいる。

「……大尉……そこに……って…」

無線からは、耳障りな雑音しか聞こえない。

いや、何かおかしい。

無線からの途切れ途切れの声には、別の音が紛れている。別の声だ。

「……聞こ……てる、かな……居る……だろ……？」

分からないような、困惑したような、そんな顔をしていた。

名雪だけが。

この声を知っているのは、奈々瀬大尉と、多分、操舵士と、ツカサの三人。

「……如月だ……！」

ツカサは感づいた。

忘れるはずがない。あの挑戦的な眼に、この声。

HERMESと名乗ったあの少年。
エルメス

軍属としての名をシス・シエルフォード・如月と名乗ったあの少年。

「……居るんだろ……？」

無線機から響く静かで、相変わらず挑戦的な言葉が、ツカサを撫でた。

「成宮ツカサ……！」

「エル……メス………？」

再びの衝撃。更にもう一基のスクリューランスが破裂した。

その最中も、窓は青色の世界に飲み込まれた。海中潜行しているのだ。

「海中に逃げます！水中波に注意して！」

まともに駆動しているのは中央のメインスクリューだけなのだが、それでも急激な速さで潜っていく。まるで船の沈没のようだ。

「これで…大丈夫ですよね……？」

「いえ……」

名雪が訪ねたのを、奈々瀬大尉があっさり否定した。

「メタトル……さっきの飛行型ですが…短時間なら、すべてのエアインテークの閉鎖により水中巡行が可能です……えっと…つまり…」
また鈍い揺れが襲った。少し遅れて、操縦席から甲高いアラーム音が鳴り響いた。

「海の中も潜れるってことです………」

何処にも逃げ場は無い、と言われているのだ。名雪は青ざめた表情を更に凍らせた。震えた手はツカサの手を力強く、必死に握りしめてくる。

「大尉！」

「何！」

船体の揺れが一層ひどくなった。エンジンが高い唸りを上げ、操縦席の画面のほとんどが、真っ赤な『CAUTION』の表示。そして中央のパネルには、『EMERGENCY AUTO PILOT（エマージェンシー・オート・パイロット）』も点滅している。

「緊急自動操縦モードです…！」

「自動……？なんで…」

ツカサが聞いた。

この状況になって、自動操縦というのがとてつもなく不安にさせた。赤い画面は消えることなく、危機感あふれるアラーム音が耳障りだ。中央の画面が切り替わった。

画面中央に、ツカサ達の乗る潜水艇が浮かび、その下、ツカサ達から見れば後ろに光点が複数個明滅した。しかも近づいている。

すぐに分かった。魚雷だ。

「これは民生用の船ですから、敵機からの魚雷攻撃を確認したときは自動的に回避行動に入ります……！」

説明の間も奈々瀬大尉は周りの計器を操作していたが、一向に自動

操縦は解除できない。

「同時に対魚雷チャフとデコイ…目くらましを発射して急旋回します……！つかまって下さい！」

解除できないのか、と聞きたかったツカサを否応無く抑え、奈々瀬大尉が画面を見まわす。

全員が、固唾を飲んでモニターを見守った。エンジンがこれ以上無いような爆音を立て、立っているのも辛いほどの傾斜を感じたとき、くぐもった爆発音が聞こえた。

それでも魚雷群は消えず、画面上には光点が6つほど浮かぶ。

「キリがない……！」

大尉は操縦席脇の赤いスイッチを見つけ、スイッチを保護しているガラスを叩き割った。

中には3つの似たようなスイッチ。大尉は一瞬だけ迷ってから、一番左のスイッチを目いっぱい押した。

すぐ隣の画面に、『LEFT SCREEN LANCE・PURGE（レフトスクリーンランス・パージ）』が明滅した。

操縦士も大尉の考えを理解したようだった。

先程の光点がひしめく画面に、細長い三角形が現れた。船体の左側スクリーンエンジンに付いていた、大きな槍。ランスが切り離されたのだ。

左ランスは既に破損していた。ただの重荷となった無用の長物は、回転しながら魚雷を巻き込み、消えた。

同時にここ一番の衝撃が船体を軋ませる。

画面が一時的に消えたほどだ。

名雪が壁に叩きつけられ、ツカサはバランスを崩し、大尉は椅子にしがみつき耐えていた。

暗闇は実際5秒ほどだったが、それは何時間もの感覚に思えた。

名雪は左腕をさすっている。強くぶつけた様だった。

大尉は、極端に疲れた表情で肩を揺らしている。息も絶え絶え、といった感じた。

「ある、程度は…距離を稼いだ、はずです……………バランスーは…？」
操縦士は頭を押さえながら答えた。こちらもぶつけた様だ。

「…今のパージのせいで、船体のバランスが崩れています……………右舷バラストを投棄しましたが、かなり不安定です…」

ランスを破棄したのは左側。代わりに右側のバラスト、重りを落とすことでバランスを保っているのだろう、とツカサは解釈した。

「……………！対シヨック体勢！！上から来ます！」

操縦士はレーダーを一瞥して叫んだ。中央画面には何も映っていない。

ツカサ、名雪の両方が戸惑う。だが、さすがに軍人だけある。奈々瀬大尉は即座にいくつかのスイッチを手早く押し、スピードを上げた。

「上から強い衝撃が来ます！後ろのドアを閉めて！」

名雪が背後の自動ドアをロックした。同時にいくつも金属音がして、更にドアの向こうでハッチが閉じる気配がした。

自分の身体が宙に浮いたのは、それから3秒程後だった。

魚雷を全て迎撃されたメタトルは、一度海上に出、潜水艇目掛け再突入した。

元からメタトルは飛行型。陸海の活動は考慮していないが、全てのエアインテークを閉鎖すればおよそ8分間の潜水が可能である。

だが、これだけの無茶な動きは相当の過負荷だ。

「……………これ以上は、無理かな……………」

如月は異常な揺れと軋みを見せるコックピットで呻いた。

機体の各部の状態を示すコンソールは、8割が真紅のアラート表示を点滅させている。

「歯あ食いしばれ……………」

メタトルの脚が船の胴体に突き刺さった。その反動で脚部が潰れ、下半身の駆動が停止した。

緊急用のスクリーンが弾けた。ラジエーター（冷却装置）に異常が

発生し、熱暴走を起こしたのだ。

「……ッ……無理があつたかな……過労……？」

迷わずに脚部を切り離す。

その時、眼下の潜水艇から何発かの円筒が発射された。デコイ、囷と対魚雷チャフ。

いくら破壊兵器でなくても、それらが直撃すればメタトルの機能は壊滅する。

「……マジかよ……！」

眼下の潜水艇は、損傷した胴体を部分切除する。浸水した以上は到底使い物にはならないし、『沈没』する可能性もある。

「成宮ツカサはすぐ目の前だつてのに……！」

如月はコンソールパネルを苦々しく殴った。現状の装備ではどうしようもない。

どうにもならないのだ。

一部の胴体を切り離し、いくらかスリムになった潜水艇は一度旅客船の海域に戻り、生存者を救出した後、日本本土へ直行した。

赤石からの救助艦はしばらく見込めない、とのことで、生存者の全てが潜水艇に乗った。

「……旧東京湾に、本土正規軍が待機しています。敵艦隊は既に赤石を攻略しつつあります……」

「東京湾で、迎撃するってことですか……？」

「ええ。本艦は海中を潜行して、追撃艦隊を回避します」

奈々瀬大尉は落ち着いた表情で言った。

「………如月は……どうなんですか？」

ツカサは気になり続けたことを切り出した。

奈々瀬大尉は如月を知っているようだった。しかも軍人として。大尉は少し迷ったあと、重い口を開いた。

「………彼は、中華帝国からの軍人です………実際私が言った、今回の敵

前逃亡罪が如月中尉に適用されるかは解りません」

「……………」

「正式には中華帝国軍人ですから、一度中華帝国に戻って軍法会議処分、かもしれませぬ……」

「何者なんです……？アイツ」

「……………あの能力……ですか？」

大尉は微妙な表情だった。自分だって信じられない、といった感じだ。

「あの時は驚きましたけど……錬金術というのはある種正しい表現です。物質の変質は普通の技術ですから……あんな極端な変質は初めて、ですけど」

それより生身の人間がそれを行うことを疑問視して欲しい、とは言わなかった。

「“あの”大爆発は、多分空气中に水素を発生させて、引火させたんだと思います……………見てました？」

「ああ……」

ツカサは目前に広がり、視界をまばゆく染めた爆炎を思い出した。とにかく熱かったのを覚えている。

「…………アイツ……生み出されたって言うてました……確か」

「生み出された…………ロシア、の…………？」

ロシアで知っているのは強化人類機関。確かにそこに繋がらないこともない。

「とりあえず調べてみます……アングロイだけでは全容は解りませぬし」

ツカサにとっては久しぶりの単語だった。

「アングロイって、どうになりました？」

「ああ…………別の軍移送艦で輸送させました。貴方達が六層で……いたときに見送りました」

「な、何もしてないですよっ！」

「うわっ……名雪？」

「な、何？」

いつの間にかツカサの後ろに名雪が佇んでいた。大尉はとつくの昔に気付いていたようだった。

何を今更、みたいな顔をしないで欲しい。

「……ああ、失礼……何をしていたかは聞きませんが」

「で、ですから！」

名雪が慌てて抗弁した。何を慌てているのだ。

「……どしたの？」

「ちょ、違うつ！だから、別に何も！」

聞いてない。

しかも大尉は明らかに、名雪が焦り具合を楽しんでいる。目が少し柔らかくなった。

「……まあ……いいですけどね……」

「……」

「失礼………何ぶん、羨ましかったので………」

名雪には聞こえなかったようだが、ツカサにはかろうじて聞こえた。

「奈々瀬大尉って、恋人とか居ないんですか？」

名雪が遠慮がちに聞く。

「いえ……恋仲になったことは一度も……」

大尉も遠慮がちに言う。

「……ええ……スタイル良いのに……」

「う……そんなこと……」

大尉は少し赤ら顔になり、随分困っているようだ。ツカサはいつ話に割り込んでいいものか、分からずにいた。

「大尉、年いくつですか？」

結構失礼な質問だと思う。いくら女性同士だからって。

「えっと……19です」

「……え……！」

あ、ハモった。

「あの……そんなに老けてます、か？」

「あ、いえっ…すごい大人っぽいし、美人だし…スタイル良いし…その…」

どうも名雪は奈々瀬大尉のスタイルの良さが気になるらしい。

大尉は心底困り果て、早くこの話題を変えたいようだった。赤ら顔はそのまま。

ツカサは仕方なく助け舟を出す。

「……本土まではどのくらいですか？」

「ん……1時間程ですね、実際はもう少しかかるかもしれませんが」
やつと話の方向が修正出来た。大尉も一安心だろう。

名雪はちよつと残念そうな顔で黙った。

緊急浮標が作動し、海面にゆつたりと浮かぶメタトルの上半身。既に機能が停止しかけた頭部が潮にさらされている。

コックピットハッチは頭部のすぐ前に設置され、如月はその上で佇んでいた。

遠方にはうつすらと赤石が見えるが、随分形が崩れて荒れていた。

この時間なら第一から第三層までしか残っていない。

機体に残っていた無線機を取り出し、手早く周波数を合わせて呼びかけた。

「……こちら、シス・シエルフォード・如月…回収艇を要請」

『こちら…中華帝国軍、島津駐留軍…如月中尉、どうした』

「今は急を要する、敵艦隊の偵察中に撃墜された。回収艇を」

『了解した。ビーコンは出すな、敵に察知される』

「了解、待機する」

無線機をコックピットのシートに放り投げ、メタトルの顔にもたれて座った。

硬質カーボン合金の装甲は、背もたれにしては窮屈で硬すぎるが仕方がない。

「困った、な……………」

新美 捺姫はメタトル・カスタムの望遠カメラで、赤石方面の海域を観察した。いまだに赤石は陥落しておらず、小さな点でしか見えないが確認は出来た。

「……皆見少尉？潜水艇は確認した？」

無線の返答がコックピットに響く。相手は海底で待機中の、皆見圭少尉。

『微弱な水中衝撃波を確認…目視は不可能、言っとくけど…狙撃は無理だけど？』

「期待してない」

『……待機する』

無線が一方的に切られそうになる。

「……ちよつと待つてよ…今回ロシア連邦は確認した？」

『…？無線は、傍受してないから分からないけど……潜水艦は見ないね』

「おかしいと思わない？赤石攻略するなら、ロシアとの挟撃作戦も考えられたのに……」

赤石方面には合衆国軍しか現れていない。ロシア連邦は偵察すらしていない。もちろんドイツも。

「ただ、中華帝国からの援軍も遅れてるから…ロシア艦隊と出くわしたかもね……」

そこまで言って、捺姫はシートに背をうずめた。

中華帝国軍がロシア艦隊と出くわしたなら、赤石への援軍は期待できない。つまり、赤石を突破した合衆国艦隊が本土に接近することになる。

『無能……』

「……ホントに、大問題ね」

『……無駄……なしは……めなさい……？新美少尉』

無線が割り込んできた。東京湾艦隊だ。

『少尉。哨戒任務は中断、本土北側からロシア籍艦隊が接近した！恐らく本隊だ！』

「本丸が……？」

『ドイツ軍は！』

これは皆見 圭だ。

『確認出来ない！中華帝国艦隊がロシアを足止めしていた模様、突破してきた敵機を迎撃する！！』

『「アイ・レディ！！」』

午後6時05分。赤石発、最後の軍移送艦が出港した。

赤石西側で一隻の旅客船が沈没した（無論、如月が沈めた便）ことにより、民間旅客船は打ち切られ、空路での移送がメインとなる。

中華帝国からの輸送機、スィッチャー・シエンウー朱雀と玄武が到着し、残る市民は第一層から第三層に残された住民。

もちろん、住み馴れた赤石に残るといふ民間人も多数いた。政府はそのような人々に対しては静観を決め、最終勧告を通知した後、最終便を出港させることを決定した。赤石破棄、と言っても完全な沈没を指すわけではない。

第一層の中央区は重化学工業エリアの為、海中に没した場合の環境被害は計り知れない。工業污水处理プラント、各種薬品工場からのダイオキシン類や塩素系物質による海水汚染は今後何十年にも渡る大問題となる。

少なくとも日本のフロートの完全な沈没はありえない。

しかし、現在の赤石に制圧する価値はない。日本政府が赤石を放棄したことは合衆国も把握している。

つまり、赤石には戦略的かつ、本土侵攻の橋頭堡となるに足るような要素は存在しない。ただし工業島『島津』は別だ。中華帝国共同

開発工場が存在する他、優良なダイヤモンド鉱山は戦略的価値も高い。

ダイヤモンドは主にレーザー通信に転用されるからだ。

ダイヤモンド鉱山に乏しくなった合衆国にとっては、最適といえる。そのための赤石制圧である。

『鉱山を捨てる気か？司令長』

「島津側のダイヤモンド鉱山は既に閉鎖されています。この5年ほどに坑道を広げた甲斐がありました…ゾーン539と東京湾フロートからの鉱山利用が可能です…」

黒波の総合司令室。司令官は、退去まであと幾ばくかも無い、という状況の司令室で長距離バースト通信を行っていた。軍の本土便に乗り込んだ、都市相だ。

いち早く赤石を脱出したはいいが、どの道日本本土に、彼の確固たる地位は存在しない。

本土から言うなれば離れ島の長。

それが赤石の都市相だ。司令官はそれを内心侮蔑しながらも言葉をつないだ。

「赤石に戦略的な価値などありません…まずは本土の防衛網を確立しなければ…」

『袋の鼠だ……』

赤石には退避令が出ており、軍司令部は黒波メインとなった。

独立部隊 Amphitrite は避難民の救出を主とし、ほとんどの兵力が日本本土に向かっていた。

いまだに赤石は包囲されようとしているが、防衛に関しては日本の艦隊も、敵の性質を理解している。もう二日ほどは持ちこたえるはずだ。

「スーパーキャノンが破壊されたのは幸いでしたな」

「うむ……まだドイツの動きも分からん…注意しろ」

「了解」

手元のボタンを押すと、画面は一瞬暗くなり、再び戦術モニターが復活する。

「今回は防衛戦だ！体制が崩れたら戦線を下げ、赤石に誘い込んでから迎撃しろ！」

合衆国はその物量を武器にエスタ部隊を侵攻させ、損耗は総てフロート空母『キュリオテス』で補われる。

先の太平洋戦役で、キュリオテスは崩壊していたが、合衆国は既に改修を終えていた。

もちろん大破したスーパーキャノンや第四層司令室は存在していない。

だがその巨大な多層構造の破壊は容易では無い。それこそ、巨大な基地が丸ごと海上を移動するのだ。それだけで戦力値は大きく振り替わる。

「地の利は我々に有り、ですか……」

「我々は、地元人間だぞ……？」

オペレーターは特に反応することも無く、画面との闘いに戻った。

ツカサは階下に設けられた海中展望室に出向いた。

特に意味は無い。もうすぐ旧静岡に差し掛かると聞き、海中に没した都市を見たくなっただけだった。

しかしそこに、

「……？」

「……大尉？」

少し前に、奈々瀬大尉がいなくなったと思ったら、展望室に居た。

「どうしてここへ……？」

「大尉こそ」

「……」

ツカサは鉄の階段を一步一步降りる。

足元は完全なガラス張りで覆われ、深い蒼色の世界が摩天楼のよう

に沈みゆく。

「……ここは明るいですからね…何となくです」

「……………」

大尉は窓から、光り輝く海面をじっと見つめている。下にはあまり目を向けない。

ツカサはこのまま黙っているのも気まずいので、適当な話題を出す。

「大尉…何で軍人になったんですか？」

何気ない疑問だ。

現代では、15歳から軍人になることが許可される。大尉がその立場にあることはいたって普通だ。が、

「大尉になるって、結構大変でしょ…………？」

「ええ…まあ」

大尉は少し俯いた。さっきまで見向きもしなかった海底。それを思いつめた表情で眺めた。

何か悪い話題だったかな……

「…私…18年前に両親が死んだんです」

「…？」

戸惑った。いきなり両親の話に吹っ飛んだ。しかもツカサと同じく、両親が居ない。

「……18年前のテロ…ご存知ですか？」

「うんと…少しだけ」

奈々瀬大尉はやや饒舌になる。視線は海底に向けたまま。

「18年前、第一層から四層までの大規模な改修工事がありました…各層の採光ミラーはこの時敷設された、ここまでは？」

「はい…知ってます」

「……そして…18年前の12月8日…採光ミラーを利用したテロが起きました」

「……どういうこと、ですか？」

「……原理は太陽炉と同じです。何万と煌めくミラーは、その全てが独自に動き、制御されています」

大尉は一度口を止めて、目を伏せた。思い出すように、吐き出すように。

「…各々のミラーに当たる光を、角度の調節によって一点に集中すると……どうなります？」

「えっと……つまり……」

ツカサが想像したのは虫眼鏡だ。

当てられた光を、屈折により一点に集める。理屈は同じだ。

「ええ、理屈は。原理自体は、『アルキメデスの鏡』、凹面鏡です。規模が違いますが……集光地点の表面温度は……そうですね……4000度くらい、ですか……」

「くらいって……そんな……！」

4000度。

つまりは鉄すら蒸発し、辺り一帯は白い光の中で灼熱の焰に包まれたことを意味する。

「まさか、大尉の両親は……！」

大尉は伏せていた目を開き、長い沈黙を湛えたあと、おもむろに呟いた。

「はい……」

肯定する、それくらいはツカサにも想像に難くない。

「……焦点の外は驚くほど綺麗でした……一つの焼き痕すら無かった……」

胸が痛い。奈々瀬大尉の呻き。

ツカサに聞いていて欲しいのか、ただ独り言を吐露するように呟くのか、それは分からない。

ただ、滅多に顔を出さない、大尉の哀しさが、少しずつ滲み出てきた。それが辛い。

「私が、生きていたのは、奇跡に近い……両親は死体の、かけらも見つからなかった……当時、母のお腹には……私の、弟が……」

「大尉、もう……いいから……」

「……っ！」

大尉が急に振り向いて、ツカサに向かって駆けてきた。ビンタでもされるのか、と思うくらいの勢いで。

だが、大尉は俯いたまま、顔を必死に見せないようにしながら、手を取った。ツカサの手を。

「た、大尉……？」

同時に顔をツカサの胸にうずめる。

ただし身体を委ねるわけではなく、あくまでも顔だけ、見られたくないのを誤魔かす為に。

大尉の手は柔らかく、心地良い温もりがある。その手が僅かに震えている。

「……ごめんなさい……私は……貴方に、自己憐憫を抱いていたようです……」

大尉の肩を抱こうか、とも思ったが、何となく拒否するようなオーラが見え隠れする。

ツカサはそれを取り繕うように、言葉を繋ぐ。

「……俺……元から母親の記憶なんか無いし……父親は勝手に死ぬし……でも……今でも分かんない……」

もちろん、泣いたりもした。孤独に苛まれた。

ただ、今でも何処かで疑いたい自分がいる。

本当の父親のこともあるが、今なお首に付け続ける、父親からの唯一の贈り物。

その存在は、無意識にツカサを安心させていた。両親が居ない空白も大きい。

だが、それよりも包容力のある物が、ツカサにはあった。

ただ大尉には、まだ成人もしていない、この『少女』には、堪え難い苦痛だっただろう。

「……大尉がどんな空白を抱えたなんて、俺にも分かんないけど……でも、両親が居ないって所は……俺と同じだった……」

「……………」

「……今になって、寂しいって感じるんだ、たまに……大して状況変わ

んないのに」

両親を早くに亡くし、何も寄り処の無い大尉はきつと寂しいと感じたこともあった。きつと。

「……………あの……」

大尉は蚊の鳴くような声で、

「もう少し、だけ……握って置いて下さい……………」
言った。

ツカサはただ手を軽く握り、応えた。

ツカサが奈々瀬大尉の傷に触れたのなら、少なくとも自分にはその義務がある。

大尉はしばらくじつと顔をうずめたまま、静かに目を閉じた。
軍人としてではなく、一人の少女として。

そうしていたのはほんの数分だった。

気持ちが落ち着いた大尉はパツとツカサから離れ、片手で髪を押さえながら鼻を軽くすすった。

出来れば思い切り抱きついて欲しかったが、こればかりは仕方ない。
大尉の胸の感触を密かに諦めていたとき、大尉がちらつと流し目を送り、

「貴方……私の胸ばかり見てたでしょ？」

悪戯っぽく微笑みながら聞いた。

「え……いや……そんなこと……」

「ふふ……もしかして抱きついて欲しい、とか考えてました？」

ズバリ、正解。

ツカサがどう返答すればいいか惑っていると、大尉は一步步寄り、耳元で囁いた。

「……………さわってみます？」

「いやっあのっ！だから……物事にも順序つてものが……その……………」

大尉はさも可笑しそうに肩を揺らし、顔を明るくさせた。

「冗談です。本気にしないで下さい?」

「む……」

目の前の軍人は歳相応の反応を見せ、やはり10代の少女の雰囲気
を湛えていた。

「あ、私が軍に入った理由、お話してませんでしたね?」

「あ、うん……じゃ、一応……」

「両親が死んで、私は親戚に預けられました。苗字もクライトにな
ったんです。一応、日本の国籍所有してるんですよ?」

「そりゃ、日本軍人はみんな国籍もってるだろ」

「む……まあそうですね……私は15の時、士官学校に入学して、
卒業後に少尉認官、それからこの夏の前から Amphitrite
勤務になりました」

大尉は肩の階級章を指で触れ、

「大尉の認官は……半年程前ですね。結構意外でした」

「?」

「仕事も結構手を抜いたつもりだったんですが……自分でも意外です
ね……」

「……大尉は、立派にやってますよ、きつと」

「……きつとが気になりますが」

大尉は踵を返し、階段に足を向けた。

「日本本土に着くまで、貴方達の命は責任を持って保証します。安
心して下さい」

階段の一段目に足を掛けたとき、大尉は不意に振り向いて見せた。
そして、

「さっきのことは、忘れませんか、ね?」

腰が砕けそうなくらい魅力的な笑みで、そう言い残した。

狭苦しいコックピットに、赤い光が点滅した。画面の右端に現れた『ALERT』表示。

確認せずとも分かる、誘導ミサイルだ。

メタトル・カスタムを駆る新美 捺姫は、軽く舌打ちをして足元のレバーを踏み込む。

既に自動的にチャフを発射しているはずだ。あとは急速回避運動でことは足りる。

機体が急上昇し、鉄が軋む音が微かに聞こえる。

すぐ左横を、誘導ミサイルが擦過していく。開戦から何度も行つた一連の動き。

「もうウンザリね…皆見少尉！第一射の用意は！」

『5分待て！』

「3分で！」

返事も聞かずに無線を切つた。新たな敵機が接近してきたからだ。

VTOLにより空中に静止できるメタトルは、戦場においては的にもなりやすい。

常に動いていなければ、それは即死につながる。

「航空母艦を沈めます！援護を！！」

『艦砲射撃を集中している！不用意に近づくな！！』

「チ……………」

捺姫は今日何度目かわからない舌打ちをして、適当な返事をして機体を走らせる。

どのみち混戦している。航空母艦まで辿り着けるかも微妙だ。

そう。混戦しているのだ。

「見えた…」

ツカサの足元、分厚くも限りなく透明で磨かれたガラスの向こう、沢山の四角形が見える。

いびつな形をした四角形、互いにぶつかり合って原型を留めない四

角形。

近づくほどに解る。

四角いビルの屋上だ。

そのほとんどが傾き、崩れ、海底の彩りに吞まれて沈んでいる。

まるで海底遺跡だ。

海中にいるはずなのに、屋上を見下ろすうちに空に浮かぶ感覚を覚える。

「ツカサ？」

そんな感覚を無理矢理覚ました声。

間違えようがない、名雪の声だ。

「どうしてここに…？」

「ツカサこそ」

どっかで聞いたやりとりだな。

「ここ、さっきまで大尉がいたでしょ？」

「え…ああ…」

「……………そ」

「？」

名雪は無表情で呟いた。笑うでもなく、怒るでもなく、いたって普通の表情だ。

「……………名雪？」

「ん？」

名雪が振り向いた。

よかった、もとの表情だ。

「いや……………何も……………」

「…？」

もとの表情つてのは、名雪がたまに見せる『普通の表情』。

笑顔というほどでもなく、無表情というわけでもない、けど爽やかで軽やかな表情。

「見えた…旧千葉…」

「もう日本本土か…」

「以外と殺風景なんだ……」

「……何を期待してたんだ？」

名雪は少し難しい顔をして、

「……なんか、鉄骨がいっぱい浮かんでて、ガラスが光ってて、ビルの中を進んでくみたいな……天国っぽい感じ」

お前の言うシャングリラの定義を知りたい。

「鉄骨がアーチ作る天国って何だよ？」

「……文句ある？」

「いや」

このやりとりも、いたって普通だ。

そんな名雪の期待を大きく裏切った海底都市。

「ん……？なんか光った？」

「え？」

「ほら、向こう」

名雪が前方の海域を指差すと同時に、ガラスがびりびりと震えたのは、

「………またっ！」

「………」

気のせいじゃなかった。

『全員！上に上がって下さい！』

突然の船内放送。スピーカーからは、いくらか劣化した奈々瀬大尉の声が響いた。

声色から、相当慌てていると分かった。

名雪がちらっとツカサを見遣る。名雪の瞳は、『何が起きたの？』と訴えていた。

決まってる。どうせまた戦争だ。

そう信じたくはなかったが。

階段を幾つも駆け登り、大尉のもとへ向かった。途中何人かの人を

見かけた。

如月が沈めた旅客船の乗客だろう。皆一様に濡れて疲れきっていた。怪我人は居ないみたいだったが。

「ツカサさんっ！」

大尉がツカサに向かい手招きをして、耳元で深刻な口調で続けた。耳元にかかる吐息がくすぐったい。

……いい匂いだな……

そんなこともお構いなく、

「東京湾で戦闘が確認されました。混戦してますが、イージス艦に連絡していますから」

「回収してもらえますか？」

「ええ」

大尉が軽く頷くと共に、吐息が首筋に当たる。思わず身震いしそうになる。

この状況下でもこんなことを考えられるのも、一種の進歩だ。多分。「……この船、狙われたりしないですよね……？」

一抹の不安はそれだ。混戦している。

つまり敵味方の火線が入り乱れ、民間船にとっては危険極まりないということだ。

それは海中も、恐らく同じ。

「イージスは後方で待機中ですから、そこまで辿り着けば……まあ、おっしゃる通り、危険です」

大尉はより一層声をひそめてささやく。

後方、というのはツカサ達に近い、というわけではない。日本本土側が『後方』なのだ。

今まさに本土に向かうこの船は、敵も味方もない鉄の嵐を突き進むのだ。

人はこれを無謀という。

「時間が、ないんですよ……」

「え？」

大尉は気難しい顔で続けた。

「…船体後部に搭載されていたバッテリーが無い以上、あとは船内発電しかない…分かりますね？」

「……もし電源が落ちたら…」

「海の底です」

聞けば既に二つの発電機のうち一つは魚雷で吹っ飛び（犯人、如月、後ろバッテリーも同じく捨てた。船体ごと（実行犯、大尉）。

電力供給が可能なのは、最大限甘く見積もって1時間半。

大尉の頭脳の限りを尽くして出した結論だ。よけいに信憑性が高いじゃないか。

「……貴方が落ち着いてるので安心しました。パニックは避けたいですから」

「名雪には…？」

「………」

大尉は目線を促す。

ツカサの斜め後ろ、名雪が一人の年寄りの傍で談笑している。

見るからに身体の弱そうな、ばーさまである。

そんな老婆と名雪が、楽しそうに話している。

「貴方が決めて下さい……………」

大尉は肩をそつと撫でて、操縦席に戻った。恐らくさっきの船内放送の続きだ。

予想に違わず、大尉の落ち着いた、澄んだ声が聞こえた。

『…現在、暗礁海域を潜航中です。いくつかの振動が来ますから、席について下さい…間もなく、迎えの船が来ます。それまで、そのままで』

暗礁海域なんて言葉は、多分ピンとこないだろう。要は瓦礫や破片が充満した海域だ。

もちろん暗礁海域なんて嘘だ。

これから来る振動は『戦争』。悪意によってもたらされる狂気。その中を突っ切るのだ。

船が加速した。残り少ない電力を、一気に加速に使うのだろう。本当に暗礁海域を抜けるなら減速するべきなのだが、そうも言ってもらえないようだ。

大尉の言った、『迎えの船』。

それが悪い物でないと、ツカサは信じたかった。

イージス艦『しらぎく』艦橋――

日本有数の索敵能力を持つ『しらぎく』は、既にツカサ達潜水艇の影を認識していた。

もちろん放置しているわけでは無い。発信されている所属識別信号は、今まで見たことのないパターンなのだ。

艦橋の近代式ホログラムでは、『Unknown^{アンノウン}』と表示されている。

レーザー式の立体映像は、艦橋の中央に巨大な天球を浮かべ、刻々と戦況を変化させる。

水平線が擬似的に再現され、その上にいくつもの戦艦が走っているため、まるで水をたたえた金魚鉢が浮かんでいるようだ。魚雷が金魚、船は水に浮かぶ海藻とでも思えばいい。

「ロシア艦隊は後退！第七小隊は突出するな！」

「アンノウンは！」

「現在接近中です」

艦橋に居る全ての人間が、アンノウンの出現と動向を知り、そして全員が頭に疑問詞を浮かべた。

何故？何が？いつから？何処へ？何処から？何を？どうやって？どなた？

あらゆる可能性が溢れ、霧散していく。

ツカサ達の『MHSS-003型高速潜水艇』は、観光島『美星』で新開発された最新型旅客艇。更に、赤石付近で使用される所属識

別信号は、日本本土にとっては非常に解りにくく、見慣れないものである。

軍用に関しての信号の統一は徹底されているが、民間の、しかも最新型となるとイージス艦での識別は間に合わなかった。

『アンノウン known』表示はそのためであった。

「アンノウン、船速を上げました！」

「深度、120mと推定！」

ただでさえ混戦する戦場に、民間船が。正気の沙汰ではない。

そのとき艦橋前方の、無線状況を表示する画面に変化が見てとれた。

「艦長！アンノウンの無線連絡です！」

「何？」

キャプテンシートに腰掛けた男は訝しい顔を隠せない。

「繋げ！」

「はっ！」

画面に一本のラインが走った。スピーカーがノイズを吐き出すと共に、ラインが激しく波打った。

「こちら、赤石方面観光島、美星発003型潜水艇！避難民を乗せ、本土に向かっている！」

「赤石……？」

艦長は慎重に言葉を選んだ。

「現在混戦している！保護する余裕は無い！」

「……残り航続可能時間はあと15分！艦も損傷している！」

パイロットと思われる男の声は、非常に緊迫していた。破れかぶれ、といった感じだ。

「……回収艇をまわす。5-23エリアにて待機しろ」

『了解、通信終わり！』

「チ……」

艦長は舌打ちを返答の代わりにして、無線を切らせた。

今は民間船に構っている暇はない。すぐ目前には吹き荒れる嵐のような、『最前線』が広がるのだ。一度気を抜けばイージス艦は沈む

しない。

「…『はくつる』轟沈！アルツエルン空母から熱源多数！！」

「弾幕！」

僚艦である『はくつる』は、ロシア艦隊旗艦アルツエルン級空母からの大量のミサイル、『スコール・ミサイル』を受けた。まさに鉄と火薬の雨だ。

基本的に艦船の船首や甲板は分厚い装甲に守られている。

が、より多くの火炮を戦線に向ける為、敵に対し垂直（つまり横向き）に位置していた『はくつる』は、あっさり脇腹を突かれ轟沈した。

雨に閉じた傘を突き立てても無意味のように、降りかかるミサイルに弾幕はほぼ無抵抗に終わる。

『しらぎく』の艦橋も激しい揺れに見舞われ、中央立体映像はざらついた空間を見せた。『アルツエルン級、なおも侵攻。艦隊各構成は現状を維持』

「無理な話だ…！」

艦橋の何処かから、そんな誰とも分らない声が漏れた。

皆見 圭は16歳。高校1年生である。

新美 捺姫も同様だが、誕生日が1月の関係で15歳だ。

二人とも既に『少尉』に認官されている。

これはかなり異例のことだが、唯一、旧東京湾基地では珍しいことではない。

赤石も日本本土も、正規軍は15歳から入隊が可能だ。例外的に Amphitrite は16歳からだ。基本的には満15歳を過ぎれば自己申告により入隊出来る。

しかし少尉（少・中・大尉は『士官』と分類。准尉は『準士官』）認官は平均的に20歳を越えてからである。

もちろん奈々瀬も大尉ではあるが、これは Amphitrite の

体制によるものだ。これも異例といえる。

そんな異例・例外・特例まみれの軍人でも、圭や捺姫は少し特殊だった。

15、6歳の少尉認官。これは、彼らに宿る能力によるものだと言
う者もいる――

「ちょ…つと？」

「うん？」

名雪に肩を揺すられ、ツカサは反射的に窓を見上げた。
予想に違わず、名雪は窓に不安げな表情を映していた。

「あれ……………」

「？」

それは遙か下方、真つ暗闇の海底都市の一画に、小さな光点が見え
た。

そびえ立つ遺跡^{ビル}に阻まれ、現れては消え、見えては見失いを繰り返
す。

明らかに不自然な灯。

蒼色の淡い光はアクアマリンの輝きを彷彿させた。つてのは言い過
ぎか。

その光の真上に差し掛かるうかというとき、不意に無線が割と鮮明
な音声を奏でた。

『…そこは危ない…すから…………く』

声のする操縦席への扉は、開いていた。とりあえず回りを見渡して
からこっそり入る。

どうせ扉は客席からは死角になるように、通路が直角に曲がってい
る。

対テロ用…？

「大尉…？」

「シッ」

大尉は手で制した。

スピーカーからは緊張感に溢れた、同い年くらいの声が聞こえた。男だ。

『赤石の旅客船だな？砲狙撃に入る、ただちに減速しろ！』
もう片方の手で無線の応答スイッチを押す。

「こちらは赤石独立特殊部隊、Amphitrite中央司令部所属、奈々瀬・ルノ・クラート大尉ですっ！回収艇ですか？」

『いや、こちらじゃない、……………対ショック防御！！』
「な……」

『早く！！』
言うより早く、嫌な予感がした。その悪寒は、久々のアラーム音で決定的となった。

「本艦直上！ロシア艦、いや空母です！」

「アルツエルン級……？」

と、そのとき別の音声がスピーカーを震わせた。今度は聞き慣れた声だ。

『お姉様！！？』

「な、香恋！！？」

例の巨乳美少女。名雪の無二の親友。

ツカサは素直に安堵した。とりあえず友人（？）の一人を失わずに済んだ。

「香恋？どこから？」

と、名雪。

『そこから20キロ西の軍艦からですわ！今、何処ですの！？』

と、香恋。

「……………蒼海中佐の……」

と、大尉。

「軍艦……？移送便のこと？」

『ええ、今、Amphitriteがそちらで戦闘を確認しましたの。増援を出すそうですわ』
「確かですかっ？」

と大尉が引き継ぐ。

『大尉？ですわね、父に代わりますわっ』
と再び香恋。

「シーテキスト通信（海中通信）……ですか……」

『つて…聞いてないし………』

無線から再び響いたのは、さっきの男子の声。

『海面のロシア艦は確認しているな！！？今から砲狙撃戦を開始する！回避行動をとれ！！』

ツカサがその内容を少しも理解しないうちに、無線は遮断された。狙撃。狙撃されるのか、それとも狙撃されるのかも分からない。

「……………マジかよ……………」

どこからともなく、そんな呻きが聞こえた――

M E S T A - 0 0 1 型 『サキル』――

皆見 圭少尉が駆る、海中作戦活動を前提とした潜水型エスタ。

海底に眠る、幾重にも重なるビル群の中で、サキルは『中華帝国製エスタ専用長距離狙撃銃 E S V D - 0 0 ドラグノフ』を装備している。

「深度修正、潮速値を請求」

圭が頭上に備え付けられた四角い箱を引き出す。

箱には望遠鏡のような照準器が埋め込まれており、左目の前に当てると照準器の中心に光が宿る。狙撃体制である。

圭は照準器の中に描かれた『十字』を睨みながら、独り言のように無線を続けた。

返答は同じように平坦で落ち着いたものだった。

『申請を許可します。潮速、海流、誤差修正データを送信。問題ないか？』

「アイ・レディ。衛星リンクは出来るか？」

『許可します。レーダーとリンク……以後の誤差修正は少尉に譲渡する』

「結構……」

丸い照準器には頭上の海面が、というより海面に浮かぶロシア艦隊旗艦、アルツエルン級空母が黒く映っている。

度重なるミサイルやエスタの猛攻にも耐えている、言うなれば非常に厄介な旗艦だ。

十字の中心は切り取られたようにぽっかり空いている。

その中心が、ドラグノフの弾丸の通る地点である。

圭にしてみれば、どんなに十字に開いた空間が狭く、目標となるロシア艦の船底が中央に入ろうと、弾丸が直撃する可能性は無いにも等しい。

海流、潮速、水抵抗は弾丸にとっても厄介だ。

「大尉……」

さっきまで切っていた無線を再び入れ、旅客船に搭乗しているという奈々瀬大尉を呼び出す。

現状、最も『近く』にいる軍人である。

『呼びましたか？』

明らかに嫌そうな返事が来た。

「そちらのセンサーをリンクさせる！はくつるを中継して二基のセンサーを同調しろ！」

『……長基線照準射撃ですか？』

さすがに判断力がよろしい。赤石方面の軍人にしてはかなり優秀だろう。

「そうだ！後の精密動作はこちらがやる！」

『当たり前です。狙撃は任せます』

「任された」

そう言った僅か1分後にはデータが転送された。

イージス艦の方にもデータリンクを申請しておいた為か、対応は異常に早かった。

それでも、照準器を凝視しながらの複雑なリンク操作は、尋常でなく神経を使う。

圭の頭の中では複雑かつ正確な計算と、弾丸の軌道、物理的演算が入り乱れる。

それも、無意識のうちに。

「そろそろ……いきますか……」

『皆見少尉、状況を再度確認します』

「アイ、レディ」

『敵艦は第二戦速で接近中。サキルとの直線距離は約300m。潮速、海流、重力の誤差に留意』

「アイ・レディ」

『アルツェルン級の弾薬庫を一撃で貫通、問題ないか』

「……任せてろ」

『任せます』

「……ヘスタ・ラ・ビスタ（また会おう）……」

超高電圧を二本の誘電体に流し、フレミング及びローレンス力による運動量を用い、同じく誘電体の砲弾丸を射出する。

いくら実物の狙撃銃『ドラグノフ』を巨大化させたとはいえ、同じように火薬による弾丸の加速は危険である。

いわゆる、無謀。

より長距離の狙撃に対して開発されたのが、電磁砲、『レールガン』だ。

圭はまさに全長13mにもなるレールガンを、コンマ2桁のレベルの微調整で操っているのだ。

「……相対距離は200……兵器庫の炎上は±15の間……最大許容誤差は1.6351×10の-7乗……」

引き金に力を込める。

最後の瞬間まで気は抜けない。何度経験してもこの瞬間だけは緊張する。

なにしろ、銃口の僅かなズレも、何百m先では数十mの誤差、つま

りは死に繋がる。

手が汗ばみ、手首が痙攣する。

一度まばたきをする度に目標が消えるのでは、そんな葛藤が、皆見圭の中では渦巻いている。

ターゲットサイトが電子ロックをかけ、甲高いアラームが鳴り響く。間髪入れず、圭は引き金を目一杯押し込んだ。

「撃った……！」

奈々瀬大尉が呟く。

「え……っ……！」

名雪が声が上げずとも、意味はすぐに分かった。眼下の光から、細く僅かな一筋の閃光が走った。

泡を砕き、深遠の海を引き裂いて、直径50mmの鉄甲弾は真っ直ぐ海面に向かい突き刺さった。

瞬間、

「！」

メタトルを駆る少女、新美 捺姫少尉の遙か前方、一際大きな威容を放つロシア艦隊旗艦が、オレンジ色の火球に吞まれた。

圭は寸分変わらず、ロシア旗艦の火薬庫を撃ち抜いた。

積載された化学燃料、弾薬は容赦無く跳ね回り、荒れ狂う海に赤い大輪を咲かせた。

「……こちら新美小隊長、敵旗艦の撃沈を視認！艦隊の陣形が崩れました！」

『確認した。本艦隊はこのまま駆逐戦に移行する！』

「アイ・レディ！」

捺姫のすぐ脇を、一発の弾丸が過ぎ去る。反撃の砲火だ。

「……アンノウンは上手くいつているのかしら……」

中華帝国空中揚陸艇『朱雀』^{スツェー}
中央議決室――

『処遇は…分かっているな？』

「幾分、複雑な案件ですしね……解りかねます」

『今、貴様を軍法会議処分にしても意味はない』

「……………」

薄暗い議決室。馬鹿でかい液晶モニタは光源となって、如月を照らし出す。

『多国籍軍属制度が役にたった…な…』

「……では私の処遇は」

画面の向こうのはほくそ笑み、

『不問に付す』

そう言い残した。

「はっ！」

光源が消えた部屋で、如月は独りごちた。

「……不問ね……ペルセ？』

『聞いてた』

オリュンポス十二神特有の脳伝達通信。モニタの機械的な音声にも似た反響を醸し出すが、やはりこちらの方が、聞いていて心地いい。

『聞いてた？』

『ああ……どちらにせよ、奈々瀬大尉とやらの始末は急務ではなくなった。不問に付すというのは利用出来る』

『……ペルセ、なんか隠してないか……？』

『別に……？それより、『教会』が動き出した。厄介だよ』

『……ギリシャが、ね』

うんざりする。

「一体人間はどれだけ戦争をややこしくすれば気が済むのだ。これ以上戦争が複雑化しても、今度は各勢力の動きも読みにくくなる。」

「まったく、いつもこいつも、」

「ん、そろそろ頃合いだよ」

調子に乗って――

「直撃……？あの距離からですか……」

「……」

窓から、今度ははつきり蒼い光の正体が見えた。

海中専用のエスタ、としか思えない。

巨大な狙撃用ライフルを抱え、深淵なる海底で佇む人型の影。後ろ姿はスマートでありながら、どこか力強く浮遊している。

その足先から、鉄の板が何枚も落ちた。

一般にバラストと呼ばれるものだ。

機体の錘であり、足枷でもある。一枚一枚はかなり重く、海底の砂を音もなく巻き上げ、沈んでいった。

鉄板が重なり、小さくぶつかった音が聞こえた。

まるで錆びたコインが、二重、三重の音を奏でるように。

「うあつ！」

新美 捺姫の駆るメタトル・カスタムが大きく揺れた。

敵の弾丸が、音速を越えて突進してきた。

胸の装甲がはじかれ、内部の黒い骨格がさらけ出される。

「あつたま来た、もー！！」

なんとか海面すれすれで機動を保つが、そろそろ機体も限界にきている。

垂直離着陸用のエンジンも咳込むようになり、揚力も無いに等しい。

「仕方ないわね…高解析電子戦の用意！」

『…混線している。ハッキングを感知されたら終わりだぞ！』

「馬鹿ね…」

捺姫は開戦前に使っていたキーボードを引き出す。

「よつと…」

同時に機体を降ろすのも忘れてはいない。

手近な空母のサイドデッキに着底し、作業員が足元を走り回るのを視界の端で眺める。

まるで巢に群がる蟻。

「敵艦隊の指揮系統を混乱させるだけよ。どうせロシアもネットワーク経由指揮でしょう？」

『まあ…ね』

できればもつと自信満々に言ってほしい。

「なら、」

言うより早く、コックピット内の画面が消えた。だがコンソールやレバーのライトは点いたままだ。

その目まぐるしい点滅は臨戦状態特有のものだ。次の瞬間には、メインの画面が朱に染まった。

下から流れていく文字の羅列。戦術P2P^{ピ・シー・ピー}の状況、回線の接続状況。

一般人が見ても、何一つ解らないであろう文字の奔流。それもそのはずだ。

民間人には理解出来ないように、複雑かつ、既存のどの機械言語にも当てはまらない文法を持つ。

だが現用のプログラム言語の中では、最も効率的で汎用性の高いものである。

当然、新美 捺姫はその全てを熟知している。

その能力は並の、いや一級のハッカーにも勝る程だ。

「やっぱり指揮管制システムが処理落ちしかかってる……ハッキングか……」

恐らくはバッファ・オーバーフローで無理矢理、指揮権限を奪ったか。そんな推測が頭の中を流れていく。

「オーバーフローか…品の無い……今時そんな手使うかしら……」
だが、やはり推測に違わず、プログラムを見れば解る。
間違いない。バッファだ。

バッファ・オーバーフローは、相手のプログラムに大量のデータを流し、プログラム内に確保されたメモリエリアをパンクさせ、プログラムの暴走を促すものだ。

ただし運にも左右されるので、実際問題、効率的とは言えないだろう。

「押し込み強盗か……確かに効果はあったけど……」
だが問題はない。

既にシステムは復旧し始めた。

確かに品の無い、古めかしい手口ではあるが、逆にそれが擦姫を本気にさせた。

「さて……イかせましょっかね」

静かな反撃が、タイピングと共に始まった。

第三章 摩天楼の海（後書き）

そうですね、次回はハッキング関係かも。
ついでにギリシャも登場します。

そうそう、サブタイはまだ決めてません。

では、お楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4911f/>

世界と浮島と破戒神 ~ Levitation World ~

2010年10月12日01時29分発行